

富山市

ひやく づか すみ よし
百塚住吉遺跡

ひやく づか すみ よし
百塚住吉B遺跡

ひやく づか
百塚遺跡

発掘調査報告書

— 主要地方道富山八尾線道路改良事業に伴う発掘調査報告 —

2009

富山市教育委員会

富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書(正誤表)

頁	行/図	誤	正
巻頭原色写真2		方位記号が二重に印刷されていますが、向き自体は正確です。	
21	3	(第10・11図)	(第11・12図)
70	39	(2)出土遺物の概要	(2)出土遺物の概要(第47～50図, 第9・10表)
94	6	(2)出土遺物の概要	(2)出土遺物の概要(第69～74図, 第11～13表)
110	18	(2)出土遺物の概要(第76図)	(2)出土遺物の概要(第76図, 第14表)
167	14	(第111図)	(第111図, 第21表)
252	図2	左端の拓本がぶれているので、別紙を当該部分に差し込んでください。	
255	図4	左端の拓本がぶれているので、別紙を当該部分に差し込んでください。	

富山市

ひゃく づか すみ よし
百塚住吉遺跡

ひゃく づか すみ よし
百塚住吉B遺跡

ひゃく づか
百塚遺跡

発掘調査報告書

— 主要地方道富山八尾線道路改良事業に伴う発掘調査報告 —

2009

富山市教育委員会



百塚住吉遺跡 (A・B地区)・百塚遺跡 (A地区) 平行投影 (オルソ) 写真 (合成)



百塚住吉遺跡 (A・B地区) 平行投影 (オルソ) 写真 (合成)



百塚住吉遺跡A地区完掘状態（南西から、右は神通川、左上は日本海）



百塚住吉遺跡A地区完掘状態（北東から、奥羽山丘陵が南西に続く）



百塚住吉遺跡B地区完掘状態（北西から）



百塚住吉遺跡C地区完掘状態（東から）



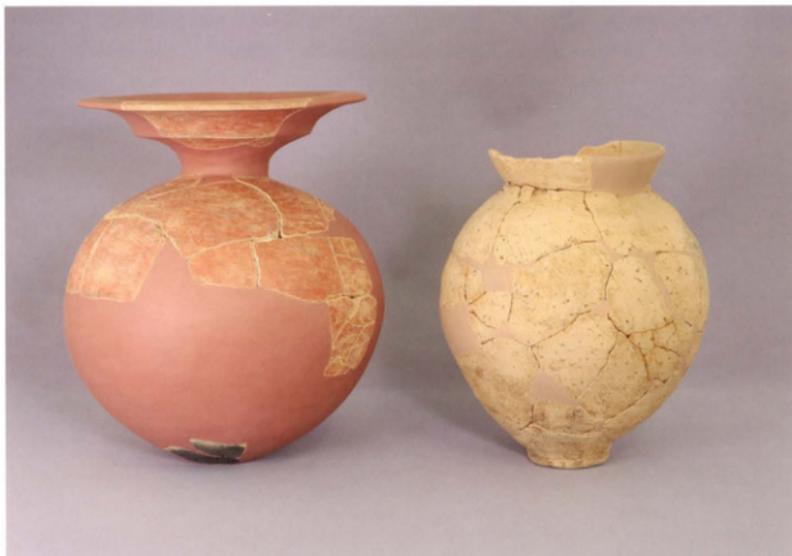
百塚住吉遺跡B地区SZ04完掘状態



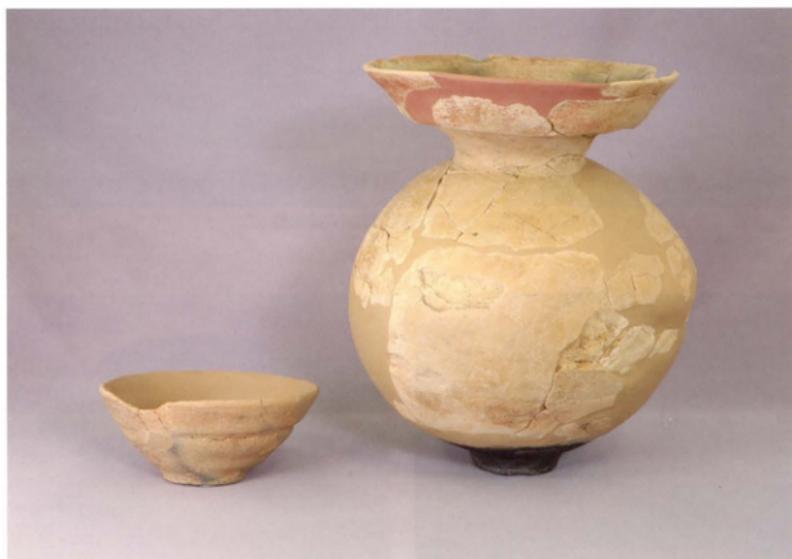
SZ04くびれ部遺物出土状態（東から）



SZ04くびれ部出土一括土器



百塚住吉・百塚SZ02 出土一括土器（左：百塚遺跡A地区 右：百塚住吉遺跡A地区）



百塚遺跡A地区SZ03 出土一括土器

序

富山市は、東西60.7km、南北43.8kmに及び、富山県全体の約29%、1,241.85km²という広大な面積を占めます。雄大な立山連峰から富山湾の海岸線までの豊かな自然環境をもち、北前船航路や飛騨街道での交易・業業・養蚕など、古くからの歴史や文化をもつ都市であります。

先人たちが育んできた貴重な文化財は、富山市の歩んできた歴史を知るためのかけがえのない財産であります。これらを保護し、未来へ継承していくことは、私たちが果たさなければならない責務といえます。

富山市におきましては各種開発に伴う発掘調査が随所で行われ、先人たちの歴史の一端が明らかになってきました。特に呉羽山丘陵帯には、旧石器時代から近世まで200ヶ所に及ぶ遺跡が所在し、市域の約1/5の遺跡が集中する、まさに「遺跡の宝庫」といふべき恵まれた自然・歴史環境にあります。

このたび、主要地方道富山八尾線道路改良事業に先立って発掘調査いたしました百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡は呉羽山丘陵北部に位置し、弥生時代後期～古墳時代前期の建物や井戸、古墳などを確認しました。特に、北陸でも最古段階の前方後円墳をはじめとして、前方後方墳や方墳、円墳など多様な出現期古墳が発見され、当時の社会状況を解明するうえで貴重な例として注目されたところであります。

このような調査成果をまとめた本書が、私たち共有の財産である埋蔵文化財を理解していただくうえで参考になれば幸いです。

最後に、調査にあたりご理解・ご協力をいただきました地元松木・百塚・宮尾地区の皆様をはじめ、富山県道路課、富山県富山土木センター、富山県企業局、文化庁、富山県教育委員会生涯学習・文化財室及び各関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

富山県教育委員会
教育長 麻 晶 裕 之

例 言

- 1 本書は、富山市宮尾・松木地内に所在する百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、富山県（土木部道路課）が事業主体となる主要地方道富山八尾線道路改良事業に伴うもので、富山県富山土木センターの依頼を受け、平成17～20年度に富山市教育委員会が受託して実施した。平成17～19年度発掘調査については、富山市教育委員会の監理の下、株式会社パスコおよび佐伯建設工業株式会社（現・あおみ建設株式会社）に委託して実施した。平成20年度発掘調査は富山市教育委員会が直営実施（応幸工業株式会社に掘削業務委託）した。なお、現地発掘調査・出土品整理・報告書原稿作成・報告書編集期間、発掘調査面積、調査担当者、監理担当者、試掘確認調査担当者は次のとおりである。
平成17年度 現地発掘調査（百塚住吉遺跡A地区） 平成17年10月13日～平成17年12月15日
発掘調査面積 800㎡
調査担当者 ㈱パスコ 伊藤雅乃・小柳太一・小柳リラコ
監理担当者 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 学芸員 大野英子
出土品整理（基礎整理） 平成17年10月19日～平成18年3月10日
調査担当者 伊藤雅乃・小柳太一・小柳リラコ（監理：大野英子）
試掘確認調査 平成18年2月27日～平成18年3月10日
調査対象面積 1,192㎡
調査担当者 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 学芸員 大野英子
調査結果 全域に埋蔵文化財の所在を確認（百塚遺跡A地区の大部分）
平成18年度 現地発掘調査（百塚住吉遺跡B・C地区、百塚住吉B遺跡）
平成18年9月28日～平成18年12月5日
発掘調査面積 百塚住吉遺跡 1,640㎡ 百塚住吉B遺跡 300㎡
調査担当者 佐伯建設工業㈱ 作田一耕・下島健弘・高階 茂
監理担当者 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 主任学芸員 中本八穂
出土品整理（基礎整理） 平成18年12月5日～平成19年3月9日
調査担当者 作田一耕・下島健弘（監理：中本八穂）
出土品整理（本格整理：百塚住吉B遺跡） 平成19年2月10日～平成19年3月20日
調査担当者 作田一耕・下島健弘（監理：中本八穂）
出土品整理（本格整理）・報告書原稿作成（百塚住吉遺跡A地区）
平成18年9月20日～平成19年3月9日
調査担当者 ㈱パスコ 伊藤雅乃・小柳太一・小柳リラコ・佐藤好司
（監理：中本八穂）
平成19年度 現地発掘調査（百塚遺跡A地区） 平成19年7月23日～平成19年11月7日
発掘調査面積 1,300㎡
調査担当者 ㈱パスコ 伊藤雅乃・小柳リラコ・後藤太一
監理担当者 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 主任学芸員 小黒智久
出土品整理（基礎整理～報告書原稿作成） 平成19年11月1日～平成20年3月21日
調査担当者 伊藤雅乃・小柳リラコ・後藤太一・佐藤好司・高梨雅幸
（監理：小黒智久）
出土品整理（本格整理：百塚住吉遺跡B・C地区）・報告書原稿作成（百塚住吉遺跡

	B・C地区、百塚住吉B遺跡)	平成19年9月1日～平成20年3月21日
	調査担当者	佐伯建設工業㈱ 作田一耕・下島健弘・西梶利昭(監理:小黒智久)
	試掘確認調査	平成19年11月19日～平成20年11月21日
	調査対象面積	1,325㎡
	調査担当者	富山市教育委員会埋蔵文化財センター 主任学芸員 小黒智久
	調査結果	150㎡に埋蔵文化財の所在を確認(百塚遺跡B地区)
平成20年度	現地発掘調査(百塚遺跡B地区)	平成20年8月7日～平成20年8月27日
	発掘調査面積	150㎡
	調査担当者	富山市教育委員会埋蔵文化財センター 主任学芸員 小黒智久
		同 嘱託 秋葉保香
	出土品整理(基礎整理～報告書原稿作成)	平成20年8月28日～平成20年12月26日
	調査担当者	小黒智久・秋葉保香・細辻嘉門
	報告書編集・印刷・配布	平成21年1月5日～平成21年3月24日
	編集担当者	小黒智久

- 平成19年度において、百塚住吉遺跡C地区出土鉄滓の金属学的分析および百塚住吉遺跡B地区出土鉄器の保存処理を株式会社吉田生物研究所に、百塚住吉遺跡A・B地区および百塚遺跡A地区の三次元測量図合成を株式会社バスコにそれぞれ委託して実施した。これらの業務監理は小黒が行った。
- 平成20年度において、金沢学院大学美術文化学部文化財学科(中村晋也准教授)のご配慮、ご指導の下、百塚住吉遺跡および百塚遺跡出土土器・土製品の赤色顔料調査を行い、結果を第4章第7節にまとめた。記して、感謝申し上げます。
また、百塚遺跡の土壌分析(軟X線写真撮影・観察)をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。業務監理は小黒が行った。
- 現地発掘調査・出土品整理にあたり、次の諸機関・個人からご協力・ご教示を得た。記して、謝意を表します(50音順・敬称略)。
機関 牛ヶ首用水上地改良区・金沢学院大学美術文化学部文化財学科・山栄土木株式会社・曹洞宗友仙寺・富山県企業局・富山県教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室・百塚町内会・文化庁・松木町内会・宮尾町内会
個人 青山博樹・赤澤徳明・赤塚次郎・日粕 健・伊藤雅文・今里道真・入江文敏・大谷 基・岡本淳一郎・大橋泰夫・尾崎高宏・加部二生・菊地芳朗・車崎正彦・酒井 中・佐藤聖子・澤田秀実・高橋浩二・滝沢規朗・田中 尚・田嶋明人・辻 秀人・土肥研晶・鳥居美栄・中司照世・中村晋也・橋本澄夫・橋本博文・土生田純之・春田謙次・久田正弘・広井造・藤沢 教・前田清彦・町出賢一・宮田進一・山田悟郎
- 本書の編集は、富山市教育委員会埋蔵文化財センター職員の協力を得て、小黒智久が行った。また、文責は目次および各項目の末尾に示した。
- 調査にかかる図面・写真・出土品は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。

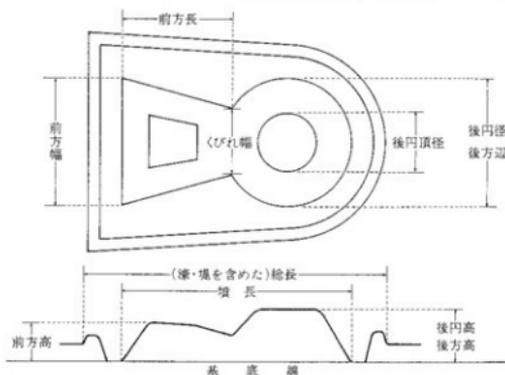
凡 例

- 遺構略号は、墓：SZ、竪穴建物：SI、土坑：SK、溝：SD、ピット：P、性格不明遺構(方形周溝状遺構・溝状遺構)：SXである。

- 2 挿図の方位は真北、標高は東京湾基準水位 (TP) による海拔高、座標は国土座標第Ⅱ系 (世界測地系) の値を示す。
- 3 遺物実測図・遺構平面図での表現内容は、次の通りである。



- 4 墳墓の計測地点については、基本的に『前方後円墳集成』(近藤編1991ほか) に準拠している。



(近藤編1991)

- 5 本書では、主体をなす弥生時代後期～古墳時代前期の北陸の主な土器編年の対応関係について、目安として次のように認識している。あくまで編者 (小黑) の見解であり、その責は編者に帰す。

土器編年対照表

時期	型式名	透明編年 (田嶋1986a)	再考透明編年 (田嶋2006)	神典 (大野2003)	佐野台地 (岡本2006)	越中 (高橋2000)	越中 (高橋2005)	新潟シンボ (1993)	集成編年 (広瀬1991)	
弥生時代	後期前半 留桶式	1群	留桶式	V-1			後期1期			
				V-2				1期	1期	
				V-3		下老子1式	後期2期			
	後期後半 法仏式	2群	法仏式	2-1		下老子II-1式	後期3期	2期	2期	
				2-2		下老子II-2式				
	終末期 前期	月影1式	(4)	月影式	3-1	I	下老子II-3式 (+)	後期4期	3期	
					3-2	II-1	下老子III-1式	山内並行1期	4期	
		月影II式	3群	月影式	II-2	II-2	下老子III-2式			
					II-3	II-3	下老子III-3式	山内並行2期	5期	4期
					II-4	II-4	(+)			5期
終末期 中葉	白江式	白江式	4-5群	III	下佐野式	山内並行3期	6期			
古墳時代	前期前半 古府ケルビ式 (+)	古府ケルビ式 (-)	7群 8群		IV		布留並行1期	7期	1期	
								8期	2期	
	前期後半 高島式 (+)	高島式 (+)	9群 10群		V			布留並行2期	9期	3期
									10期	4期

目 次

第1章 経過	1	(小黒智久)
第1節 試掘確認調査の経過	1	
第2節 発掘作業の経過	1	
第3節 整理等作業の経過	3	
第2章 遺跡の位置と環境	4	(小黒)
第1節 地理的環境	4	
第2節 歴史的環境	5	
第3章 既往の発掘調査成果と今次発掘調査の概要	11	(小黒)
第1節 既往の発掘調査成果	11	
第2節 今次発掘調査の概要	14	
第3節 平成17年度調査の成果(百塚住吉遺跡A地区)	16	(小柳太・小柳リラコ・佐藤好司)
第1項 調査の方法と経過	16	
第2項 基本層序	17	
第3項 検出遺構の概要	21	
第4項 出土遺物の概要	40	
第5項 小結	49	
第4節 平成18年度調査の成果(百塚住吉遺跡B・C地区, 百塚住吉B遺跡)	51	(下島健弘)
第1項 調査の方法と経過	51	
第2項 基本層序	52	
第3項 百塚住吉遺跡B地区の調査成果	57	
(1) 検出遺構の概要	57	
(2) 出土遺物の概要	70	
第4項 百塚住吉遺跡C地区の調査成果	82	
(1) 検出遺構の概要	82	
(2) 出土遺物の概要	94	
第5項 百塚住吉B遺跡の調査成果	110	
(1) 検出遺構の概要	110	
(2) 出土遺物の概要	110	
第6項 小結	113	
(1) 百塚住吉遺跡(B・C地区)	113	
(2) 百塚住吉B遺跡	116	
第5節 平成19年度調査の成果(百塚遺跡A地区)	117	(小柳リラコ・後藤太一・佐藤)
第1項 調査の方法と経過	117	
第2項 基本層序	120	
第3項 検出遺構の概要	120	
第4項 出土遺物の概要	146	
第5項 小結	159	

第6節	平成20年度調査の成果(百塚遺跡B地区)	160	(秋葉保香・小黑)
第1項	調査の方法と経過	160	
第2項	基本層序	161	
第3項	検出遺構の概要	162	
第4項	出土遺物の概要	167	
第5項	小結	168	
引用・参考文献	(第1～3・6章, 50音順)	170	
第4章	理化学的分析	182	
第1節	百塚住古遺跡の理化学的分析(1)―A地区の試料から―	182	(バリノ・サーヴェイ株式会社)
第2節	百塚住古遺跡の放射性炭素年代測定―B地区の試料から―	197	(佐伯建設工業株式会社・株式会社加速器分析研究所)
第3節	百塚住古遺跡の理化学的分析(2)―B・C地区の試料から―	203	(バリノ・サーヴェイ株式会社)
第4節	百塚住古遺跡出土鉄滓の金属学的分析―C地区の試料から―	214	(株式会社吉田生物研究所)
第5節	百塚遺跡の放射性炭素年代測定―A地区の試料から―	217	(バリノ・サーヴェイ株式会社)
第6節	百塚遺跡出土縄文遺体の同定―A地区の試料から―	221	(山田悟郎)
第7節	百塚遺跡の地中レーダー探査	224	(株式会社パスコ, テラ・インフォメーション)
第8節	百塚遺跡の理化学的分析―A・B地区の試料から―	231	(バリノ・サーヴェイ株式会社)
第9節	百塚住古遺跡・百塚遺跡出土土器・土製品表面の赤色顔料について	246	(秋葉)
第5章	考古学的分析	251	
第1節	百塚住古遺跡・百塚遺跡の縄文時代晩期の土器について	251	(細辻嘉門)
第2節	百塚住古遺跡・百塚遺跡検出墳墓の築造順序と時代背景	260	(下島)
第3節	百塚住古遺跡A地区・百塚遺跡A地区出土二重口縁壺形土器と土器祭祀	263	(佐藤)
第4節	百塚住古遺跡・百塚遺跡のいわゆる出現期古墳が提起する諸問題	267	(小黑)
第6章	総括	290	(小黑)
第1節	縄文時代と地形形成過程	290	
第2節	弥生時代	291	
第3節	古墳時代	291	
第4節	平安時代	293	
第5節	江戸時代～近代	293	

巻末原色図版

写真図版

報告書抄録

第1章 経過

第1節 試掘確認調査の経過

平成8年10月および平成11年2月に、富山県富山土木事務所（当時）から富山市教育委員会あてに、主要地方道富山八尾線道路改良事業地内に所在する百塚遺跡・百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡の試掘確認調査を実施するよう依頼された。依頼に基づき、富山市教育委員会が随時、試掘確認調査を実施し、その概要は第1表にまとめた。

第2節 発掘作業の経過

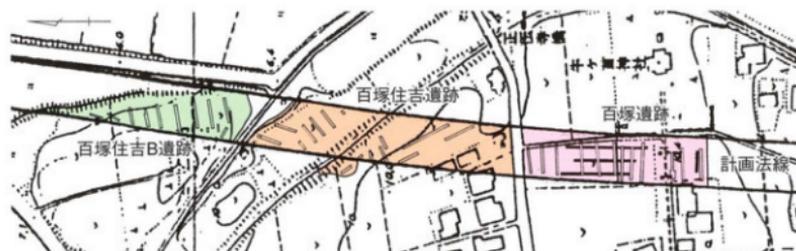
第1項 平成17年度

平成16年の秋から富山県富山土木センターと富山市教育委員会との間で、次年度以降に発掘調査を実施できるかどうか協議を開始した。条件整備・地元との調整を平成17年7月に終え、平成17年8月3日に富山県富山土木センターから富山市教育委員会に百塚住吉遺跡（A地区：800㎡）の発掘調査が依頼され、平成17年8月10日に富山市教育委員会が受託して実施する旨を回答した。平成17年8月24日に富山県知事と富山市長との間で委託契約書を取り交わし、業務に着手した。

発掘調査業務は、株式会社パスコ富山支店に委託した。富山市教育委員会の監理の下で現地発掘作業を行った結果、富山県域で最古級の古墳時代前期の前方後円墳・前方後方墳などが確認され、富山平野における古墳出現過程を追究するうえで重要な調査成果が得られた。平成17年12月3日に現地説明会を開催し、県内外から約100名の参加を得た。進捗状況に応じて監理担当者（埋蔵文化財センター）・調査担当者による工程会議を開催し、調査方法の検討や問題点の把握を適宜行った。また、現地作業終了時には終了確認検査を実施し、適正な業務実施に努めた。平成17年12月15日に、富山県富山土木センターに現地を引き渡した。

第1表 主要地方道富山八尾線道路改良事業にかかる埋蔵文化財包蔵地試掘確認調査実施状況

年度	遺跡名	種別	時代	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	試掘率 (%)	遺跡確認 面積(㎡)	検出遺構	出土遺物
9	百塚	散布地	縄文・奈良・平安	1,792	85	4.7	—	(なし)	縄文晩期土器・古代土師器
10	百塚住吉	集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	4,800	277	5.8	2,440	溝・土坑 (弥生後期)	縄文晩期土器・弥生後期土器・磁石・古代土師器・古代須恵器
	百塚住吉B	集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安				300	溝・ピット (古代)	弥生後期土器・古代須恵器・古代土師器
17	百塚	散布地 古墳	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世	1,300	98	7.5	1,300	古墳 (古墳前期)	縄文晩期土器・弥生終末期土器
19	百塚	散布地 古墳	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世	1,325	108	8.2	150	方形周溝墓 (弥生)	縄文晩期土器



第1図 主要地方道富山八尾線道路改良事業に伴う試掘確認調査トレンチ配置図
(黒塗りは平成9年度調査トレンチ、下図は富山県富山土木センター提供による、1:2,500)

百塚住古遺跡（A地区）の南側には、市道金山新百塚線を境に百塚遺跡が接している。平成9年の試掘確認調査は制約があるなかで実施されたものであり、埋蔵文化財と確実視できる状況にはなかった。このような経緯や百塚住古遺跡（A地区）の検出遺構の重要性に加え、周辺に塚が存在したという伝承が地元に残ることから、平成18年1月4日に富山市教育委員会から富山県富山土木センターに百塚遺跡の試掘確認調査の追加実施に関する協議書を提出した。

これに対し、平成18年1月11日に富山県富山土木センターから富山市教育委員会に試掘確認調査の追加実施に伴う業務内容の変更について承諾書が提示された。これを受け、平成18年3月17日に富山県知事と富山市長との間で委託変更契約書を取り交わした。試掘確認調査は平成18年2月27日～3月1日にかけて実施した。その結果、全域（1,300㎡）に埋蔵文化財の所在を確認した。当該部分（百塚遺跡A地区）は、平成19年度に現地調査を行う方向性のもと、協議を重ねた。

第2項 平成18年度

平成18年4月14日に富山県富山土木センターから富山市教育委員会に百塚住古遺跡（B地区：880㎡、C地区：760㎡）と百塚住古遺跡（300㎡）の発掘調査が依頼され、平成18年4月18日に富山市教育委員会が受託して実施する旨を回答した。平成18年6月23日に富山県知事と富山市長との間で委託契約書を取り交わし、業務に着手した。

発掘調査業務は、佐伯建設工業株式会社（現・あおみ建設株式会社）北陸支店に委託した。富山市教育委員会の監理の下で現地発掘作業を行った結果、弥生時代終末期の方形周溝墓や古墳時代前期の前方後円墳・前方後方墳などが確認された。平成18年12月2日に現地説明会を開催し、県内外から約70名の参加を得た。進捗状況に応じて監理担当者・調査担当者による工程会議を開催し、調査方法の検討や問題点の把握を適宜行った。また、現地作業終了時には終了確認検査を実施し、適正な業務実施に努めた。平成18年12月13日に、富山県富山土木センターに現地を引き渡した。

第3項 平成19年度

平成19年4月11日に富山県富山土木センターから富山市教育委員会に百塚遺跡（A地区：1,300㎡）の発掘調査が依頼され、平成19年5月11日に富山市教育委員会が受託して実施する旨を回答した。平成19年6月7日に富山県知事と富山市長との間で委託契約書を取り交わし、業務に着手した。

発掘調査業務（出土品整理および報告書原稿作成を含む）は、株式会社バスコ富山支店に委託した。富山市教育委員会の監理の下で現地発掘作業を行った結果、弥生時代終末期の方形周溝墓や古墳時代前期の前方後方墳・方墳などが確認された。平成19年10月6日に現地説明会を開催し、県内外から約170名の参加を得た。進捗状況に応じて監理担当者・調査担当者による工程会議を開催し、調査方法の検討や問題点の把握を適宜行った。調査の各工程終了時には段階確認検査を、現地作業終了時には終了確認検査を実施し、適正な業務実施に努めた。平成19年11月8日に、富山県富山土木センターに現地を引き渡した。

調査区南端で方形周溝墓の一部が確認された。調査区の南側に続くことは明らかであった。また、平成17～19年度までの発掘調査で判明した3遺跡の重要性に鑑み、平成19年10月18日に富山市教育委員会から富山県富山土木センターあてに百塚遺跡の試掘確認調査の追加実施に関する協議書を提出した。

これに対し、平成19年10月18日に富山県富山土木センターから富山市教育委員会に試掘確認調査の追加実施に伴う業務内容の変更について承諾書が提示された。これを受け、平成20年2月27日に富山県知事と富山市長との間で委託変更契約書を取り交わした。試掘確認調査は、平成19年11月19日～11月21日にかけて実施した。その結果、150㎡に埋蔵文化財の所在を確認した。当該部分（百塚遺跡B地区）は平成20年度に現地調査を行い、これまでに発掘調査を実施した遺跡とあわせ、平成20年度末に発掘調査報告書を刊行する方向性のもと、協議を重ねた。

第4項 平成20年度

平成20年4月7日に富山県富山土木センターから富山市教育委員会に百塚遺跡（B地区：150㎡）の発掘調査、平成17～20年度発掘調査にかかる3遺跡の発掘調査報告書の刊行が依頼され、平成20年5月12日に富山市教育委員会が受託して実施する旨を回答した。平成20年5月28日に富山県知事と富山市長との間で委託契約書を取り交わし、業務に着手した。

現地発掘作業の結果、弥生時代終末期の方形周溝墓などが確認された。作業終了後、平成20年8月29日に富山県富山土木センターに現地を引き渡した。

第3節 整理等作業の経過

第1項 平成17年度

現地発掘作業と並行して、出土品の洗浄や図面整理等を進めた。出土品の取り上げラベルの内容確認・補正後に注記を行い、遺物台帳を作成した。また、遺構台帳・写真台帳の作成等、基礎整理を行うと共に理化学的分析（放射性炭素年代測定）を実施した。その詳細は第4章第1節にまとめた。

第2項 平成18年度

平成17年度に実施した百塚住吉遺跡（A地区）発掘調査の本格整理について、調査を担当した株式会社パソコ富山支店に委託し、出土品整理および報告書原稿作成、理化学的分析（土器胎土分析）を実施した。理化学的分析結果は第4章第1節にまとめた。

この他、百塚住吉遺跡（B・C地区）・百塚住吉B遺跡の現地発掘作業と並行して、出土品の洗浄・仕分けを進めた。注記作業後に遺物台帳・遺構台帳の作成等、基礎整理を行うと共に理化学的分析（放射性炭素年代測定・土器胎土分析等）を実施した。理化学的分析結果は第4章第2・3節にまとめた。この他、出土鉄製品2点について保存処理（脱塩・樹脂浸漬）を行い、劣化対策を講じた。百塚住吉B遺跡については、調査を担当した佐伯建設工業株式会社（現・あおみ建設株式会社）北陸支店に委託し、出土品の接合・実測・トレース・写真撮影を実施した。

第3項 平成19年度

平成18年度に実施した百塚住吉遺跡（B・C地区）・百塚住吉B遺跡の発掘調査の本格整理について、調査を担当した佐伯建設工業株式会社（現・あおみ建設株式会社）北陸支店に委託し、百塚住吉遺跡の出土品整理および報告書原稿作成、百塚住吉B遺跡の報告書原稿作成を行った。この他、百塚住吉遺跡（B地区）・百塚住吉B遺跡出土鉄製品4点の保存処理を行い、百塚住吉遺跡（C地区）出土鉄滓の金属学的分析を行った。これらは株式会社吉田生物研究所に依頼し、分析結果は第4章第4節にまとめた。

百塚遺跡（A地区）発掘調査の出土品整理および報告書原稿作成は、現地発掘作業終了後直ちに実施した。出土品の洗浄・仕分け・注記作業後に遺物台帳・遺構台帳の作成等、基礎整理を行うと共に理化学的分析（放射性炭素年代測定等）を実施した。分析結果は第4章第5節にまとめた。出土鉄製品のうち、鉄鏝1点について保存処理を行った。

第4項 平成20年度

百塚遺跡（B地区）発掘調査の出土品整理および報告書原稿作成は、現地発掘作業終了後直ちに開始した。出土品の洗浄・仕分け・注記作業後に遺物台帳・遺構台帳の作成等、基礎整理を行うと共に理化学的分析（地山上壌軟X線写真撮影・観察）を実施した。分析結果は第4章第8節にまとめた。また、百塚住吉遺跡（B・C地区）・百塚遺跡（A地区）出土土器・土製品に塗布された赤色顔料について、金沢学院大学美術文化学部文化財学科（中村晋也准教授）のご配慮、ご指導のド、蛍光X線定性分析を行った。分析結果は第4章第9節にまとめた。

（小黒智久）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡は富山市北部、呉羽山丘陵先端（北端）に位置する。呉羽山丘陵は南西端の境野新から北東端のハヶ山まで約7kmにわたって北東―南西方向に伸びる。北東端から約2.3km南西には深い開析谷が入り込み、この谷を大きく開削して主要地方道富山高岡線が丘陵を横断する。この地点から北側の丘陵部を呉羽山地区、南側を城山地区と区分している。呉羽山地区の最高点は標高71.3mの御所立所（三角点）、城山地区の最高点は標高145.3mの城山頂上（三角点）である。いずれの地区とも尾根は急傾斜で短く、谷も深い。西側は緩斜面となっているのに対し、東側は急な崖状を呈し、神通川とその支流である井田川が沿うように流れている。城山地区では、尾根頂上直下付近からはじまる開析谷がほぼ北西方向に等間隔に走り、細長い尾根が何列も並ぶ。現存する尾根では頂部幅10～20mで、長さ1km以上続くものが多い。呉羽山丘陵を境に富山平野の東側を呉東、西側を呉西と呼び慣わされており、自然や文化の様相にも違いが認められる。

3遺跡が所在する呉羽山地区の西側は、標高20m付近より上部は比較的傾斜角が強いが、標高約20m付近に台地状地形が発達し、長岡台地と呼び慣わされている。台地全体は約1.3×2kmの広さを持ち、大きく長い開析谷が発達している。開析谷は西から北北東方向に放射状に伸びており、城山地区とは様相が異なる。幾筋もの開析谷によって区切られた台地は平坦面の広さも確保され、遺跡立地には適している。また、大きな開析谷から伸びる多くの支谷の谷頭には湧水地点があり、この点でも遺跡立地に寄与している。湧水地は現在でも史跡北代遺跡内の埋没小谷に認められるほか、灌漑用溜池として存在する大畑池などにその名残を見出すことができる。

主要地方道富山八尾線道路改良事業では、新道がほぼ南北方向に計画され、北から百塚住吉B遺跡・百塚住吉遺跡・百塚遺跡の順に通過することとなった。現在の神通川流路が呉羽山丘陵に向けてやや屈曲する部分の河岸段丘（左岸）上に位置し、国土地理院発行による土地条件図「富山」では、いずれも下位面に相当する。遺跡が形成された当時の地表面はすでに削平されているが、遺構検出面の標高と比較すると、百塚住吉B遺跡の北端が8.7m、南端が9.1m、百塚住吉遺跡C地区の北端が9.3m、中央部が9.4m、南端が9.3m、百塚住吉遺跡B地区の北端が9.6m、中央部・南端が9.8m、百塚住吉遺跡A地区南端が10.0m、百塚遺跡A地区南端が9.9m、百塚遺跡B地区南端が10.2mと、おおむね3°の傾斜で南に上昇することがわかる（第7図）。

土地条件図は地形・地盤調査によるものだが、同図では3遺跡が所在する下位面に接するように神通川の本流および支流の旧流路が多く記されている。3遺跡の南東方向、斜面下には狭小な氾濫平野が形成され、それを囲むように旧流路が存在する。東方向は斜面脇に旧流路が流れている（第3図）。大日本帝國陸地測量部による明治43年の迅速図（第2図）からも旧流路を読み取ることができ、古絵図にもその時々々の流路が描かれている。下位面付近に多くの流路があったことは明らかであり、川際の丘陵先端部に立地することが、3遺跡の歴史性を検討するうえで重要になる。

今次発掘調査の結果、百塚住吉遺跡・百塚遺跡では弥生時代後期後半～古墳時代前期前半にかけて多様な墓が密集して検出された。旧流路を行き交う舟から遺跡の方向を見上げれば、小墳丘が点々と望めただろう。日本海から神通川を約4km遡上してきて、真っ先に目にする丘陵が当地なのである。多数の墓がこの地に営まれたのは、このような地理的環境が一因と考えられる。ちなみに、当地から神通川・井田川を約7km遡上すると呉羽山丘陵南部の杉谷A遺跡・杉谷古墳群・呉羽山丘陵古墳群の真際に、さらに7kmほど井田川・山田川・赤江川を遡上すると羽根丘陵の史跡王塚・千坊山遺跡群の至近に辿り着く。

第2節 歴史的環境

富山市域では平成21年3月現在、1,006ヶ所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として『富山市遺跡地図』に記載されているが、百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡が存在する呉羽山丘陵一帯には旧石器時代から近世まで200ヶ所に及ぶ遺跡が存在し、市域の約1/5の遺跡がここに集中することになる。それは、当地が沖積平野と異なり、河川氾濫などの自然災害の影響を被りにくい安定した環境にあったことに加え、湧水地点も豊富で丘陵の動植物資源や丘陵下の小河川の水産資源などを得やすかったことに起因すると考えられる。舟による移動が容易な時代になればなるほど、河川交通路として小河川の重要度が高まったことであろう。ここでは、3遺跡周辺に所在する代表的な遺跡を概観する。

旧石器時代 史跡北代遺跡では後期旧石器時代のナイフ形石器・局部磨製石斧等が出土しており、後期旧石器時代人の活動痕跡がうかがえる。呉羽山丘陵一帯には約20ヶ所の旧石器時代遺跡が存在するが、北代遺跡と同様にナイフ形石器・局部磨製石斧等が単独あるいは数点のみ出土する傾向が指摘されている。発掘調査が十分になされていないという制約があるにせよ、このような様相は富山県域で他にはない特色となっている。呉羽山丘陵および山麓においては一時的なキャンプサイトとして利用されることが多かったために、石器の集中出土例や製作痕跡がうかがいにくいのではないかと指摘されている。

縄文時代 前期中葉以降、丘陵下の沖積低地に貝塚（小竹貝塚・観ヶ森貝塚）が出現する。これらは潟湖（古放生津潟）を利用した淡水・鹹水産貝類の採捕を契機に形成されたと考えられている。

中期になると、長岡台地や丘陵上に多くの遺跡が形成される。開析谷によって区切られた舌状台地上や谷頭付近の湧水地を取り巻くように集落遺跡が出現する。そのなかでもひととき大きな集落は北代遺跡（富山市教育委員会1999）である。早期～晩期までの長期間にわたって集落が営まれたが、主体は中期中葉～後葉である。現在までのところ、確認された堅穴建物は7棟に及ぶ（富山市教育委員会2003）。集落中央に高床建物を配し、堅穴建物群が取り巻く集落構造を採る。堅穴建物群は南側の大畑地の谷に面する一帯と北側の湧水地点に面する一帯に大きく二分される。集落構成を解明するうえで貴重であり、北陸を代表する縄文遺跡として昭和59年1月4日に12,155㎡が史跡に指定された。史跡整備を経て、平成11年4月29日に「富山市北代縄文広場」として公開され、市民の憩いの場、縄文時代を学習する場として活用されている。

北代遺跡の北西約300mにある北代加茂下Ⅲ遺跡は、北代遺跡よりやや古い中期前葉～中葉にかけての集落で、堅穴建物のほか推定14本以上の柱をもつ長大な掘立柱建物（確認長約8m）が検出された。同建物は中期前葉（新崎式）に建築された、柱列が二重にめぐると異なるものであり、集落のシンボリック的な建物と考えられている（堀沢1996）。長岡台地では、中期の集落遺跡は大小の差こそあれ、数多く点在している。

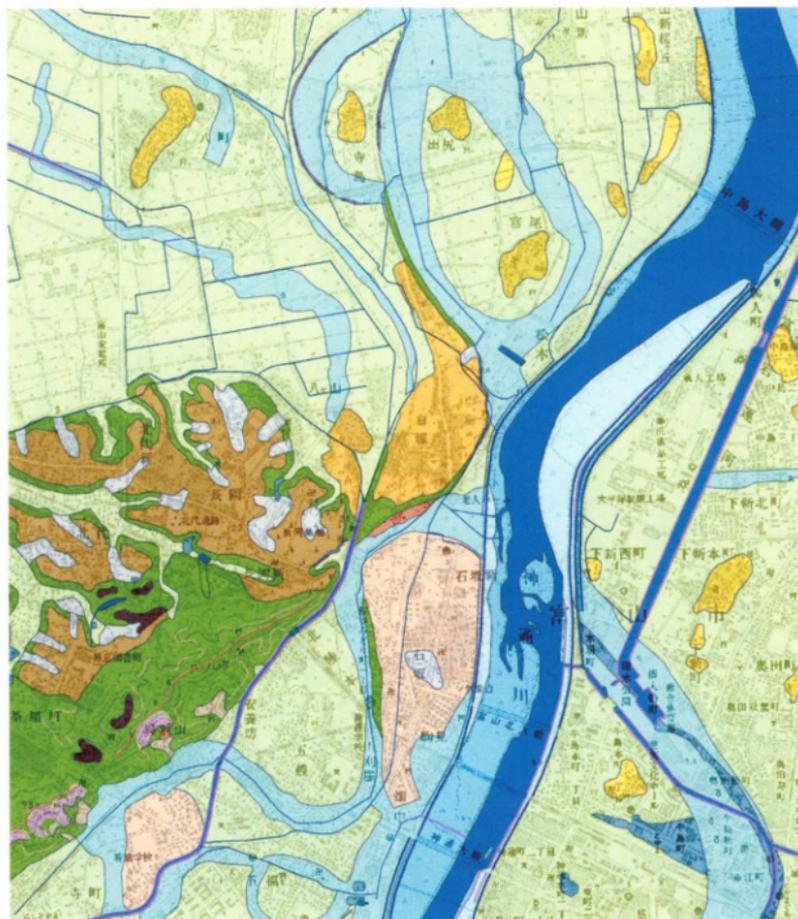
後期～晩期は集落規模が縮小し、遺物散布も疎となる傾向にあり、長岡杉林遺跡（富山市教育委員会1987）では堅穴建物1棟のみが確認された。このようななか、北代遺跡の北方約500mにある長岡八町遺跡が後期前葉～晩期前葉に盛行する。本遺跡は「八町遺跡」（『富山市遺跡地図』、1993年）、「針原遺跡」・「長岡針原遺跡」（『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』、1993年など）と称されてきたが、平成15年の発掘調査を契機に長岡八町遺跡と名称変更された。同調査では掘立柱建物や土坑、大型柱穴が確認されたほか、谷部から多量の土器・石器と共に北陸最大級の土偶頭部1点が出土（昭和35年に富山考古学会会員の山内賢一氏によって同一形式の土偶頭部1点が採集されている）した。その他、土箭・御物石器・独鈷石・石棒・石刀などがまとめて出土し、石棒や石刀の破損面には火熱痕が認められることから、大掛かりなマツリが執り行われた拠点集落と推定されている（富山市教育委員会・環境事業団富山建設事務所2003）。

百塚住吉遺跡の発掘調査（A・B・C地区）や百塚遺跡の発掘調査（A・B地区）、百塚遺跡の試掘確



第2図 百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡の位置 (図の○印、S=1:50,000)
 (下図は大日本帝国陸地測量部 明治43年測図「東岩瀬」・「四方」・「富山」・「呉羽村」による)

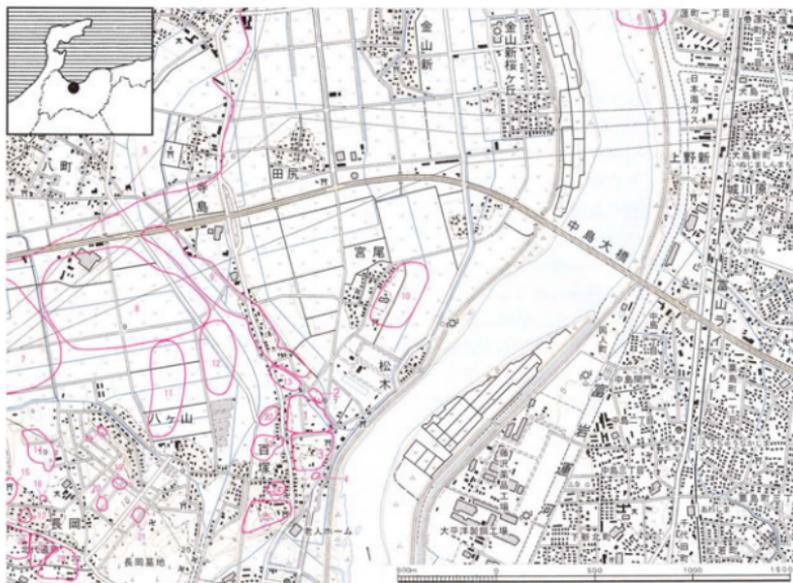
認調査や工事立会調査でも晩期の土器は出土しているが、後世の遺構覆土への混入品や遺物包含層からの出土品である。現在までのところ、2遺跡で晩期の遺構は確認されていないが、長岡八町遺跡を



凡例



第3図 百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡周辺の地形
(国土地理院作成土地条件図「富士」数値データによる)



第4図 神通川と周辺の遺跡分布 (1:25,000、Noは第2表と対応)
(下図は国土地理院発行1:25,000地形図「富山」平成18年4月29日発行2刷)

第2表 百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡周辺の遺跡の概要

No	遺跡名	年代	種別	No	遺跡名	年代	種別
1	百塚住吉	縄文(晩)・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	集落 古墳	15	北代加茂神社	縄文	散布地
2	百塚住吉B	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	集落	16	長岡小学校西	縄文	散布地
3	百塚	縄文(後～晩)・弥生(終)・古墳(前)・奈良・平安	散布地 古墳	17	北代加茂下IV	奈良・平安	散布地
4	百塚C		塚	18	八町D	縄文(晩)・中世	散布地
5	今市	縄文(中～晩)・弥生(後)・古墳(前)・奈良・平安・中世・近世	集落	19	八町A	縄文(中)	散布地
6	千原崎	縄文(中～晩)・弥生(後)・古墳(前)・奈良・平安・中世・近世	集落	20	八町C	縄文(中)	散布地
7	八町II	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	集落	21	八町B	縄文(晩)	散布地
8	八ヶ山A	縄文(後～晩)・古墳・奈良・平安・中世・近世	集落	22	百塚住吉E	奈良・平安	散布地
9	百塚住吉D	縄文(後～晩)・弥生・古墳・奈良・平安・中世	散布地 集落	23	百塚B	縄文(中～晩)	散布地
10	宮尾	奈良・平安	散布地	24	百塚跡割	奈良・平安	散布地
11	八ヶ山C	縄文(中)・白鳳・奈良・平安・中世・近世	散布地	25	八ヶ山	縄文(中・晩)・弥生(後)～古墳(初)	散布地 古墳
12	八ヶ山B	奈良・平安・中世・近世	散布地	26	北代	旧石器・縄文(早～晩)・弥生・奈良・平安・近世	集落
13	百塚住吉C	縄文・奈良・平安	散布地	27	北代東	縄文(中)・奈良・平安	集落
14	長岡八町	縄文(後)・晩)・奈良・平安・近世	集落 散布地	28	長岡杉林	縄文(早・中～晩)・弥生(後)・古墳(中)・奈良・平安	集落

核として長岡台地の晩期集落が展開するなかで、2遺跡が形成されたと考えられる。なお、百塚遺跡の南方約500mにある八ヶ山遺跡でも晩期の好資料が認められる（富山市教育委員会埋蔵文化財センター2002）。

弥生～古墳時代 弥生時代中期以前の遺跡は少ないが、北代遺跡ではビツトから中期前半の土器が出土している（富山市教育委員会1998）。百塚住吉遺跡に近接する百塚住吉D遺跡では、個人住宅建築に先立つ平成8年の発掘調査で、遺構は確認されていないものの、遺物包含層から弥生時代終末期の土器が多く出土し、奈良時代のビツトからは流紋岩製（緑灰色）の細形管玉が1点出土した（鹿角1997）。調査地周辺に奈良時代の開発で破壊された弥生時代終末期頃の遺構が存在した蓋然性が高い。

八町Ⅱ遺跡では、古墳時代前期後半と古墳時代中期前半の集落がおおむね東から西に移動するように形成された。前期後半の集落では掘立柱建物や方形区画溝、大溝、円形周溝、井戸、土坑などが確認され、在地系土器が主体を占めるなかで畿内系・山陰系土器が一定量出土したほか、東海系S字状口縁台付甕が1点出土した。富山県域において畿内系土器が一定量出土した遺跡としては、小矢部市竹倉島遺跡に次ぐものであり、S字状口縁台付甕の出土例としては富山県域で初例となった。土坑から出土した製品や穿孔途中の未成品、形制品、剥片の存在から、緑色凝灰岩製管玉を製作していた蓋然性が高い。中期前半の集落では井戸や溝が確認された。初期須恵器は出土していない。井戸廃絶時に土師器蓋を井戸底に置き、滑石製白玉を撒き入れる儀礼が執り行われたことが判明した（富山市教育委員会2008）。

古墳時代後期～終末期の集落の様相は明らかでないが、百塚住吉B遺跡では碧玉製の太形管玉や終末期の須恵器（短頸壺・蓋）が採集されている。太形管玉は百塚遺跡（A地区）出土品とはほぼ同質同大である。

弥生時代～古墳時代前期にかけての墳墓の様相は第5章第4節で触れるので、ここでは呉羽山丘陵における古墳時代中期～終末期の代表的な古墳について概観する。呉羽山丘陵にはいわゆる出現期古墳が多く分布するが、中期古墳は古沢塚山古墳のみである。発掘調査は行われていないが、5世紀前半（中期前半）に築かれた全長40.95mの前方後円墳とされた（富山市教育委員会1976・1984）。以後はこの評価が踏襲されてきたが、近年の富山大学人文学部考古学研究室による再測量調査では全長約41.8mとされ（高橋2007）、年代論については中期中葉（5世紀中葉前後）説が提起された（小黒2005）。呉羽山丘陵No.26号墳は全長約20mの後期前方後円墳（富山市教育委員会1984）で、富山県域で最後の前方後円墳と評価されている（岸本1992・小黒2005）。

富山県域は横穴式石室の分布が希薄だが、呉羽山古墳（大村1931a）は工事中に不時発見されたことで、横穴式石室をもつことが明らかになった。6世紀第Ⅲ四半世紀の金銅装束椎大刀（野垣2005）などが出土したが、戦災で消失した。周辺には15基以上からなる番神山横穴墓群（大村1931b、岡崎1967・1968）が営まれる。呉羽山古墳と墓域を共有し、須恵器の年代観や出土状態、鉄刀の年代観から6世紀後半頃から形成された富山県域で最古段階に遡る横穴墓群である（小黒・野垣2006）。約4km南東にはほぼ同時期に形成された金屋陣の穴横穴墓群（富山市教育委員会1976）がある。呉羽山丘陵の横穴墓群は7世紀中葉～後葉にかけて終焉を迎えるが、奈良時代初頭まで墓域としての利用が継続することがある呉西の横穴墓とは様相が異なる。呉羽山丘陵の横穴墓群は日本海沿岸における北限の横穴墓群である（小黒2005b）。

古代 射水平野を中心として開墾集落が爆発的に増加することと関連して、呉羽山丘陵周辺でも集落遺跡が数多く営まれるようになる。北代遺跡では奈良～平安時代の堅穴建物・掘立柱建物・鍛冶炉等が確認されており（富山市教育委員会1980）、それらと連動した一般集落と捉えることができる。長岡杉林遺跡は奈良～平安時代の集落である。奈良時代集落は一般集落だが、平安時代集落は祠堂と推定される建物から瓦塔・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土したことから、拠点集落と推定されている（富山市教育委員会1987）。

中世 八町Ⅱ遺跡では鎌倉～戦国時代の集落が確認された。鎌倉時代集落は方形区画内に掘立柱建物や竪穴状土坑、井戸が計画的に配された。井戸からは鎌倉産とも考えられる上質の千鳥紋漆器片が出土しており、中核的な集落と推定されている。空町～戦国時代集落は掘立柱建物が増加するものの、配置の計画性は乏しくなる。(富山市教育委員会2008)。

長岡台地周辺でも中世の散布地は知られているが、その詳細は明らかでない。

近世 千原崎遺跡は中世末～近世前期にかけての港町的性格をもつ集落で、鍛冶作業が行われていた。港町では肥前陶磁が多く出土する傾向にあるが、本遺跡出土陶磁器の約6割は越中瀬戸であり、肥前陶磁は約3割に過ぎない。このことから、本遺跡は越中瀬戸の流通における中継地の可能性も想定されている(富山市教育委員会2001)。長岡台地周辺でも近世の散布地は知られているが、その詳細は明らかでない。

百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡周辺には江戸時代に松木村・宮尾村・百塚村が存在し、現在でも字名として残る。文字史料からうかがえる当地の近世の様相について、『富山県の地名』(平凡社, 1994年)から概要を引用しておく。

松木村 寛永16(1639)年以降、富山藩領。寛永10年の牛ヶ首用水管理約定書(牛ヶ首用水土地改良区蔵)に肝煎新三郎の名がみえ、早くから開かれていたことがわかる。その他、享保(1716-1736)の頃に八郎兵衛、文政9(1826)年には久三郎などの肝煎がいた(『御郡役所留要文抜書』前田家文書など)。

神通川左岸に位置し、富山藩における交通の要地であった。神通川の東遷以降は次第にその重要性が薄れ、享保13年に廃村になった(『御郡役所留要文抜書』)。天保2(1831)年には富山町大火の飛火で類焼した(『火災略留』前田家文書)。

宮尾村 富山藩分藩当時、百塚城築城計画があり、当地に藩上の屋敷や御蔵の建造地が指定されたが、築城は中止され、屋敷割・蔵屋敷という地名のみ残された。肝煎は寛永10年の牛ヶ首用水管理約定書(牛ヶ首用水土地改良区蔵)に太右衛門、文久2(1862)年の持高書上(『御用諸事留帳』栗山家文書)に内山治八郎の名がみえる。内山家は富山藩の1村役を勤め、盛時には1,700石を管轄していた。

百塚村 寛永16年、富山藩分藩の折、藩主前田利次は百塚での築城を幕府から許可されたが、万治年間(1658-1661)に至り、築城を断念、富山城を居城とした。この間に百塚野は武士や商人の屋敷地の造成で賑わった。慶安3(1650)年には堀田掃部・佐々伊左衛門・富田右衛門尉など上級武士の屋敷7,500歩(運上米銀62匁)が申請されている(『村々御印物等書上』)。寛政2(1790)年の高物成品々手続では銀納所として18,477歩、上納280目7厘5毛。文化14(1817)年には銀納畑18,580歩、取納銀280匁(榎家文書)。畑作を主体とし、茶・桑・ハゼ・菜種などを多く栽培した。文久2(1862)年には小売茶御役銀4匁8分を納め(内山家文書)、種蒔所も置かれていた(栗山家文書)。

なお、『越中婦負郡志』(富山縣婦負郡役所, 1909年)では、百塚村の由来について次のように記している。町村割実施(1888年)の際、大字諸村のうちで百塚村が広く知られていたことにより百塚村の名が採用された。大字諸村としての百塚村の由来は不明だが、西隣の長岡村大字北代村(北代遺跡)で竪穴住居が確認されているので、百塚村でも同様に竪穴住居に居住していたのだろう。しかし、歳月の経過に伴い竪穴住居が何であるのかを理解せずに、その跡を塚と呼称するようになり、塚が多いということで名づけたのではなからうか。

近代 地形図の変遷をみると、明治時代(明治43年)には百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡周辺は一面の桑畑だったことがわかる。牛ヶ首神社の北西には針葉樹林や墓があった。百塚村では桑は栽培品目の一つに過ぎなかったが、明治時代には桑の栽培に特化したことがうかがわれる。大正時代(大正15年修正地形図)にも、土地利用に変化は認められない。昭和時代(昭和43年改測地形図)には、それまで荒地だったところも含めて田地化した。(小黒)

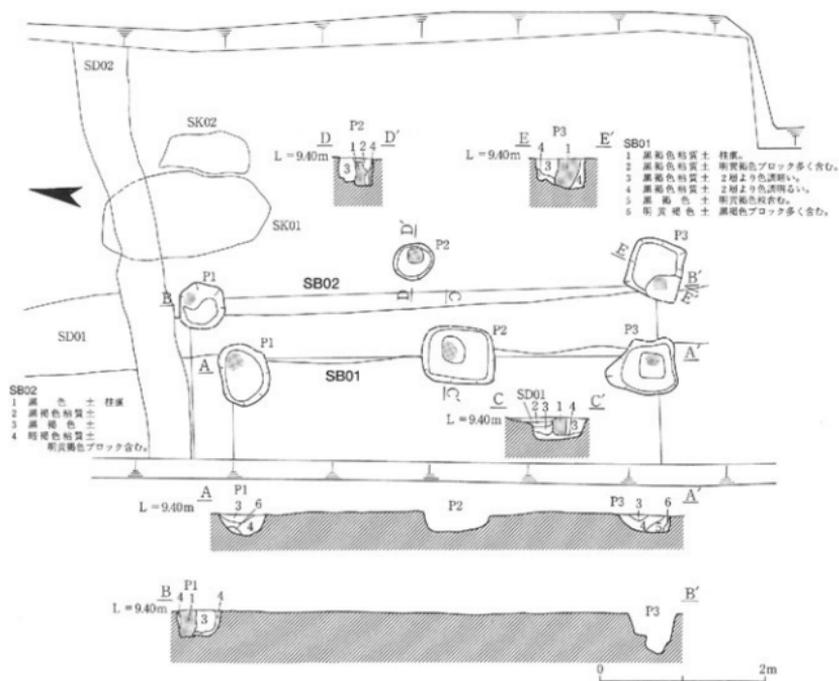
第3章 既往の発掘調査成果と今次発掘調査の概要

第1節 既往の発掘調査成果

(1)百塚住吉遺跡

市道宮尾6号線道路改良工事に伴い、平成13年1～2月と平成14年1～2月に本発掘調査が実施されている。本発掘調査としては、前者を第1次発掘調査、後者を第2次発掘調査と位置付けることができ、今次発掘調査は第3次発掘調査(A地区)・第4次発掘調査(B・C地区)ということになる。第1次発掘調査は株式会社バスコに、第2次発掘調査は有限会社山武考古学研究所にそれぞれ委託し、富山市教育委員会の監理の下で実施した。その成果は、報告書として公表されている(富山市教育委員会2001・2002)。

第1次発掘調査(富山市教育委員会2001)は調査区下端幅4.5m×延長53mを調査し、奈良～平安時代と推定される掘立柱建物4棟(側柱式建物3棟・総柱式建物1棟)・土坑3基・溝9条を検出した。須恵器や土師器、管状土錘のほか、縄文時代晩期中葉やいわゆる古墳出現期(弥生時代後期後半～古墳時代前期前半)の土器も出土している。第2章第2節に記したように、呉羽山丘陵一帯で大規模に開発が行われた古代の集落の一端を示す調査成果と評価された。



第5図 百塚住吉遺跡SB02の概要(富山市教育委員会2002)



第6図 百塚住吉遺跡・百塚住吉B・百塚遺跡の古墳出現期の遺構分布
(1:1,250 下図は富山市基本図)

第2次発掘調査(富山市教育委員会2002)は第1次発掘調査区の南に位置し、調査区下端幅約5m×延長47mの調査区から、古墳時代の掘立柱建物3棟・土坑2基・溝1条、奈良～平安時代の溝1条が検出された。古墳時代前期と報告された遺構出土土器はいずれも小片であり、それらから遺構の帰属年代を推定してよいかは検討の余地がある。土器の形態的特徴だけでなく、詳細な出土状態の検討も必要だが、それは報告されていない。掘立柱建物の年代推定にあたっては、柱穴のどこから遺物が出土したのかが鍵となる。柱痕からであれば廃絶後の混入品であり、掘り方内埋土からであれば建築時の混入品ということになる。報告では詳細な出土状態が示されていない。今回、改めて調査写真及び原図・台帳類を検討したものの、柱穴出土土器の記録が乏しく、詳細は不明とせざるを得ない。従って、掘立柱建物・土坑はいわゆる古墳出現期と幅をもたせて評価すべきと考える。

古墳時代前期と報告されたSD01からは当該期とされる土師器のほか、縄文土器や珠洲が出土している。調査写真及び原図・台帳類を検討したところ、珠洲(片L鉢)は一括取上品のため、出土地点・層位が不明であることを確認した。溝上に後世の攪乱があった旨の報告はなく、提示された断面図からも自然堆積であることが読み取れる。従って、SD01出土遺物は中世以降に埋没した溝内に縄文時代晩期や古墳出現期の土器が混入したと判断すべきものであり、古墳時代前期の遺構とは認定できないことになる。同様に、重複関係からSD01よりも新しいSD02も中世以降の溝ということになる。

ここでは、第2次発掘調査所見に否定的見解を述べたが、重要なのは第1・2次発掘調査とも古墳出現期の土器が出土しており、第2次発掘調査で確認されたSB02は詳細不明としつつも屋外棟持柱をもつ高床建物と推定され、集落内で差別化が図られたシンボリックな建物と評価されたことである。大型掘立柱建物の定義はいくつかあるが、「梁間5m以上、桁行7m以上、床面積35㎡以上」と規定する七田忠昭氏の定義(七田1994)に従えば、百塚住古遺跡SB02は梁行(柱痕心々間)長が5.7mであることから、大型掘立柱建物に相当する可能性もある。

考古学において、屋外(独立)棟持柱をもつ掘立柱建物は土器や銅鐸の絵画との類縁性から、多義的な性格をもつ「神殿」と評価されることが多い(広瀬1998など)。建築史(浅川1998・浅川編1998など)や民族学(浅川編1998など)の研究者は、独立棟持柱をもつ掘立柱建物や大型掘立柱建物を安易に「神殿」と解釈しがちな考古学研究者に対して懐疑的な立場をとる。もちろん、考古学研究者でも独立棟持柱をもつ掘立柱建物ということだけで特別視することはない(浅川編1998など)、集落全体におけるあり方などから追究すべきという立場は多くある(武末1998など)。

百塚住古遺跡SB02の屋外棟持柱(P02)は、柱痕中心が妻側からわずか35cmしか離れておらず、同柱が妻側から離れて独立して建てられ、切妻屋根の棟木端部を直接支持していたと考えられるかどうかは評価が分かれるだろう。それは考古学で通常、独立棟持柱と認識される事例と比較して妻壁に著しく近接しているからである。浅川滋男氏が指摘する(浅川1998)ように、独立棟持柱が妻壁に近接する小型建物であれば、平地式建物の可能性も想定する必要がある。上述のような学際的議論を踏まえると、百塚住古遺跡SB02の建物構造を推定するには情報不足であり、古墳出現期に何らかの建物群が存在したとの評価に留めるべきである。ただし、それらの建物群が今次発掘調査(百塚住古遺跡B地区:第3章第4節第3節)で検出した前方後円墳(SZ04)の北西約400mに位置することは注意すべきである。

(2)百塚住古遺跡

今次発掘調査が初めての本発掘調査である。第3章第4節第5項で詳述するが、今次発掘調査区では弥生～古墳時代の遺構は確認されていない。しかしながら、主要地方道富山八尾線道路改良事業に先立つ試掘確認調査では弥生土器や流紋岩製の細形管玉が出土している。また、古墳時代前期のもの(第2章第2節)と推定される碧玉製の太形管玉のほか、古墳時代終末期の須恵器(短頸壺・蓋)が採集されている(第2章第2節)。今次発掘調査区の西隣における開発行為に先立って平成17年9月に実施した試掘確認調査では、弥生時代後期～終末期の遺物包含層や土坑が確認されている(盛土保存措置を講じて施

工済)。これらは、今次発掘調査区周辺に弥生時代後期～古墳時代前期、さらに古墳時代終末期の遺構が存在する可能性が高いことを示している。

(3)百塚遺跡

今次発掘調査が初めての本発掘調査である。

(小黑)

第2節 今次発掘調査の概要

平成17年度に百塚住吉遺跡、平成18年度に百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡、平成19・20年度に百塚遺跡の発掘調査を実施した。平成17年度に発掘調査を実施するまでの知見では、百塚住吉遺跡および百塚住吉B遺跡が弥生・奈良・平安時代の集落、百塚遺跡が縄文・奈良・平安時代の遺物散布地との認識であった。調査着手前に想定していなかった北陸最古級の前期古墳が平成17年度調査で確認されたからは、百塚住吉遺跡は集落内に多様な形態の出現期古墳の墓域を含む遺跡と想定し、以後の調査計画を立案した。また、南側に接する百塚遺跡の試掘確認調査を追加実施したところ、百塚住吉遺跡と同様の性格をもつ遺跡と想定されるに至った(第1章第2節第1項)。

3遺跡の発掘調査は、複数年度にわたって断続的に実施したため、調査年次ごと便宜的に仮称地区名を付した。百塚住吉遺跡の平成17年度調査区をA地区、平成18年度調査区をB・C地区、百塚遺跡の平成19年度調査区をA地区、平成20年度調査区をB地区と仮称して調査を実施した。本報告でも、仮称地区名を踏襲して調査年次・地区ごとに報告する。

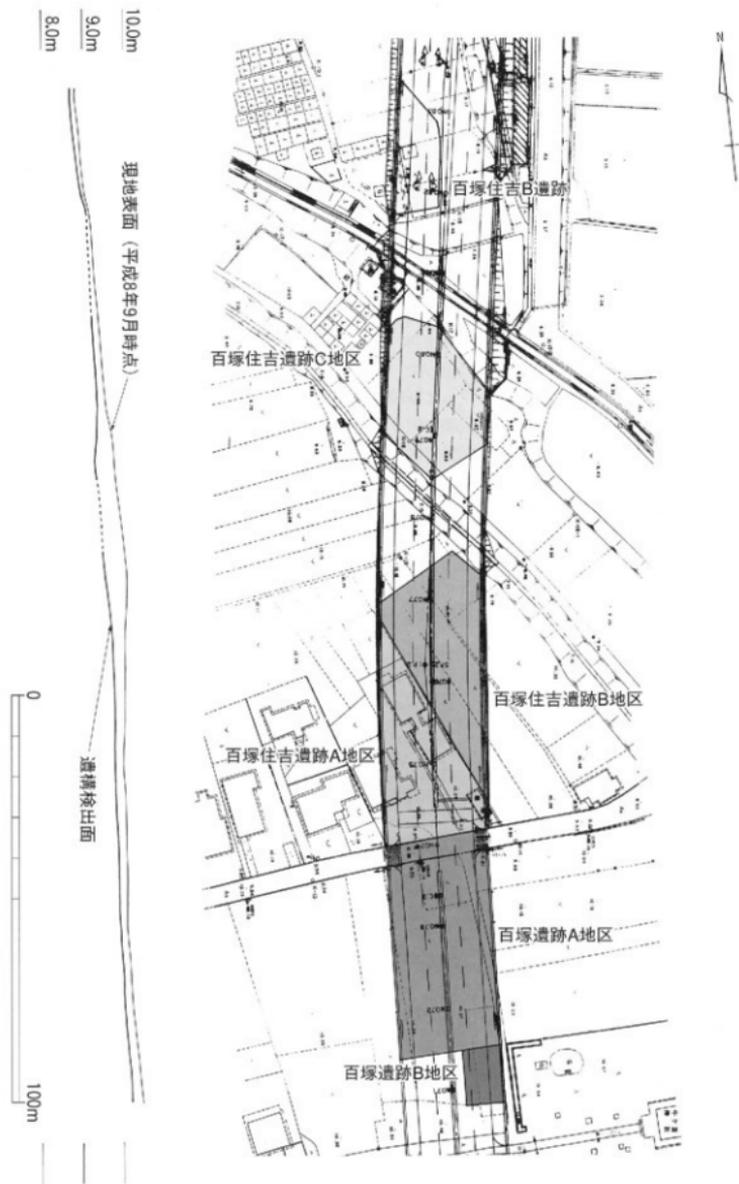
今次発掘調査では、弥生時代後期の堅穴建物や井戸、古墳出現期の多様な墳墓のほか、平安時代の畝跡、近世以降の区画溝を検出し、遺構の帰属年代や重複関係から墳墓の周溝が埋没する過程をおおまかながらも捉えることができた。また、調査所見と文献に残された当地の近世史を総合することで、当地に残る地名「百塚」の由来にせまる手がかりも得られた。各遺跡の調査成果の詳細は次節以降で詳述することとし、第3表に今次発掘調査成果の概要を記しておく。

(小黑)

第3表 今次発掘調査の概要

調査年次	遺跡名(仮称地区名)	主な検出遺構(時代・時期)	主な出土遺物(時代・時期)
平成17年	百塚住吉遺跡(A地区)	堅穴建物1棟・井戸1基(弥生時代後期) 前方後円墳1基(古墳時代前期) 前方後方墳1基(古墳時代前期) 畝跡2群(平安時代前期)	縄文土器(縄文時代晩期) 弥生土器(弥生時代後期～終末期) 土師器(古墳時代前期)
	百塚住吉遺跡(B地区)	前方後円墳1基(古墳時代前期) 前方後方墳2基 ^(※) (古墳時代前期)	縄文土器(縄文時代晩期) 弥生土器(弥生時代終末期) 鉄器(弥生時代終末期?) 土師器(古墳時代前期)
平成18年	百塚住吉遺跡(C地区)	堅穴建物1棟(弥生時代終末期) 方形周溝墓1基(弥生時代終末期) 円墳1基(古墳時代前期)	縄文土器(縄文時代晩期) 弥生土器(弥生時代後期～終末期) 土師器(古墳時代前期) 須恵器・鉄滓(平安時代前期)
	百塚住吉B遺跡	土坑・溝・ピット(時代不明)	土師器・須恵器(平安時代前期)
平成19年	百塚遺跡(A地区)	前方後方形墳丘墓1基(弥生時代終末期) 方形周溝墓2基(弥生時代終末期) 前方後方墳1基 ^(※) (古墳時代前期) 方墳2基(古墳時代前期) 区画溝2条(江戸時代以降)	縄文土器・土偶(縄文時代晩期) 弥生土器(弥生時代終末期) 鉄器(弥生時代終末期) 土師器・菅玉(古墳時代前期) 越中瀬戸・伊万里(江戸中～後期)
		平成20年	百塚遺跡(B地区)

(※)隣接調査区と分割されて調査されたものであり、上記基数の合計は検出遺構総数より多くなる。



第7図 今次発掘調査区の位置と地形の変化
(下図は富山県富山土木センターの提供による、1:1,200)

第3節 平成17年度調査の成果（百塚住古遺跡A地区）

第1項 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査区は狭長な三角形を呈し、南北に展開する。現況（地表面）は、北端で標高約10.5m、南端で標高約10.4mであり、北にかけてわずかに高くなるものの、ほぼ平坦である。調査は平成9年度に実施した試掘確認調査の結果に基づき、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理担当者（以下、監督員と略す）の立会いのもと、基本層序（遺物包含層・遺構検出面）の確認を行うことから始めた。調査・記録等一連の作業は調査区北側から南側に向けて進めることとし、定期的な報告に加え、重要と思われる遺構・遺物の検出時は、監督員と逐次連絡をとりながら進めた。

包含層出土遺物は原則として全点トータルステーションによる三次元計測を行うこととした。また、便宜的に座標基準線に基づいて調査区内を10×10mに区割りし、南から北に向けて1～7、西から東に向けてはA～Dとして、グリッドを設定した。

調査着手段階では、集落遺跡と推定されていた。調査区北半部では、包含層出土遺物の記録・取り上げの後、検出遺構の略測図作成と写真撮影を行い、調査を行った。南半部で古墳の周溝が検出されたことにより、監督員の指示のもと、遺構形状を十分に確認し、微細遺物に留意して調査を進めることとした。古墳が削平されていることから、表土・耕作土・攪乱から出土する遺物についてもグリッド単位で取り上げ、接合関係を追究することとした。

(2) 調査の経過

遺跡の調査は、平成17年10月13日に調査区の設定、基準点・水準点測量を行うことから開始した。調査区南端の市道金山新百塚線下から調査区西隣の住宅へとつながる既設埋設管部分の調査は後半期に実施することとした。表土機械掘削は14日から開始し、18日には作業員3名で除去後の清掃を並行して行い、19日に終了した。人力による遺物包含層掘削・遺構検出・遺構発掘は19日から開始した。調査区中央から南側にかけては、用地買収に伴って移転した住宅の基礎に伴う攪乱が広く認められたため、11月1日に重機で攪乱を除去したのち、地山面の精査を行った。遺物包含層掘削は北側から中央に向けて進め、11月2日から遺構検出作業を開始し、その後遺構検出状態の写真撮影を行った。遺構発掘は11月5日から行い、12月7日に完了した。翌8日に、ラジコンヘリとローリングタワーを使用して全景写真を撮影した。全景写真とあわせ、ラジコンヘリで図化用写真を撮影し、空中写真測量により平面図を作成した。包含層・遺構出土遺物は、番号を付し、トータルステーションによる三次元計測ののち取り上げた。基本層序・遺構覆土の断面実測は12月9日～15日まで行った。その後、既設埋設管部分の調査を行い、終了確認検査を経て現地調査を終了した。

(3) 整理等作業の経過

整理作業は、平成17年12月21日から遺物取り上げラベルの確認と補正に着手した。遺物は主に土器破片で、ラベル記載事項の確認・補正後、遺物洗浄を行った。赤色塗彩された土器の洗浄は、絵筆を使用するなど慎重に行った。また表土・攪乱から出土した鉄製品は乾燥させ、土を除去した後、シリカゲルを使用して防錆保管した。遺物洗浄作業終了後、平成18年1月13日からジェットマーカーを使用して注記作業を同月末まで行い、並行して遺物台帳を作成した。

理化学的分析については、前方後円墳（SZ01）と重複する竈穴建物内の土坑（SI01-SK01）覆土から出土した炭化材を対象として、放射性炭素年代測定（AMS法）および樹種同定を実施した（第4章第1節）。

記録類の整理として、図化用空中写真から平面図を作成したほか、出土遺物の観測データから三次元分布図を作成し、遺物台帳・遺構台帳を作成した。写真測量図面の校正は1～2月に行い、出力図と現場手実測の断面図との補正作業を繰り返し行った。現場記録写真はデジタル画像の編集とあわせて遺構名の統一を図りながら整理したほか、空中写真のカラーポジフィルムをスキャンし、デジ

タル化した。

2月末から3月初旬には遺物台帳・遺構台帳・撮影記録台帳・各遺構土層注記一覧等の作成が終了した。

平成18年9月から10月中旬まで出土遺物の接合・復元を行った。10月中旬から遺物の実測・トレース、写真撮影を行い、12月初旬に終了した。報告書の図版組みおよび原稿執筆・編集は12月から行い、終了確認検査を経て平成19年3月に終了した。

第2項 基本層序 (第8～10図, 第4表)

基本層序は、上からⅠ層：表土 Ⅱ層：遺物包含層 Ⅲ層：漸移層 Ⅳ層：地山である。Ⅰ層は厚さ20cm～50cm、主に現代の畑耕作土で、調査区南側では耕作が地山まで及んでいた。Ⅱ層は調査区北側から中央にかけて認められ、色調および土質の差から黒色土(ⅡA層)と暗褐色土(ⅡB層)に分かれる。層厚はⅡA層が10cm～40cm、ⅡB層が10cm～30cmである。中央部ではⅡA・ⅡB層ともに比較的良好に遺存しており、Ⅱ層出土遺物は主にこの範囲で出土した。

遺構確認面は、Ⅲ層上面またはⅣ層上面である。Ⅲ層の層厚は約10cmで、Ⅱ層同様、主に調査区北側から中央にかけて認められた。遺構確認面の標高は最も低い北端部で約9.7m、最も高い南端西側で約10.0mであり、調査区の微地形はⅡB層が残存する北側が低く、南側に向けて高まっていたと判断できる。

(小柳太一)

第4表 基本層序

層名	土色	土質 粘性	土質 しまり	性格
Ⅰ : 2.5Y3/3	暗オリーブ褐色土	弱	弱	表土 (主に現代の畑耕作土)
ⅡA : 10YR2/1	黒色土	弱	弱	遺物包含層 (弥生遺物主体だが、古代遺物を若干含む)
ⅡB : 10YR3/3	暗褐色土	中	中	遺物包含層 (弥生遺物主体だが、古代遺物を若干含む)
Ⅲ : 2.5Y4/4	オリーブ褐色土	中	中	漸移層
Ⅳ : 2.5Y5/4	黄褐色土	中	中	地山 (調査区中央はシルト質)

土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修 日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」(2001年版)による



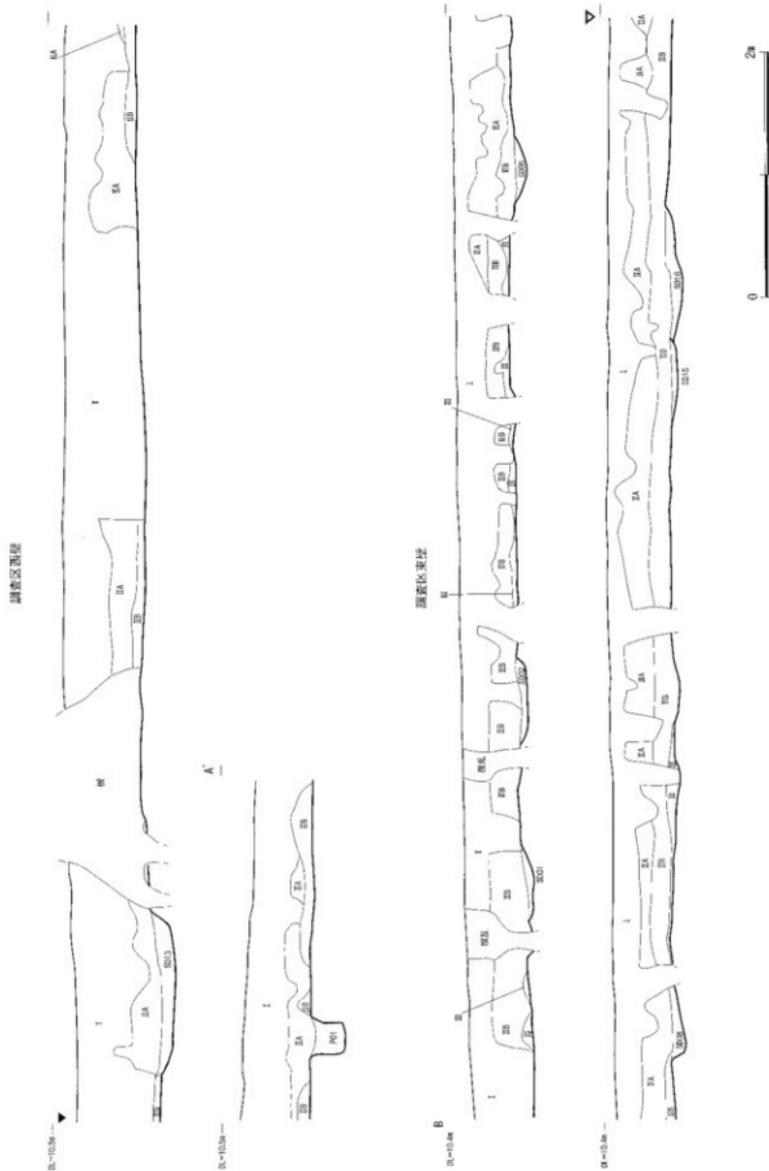
遺構発掘作業風景 (東壁付近)



遺構発掘作業風景 (西壁付近)



第8図 調査区西壁断面図
 (セクションポイントは第11図参照、▼は第9図上の▼に続く)



第9図 調査区西壁・東壁断面図
 (セクションポイントは第11図参照、▽は第10図上の▽に続く)

第3項 検出遺構の概要

検出した遺構は、前方後円墳（SZ01）1基、前方後方墳（SZ02）1基、方形周溝状遺構（SX01・SX02）2基、竪穴建物（SI01）1棟、井戸（SE01）1基、畠跡小溝（SD01～SD85）85条、柱穴（P01～P12）12基である（第10・11図）。すべてⅢ層上面またはⅣ層上面で検出した。Ⅱ層から掘り込まれた遺構はない。ここでは各遺構について詳述する。

(1)古墳

2基の古墳は、いずれも墳丘および主体部が後世の削平により、遺存しない。規模計測点は、原則として「前方後円墳集成」（近藤藤1991ほか）に準拠した。

前方後円墳（SZ01、第13～15図） 調査区の中央から南東にかけて位置する。SZ01の南西にSZ02とSX02が隣接する。北側にはSI01があり、重複関係からSZ01の方が新しいことがわかる。Ⅰ層除去後の地山面で、黒色の周溝プランを検出した。墳丘東側の周溝は調査区外に続く。周溝検出時の標高は、後円部で約9.8m、前方部で約10.0mである。正円形の後円部に幅の狭い前方部が接続する。後円部直径は約13mで、くびれ部幅は約3m（検出面）と狭い。前方部前端は調査区外のため不明で、前方部西側周溝の確認長はくびれ部から約11mである。主軸方位はN-55°-Wである。

後円部周溝は北側で上面幅約2m、底面幅約0.8m、深さは0.9mで、底面の標高は8.8mである。西側は上面幅約2.5m、底面幅約0.6m、深さ1.4mで、底面の標高は8.7mである。くびれ部では上面幅約2.6m、底面幅約1.0m、深さ1.7mで、底面の標高は8.4mである。後円部西側からくびれ部にかけての周溝断面形は、墳丘側が緩やかで、墳丘外方向は直立気味である。後円部後方（北側）も同様で、墳丘外方向の壁は直立気味である。後円部周溝底面は、北側（A-A'ライン）から西側（B-B'ライン）にかけて若干の起伏（約5～10cm）がみられ、くびれ部に向かって深くなる。

前方部周溝（E-E'ライン上面）は攪乱を受けているものの、推定幅約1.4m、底面幅0.7m、深さ0.5mで、底面の標高は9.5mである。これより南東は上面幅1.0m、底面幅0.5m～1.0m、深さ0.2mの不整な浅い溝となる。ただし、これは削平の影響によると考えられる。

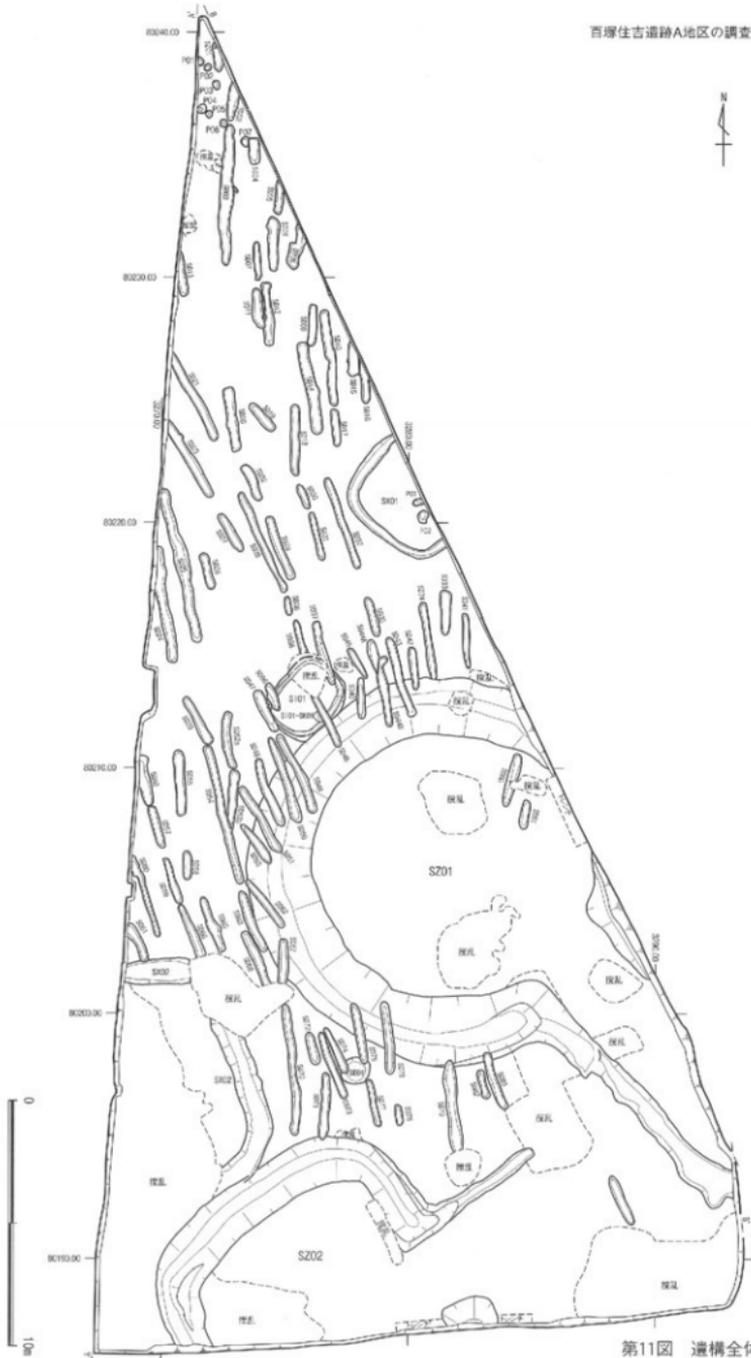
後円部西側周溝（B-B'ライン）の覆土は自然堆積で、主に上位1～2層がⅡ層起源の暗褐色～黒褐色土である。中位～下位（3～6層）は褐色土からなり、地山起源の粒子・塊を伴う。6層は、墳丘側の周溝壁際から底面直上にかけて堆積し、周溝壁面の崩落土と考えられる地山粒からなる。7層も6層と同質だが、比較的大きな地山ブロックを伴う。

くびれ部（C-C'ライン）の上位1～4層はB-B'ラインと同質である。5層は周溝壁の地山面付近に当たり、周溝壁面上位からの崩落土が認められる。6・7層はいずれも地山粒子を含む粘性のある黒色土からなり、墳丘盛土（旧表土を転用したもの）の初期崩落土と判断される。前方部周溝は上位が削平されている。下位には周溝壁面崩落土を含む褐色土が堆積していた。

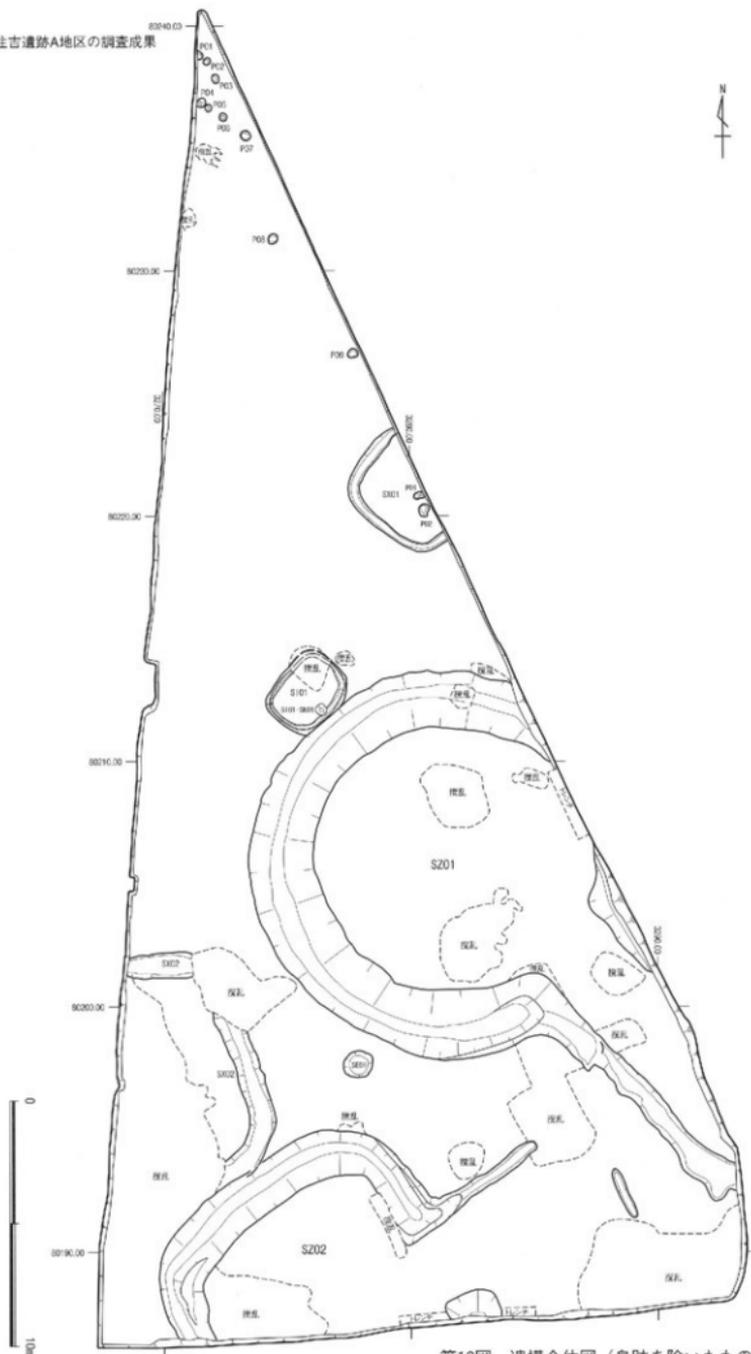
出土遺物は少なく、周溝の覆土上位から中位にかけて土器破片が3点出土した。後円部西側周溝（B-B'ライン）の4層上面で赤色塗彩された器台（17）と壺（15）が、くびれ部（C-C'ライン）付近の4層中から台付甕（16）が出土した（第15図）。削平された墳丘盛土に含まれていた破片が周溝内に混入した可能性もあり、SZ01の上限時期を検討する手がかりとなる資料である。

前方後方墳（SZ02、第16～18図） 調査区の南端に位置する。SZ01の南西側にあつて、SZ01とSZ02の前方部がほぼ直交して隣接する特徴的な配置をとる。後円部北側周溝は一部SX02と重複し、SZ02の方が古い。Ⅰ層・攪乱除去後の地山面で周溝を検出した。検出時の標高は、北側で約9.6m、中央～南側で約10.0mである。後円部南半は調査区外に伸びる。推定全長（周溝含む）は約18.5m、前方部長8.7m、くびれ部幅は約3mである。

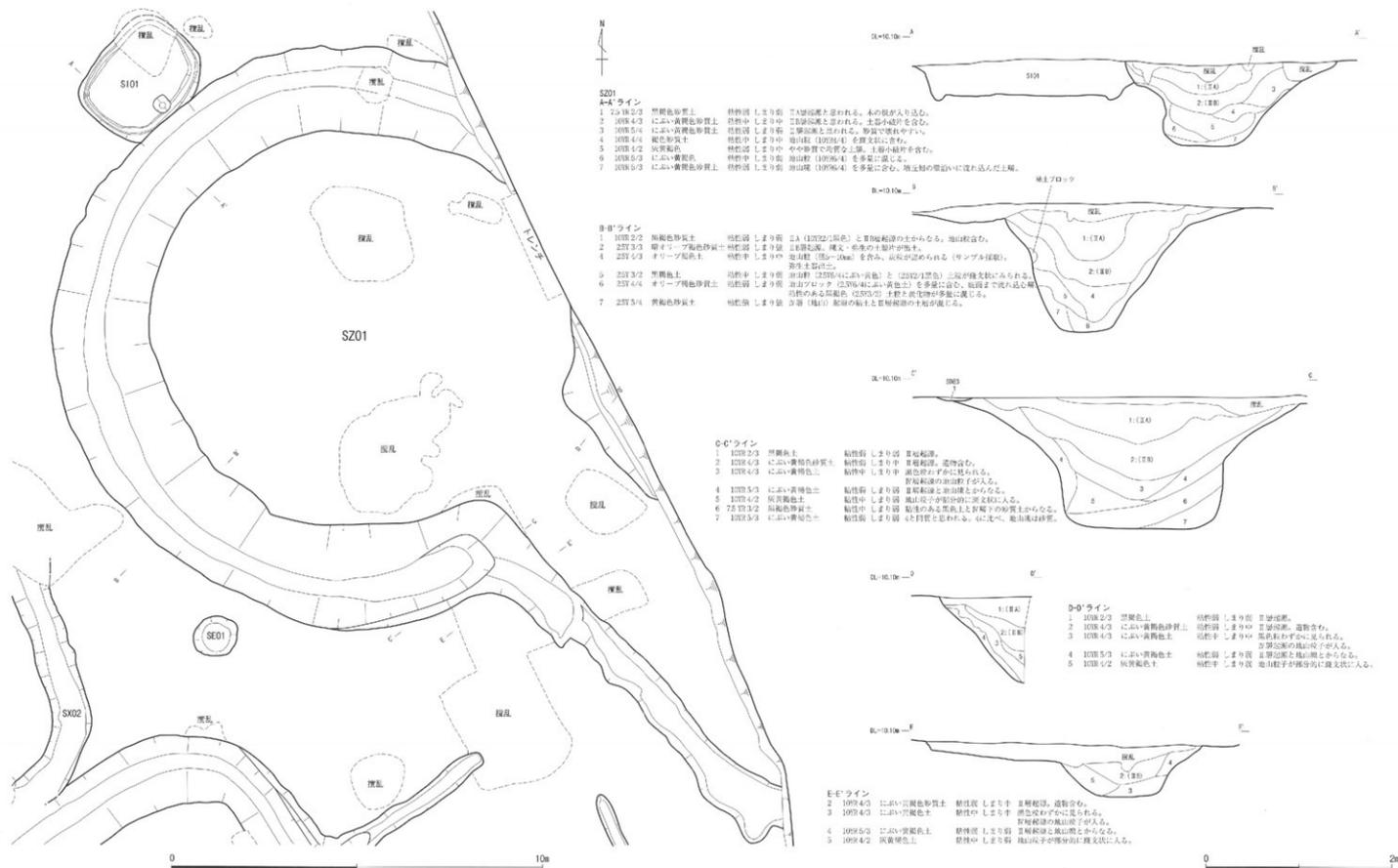
確認された周溝は上面幅約1.3m、底面幅約0.5m、深さ約0.4m、底面標高は9.5mである。後円部北側周溝はSX02と重複しない東側地点で、上面幅約1.8m、底面幅約0.5m、深さ約0.9m、底面の標高は9.08mである。北側くびれ部の周溝は上面幅約2.0m、底面幅約0.4m、深さ約0.84m、底面の標高は



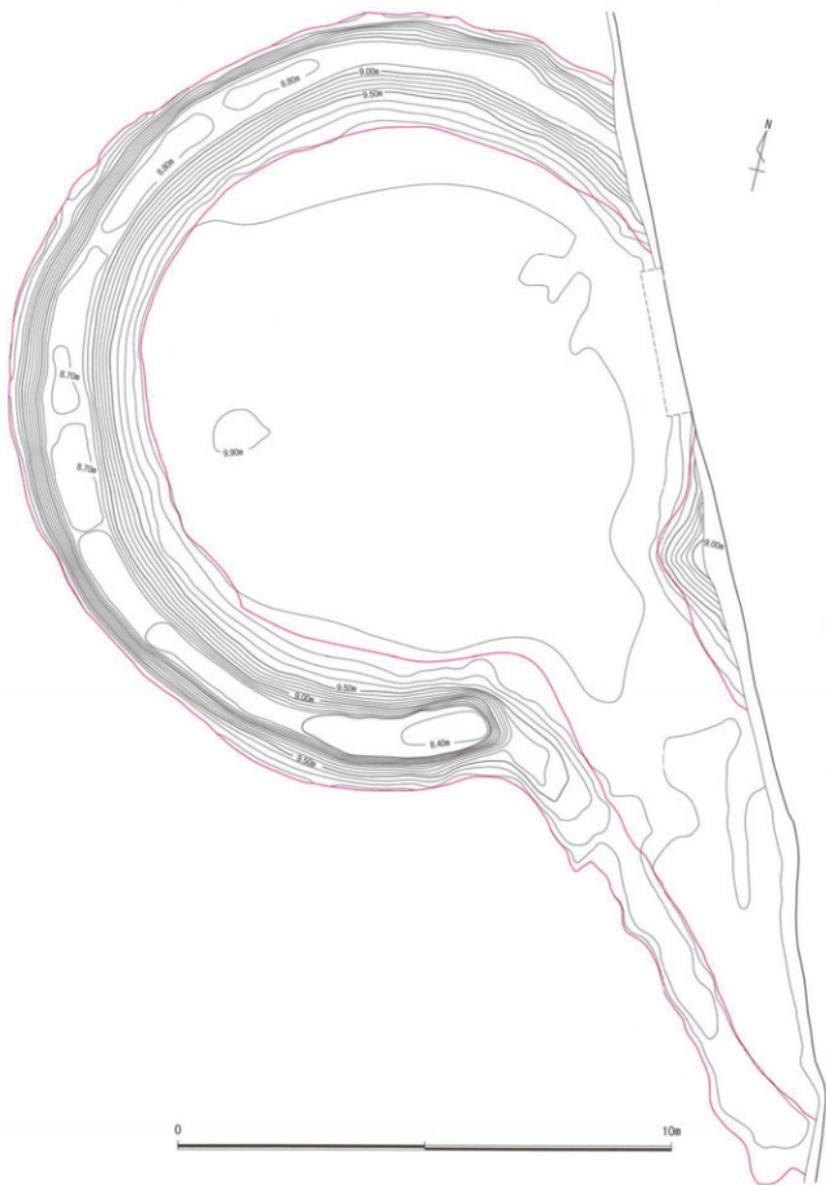
第11図 遺構全体図



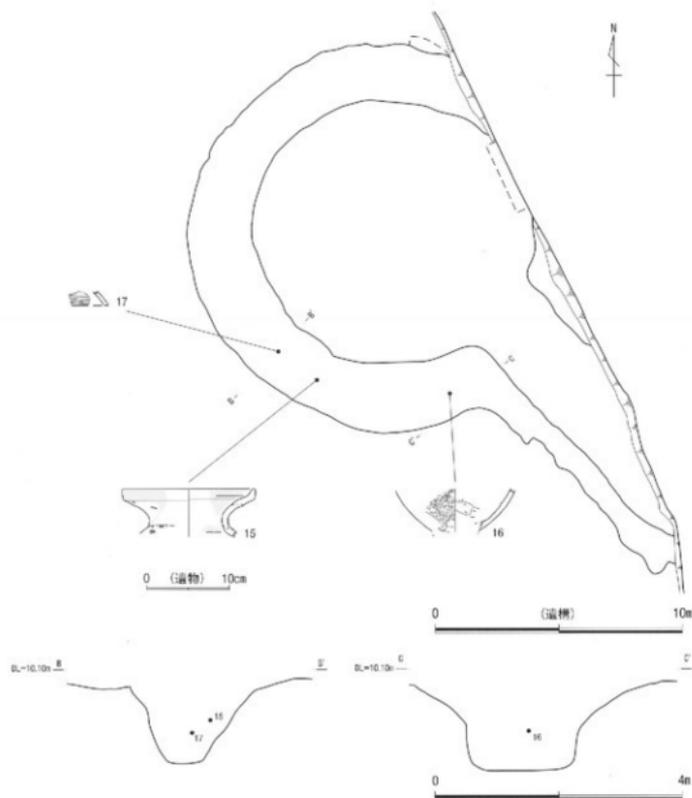
第12図 遺構全体図（畠跡を除いたもの）



第13図 SZ01平面図・断面図



第14図 SZ01等高線図

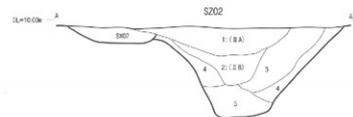
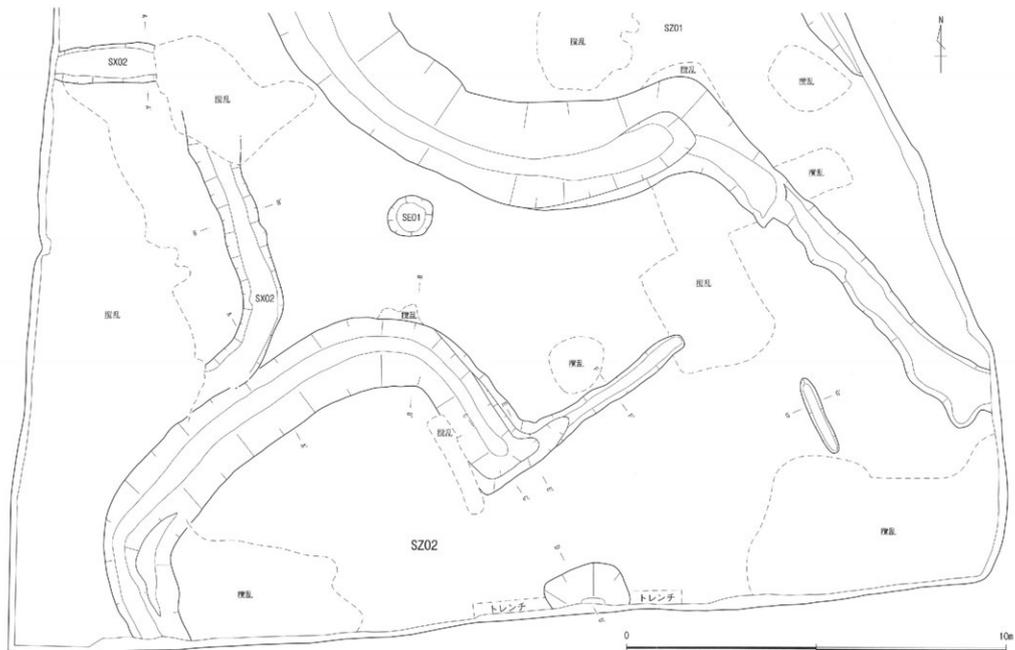


第15図 SZ01遺物出土状態

9.1mである。前方部の周溝はくびれ部から約2m地点を境に前端に向かって急激に立ち上がり、その先はさらに浅くなって3.5m続く。浅い溝(F-F'ライン)の上面幅は約0.5m、底面幅約0.3m、深さ約0.1mで、底面の標高は9.85mである。周溝の断面形は概ね逆台形である。周溝の覆土は、上位(1・2層)がⅡA層起源の褐灰色砂質土、3層がⅡB層起源、中位(4層)は崩落土、下位(5・6層)は黒褐色土、地山混じりの黒褐色土上からなる。このうち4～6層が初期堆積で墳丘盛土からの崩落土を含む。

前方部前端の周溝は上部が攪乱を被っており、底面のみ一部で確認できた。覆土は前方部北側周溝と同質である。また、底面が平坦であることは、後述する島の小溝と異なるため、前方部前端の周溝と判断した。長さ約3.0m、幅約0.3m、深さ約0.1m、底面の標高は9.82mである。底面の標高は前方部北側周溝とほぼ同じである。前端周溝の北側地山面の標高は9.94m、南側の攪乱範囲外の地山面標高が9.9m前後であることから、前方部隅角の周溝底面は高かったと推定できる。

周溝覆土から土器破片が多く出土した。このうち、後方部北側周溝の1層から高坏の坏部(31)、3層から甕の口縁部破片(29)、甕の口縁部(30)が出土した。北東隅のやや西、周溝底面付近(4



- SX02
A-A ライン
1 100% 赤土 黒褐色土 掘削跡 しまり跡 土器片散在
2 100% 赤土 黒褐色土 掘削跡 しまり跡 土器片散在
B-B ライン
1 100% 赤土 黒褐色土 掘削跡 しまり跡 土器片散在
2 100% 赤土 黒褐色土 掘削跡 しまり跡 土器片散在

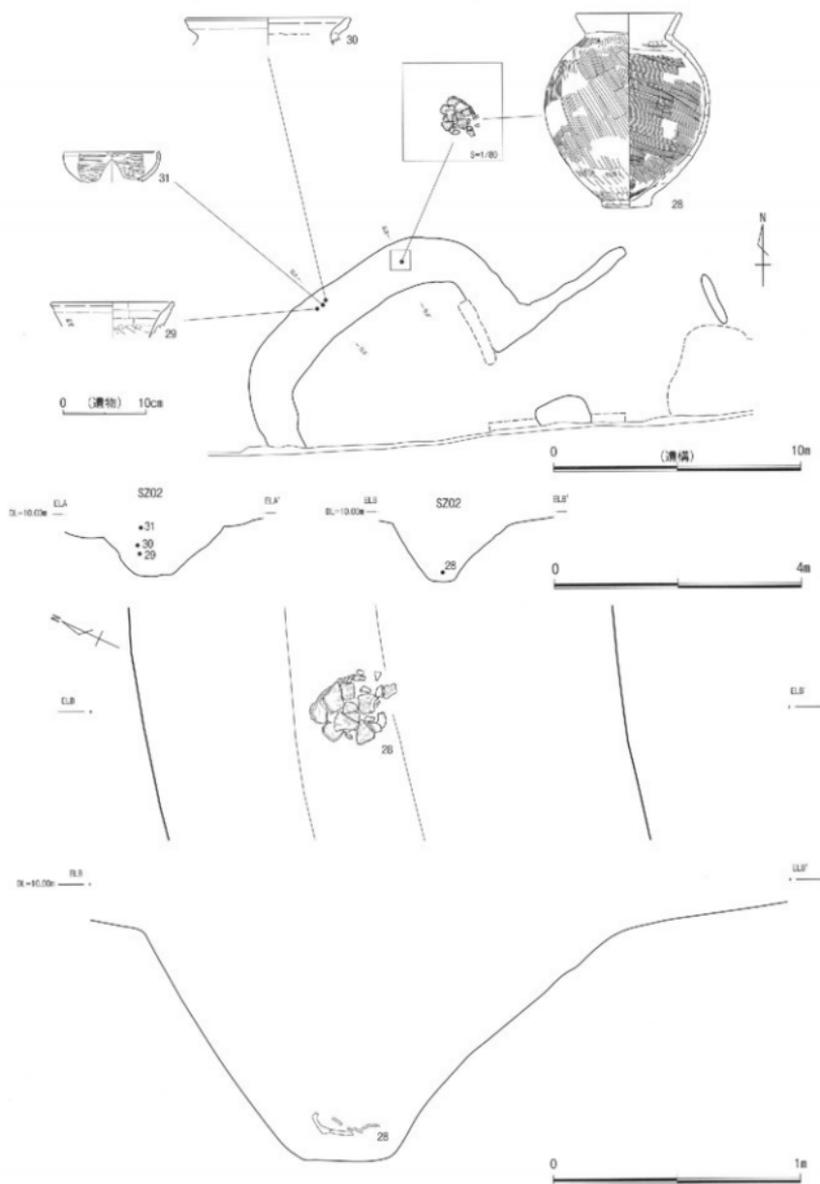
- SZ02 (A-F ライン)
1 75% 赤土、掘削跡、土器片散在
2 100% 赤土、掘削跡、土器片散在
3 100% 赤土、掘削跡、土器片散在
4 100% 赤土、掘削跡、土器片散在
5 100% 赤土、掘削跡、土器片散在
6 25% 赤土、掘削跡、土器片散在

第16図 SZ02・SX02平面図・断面図

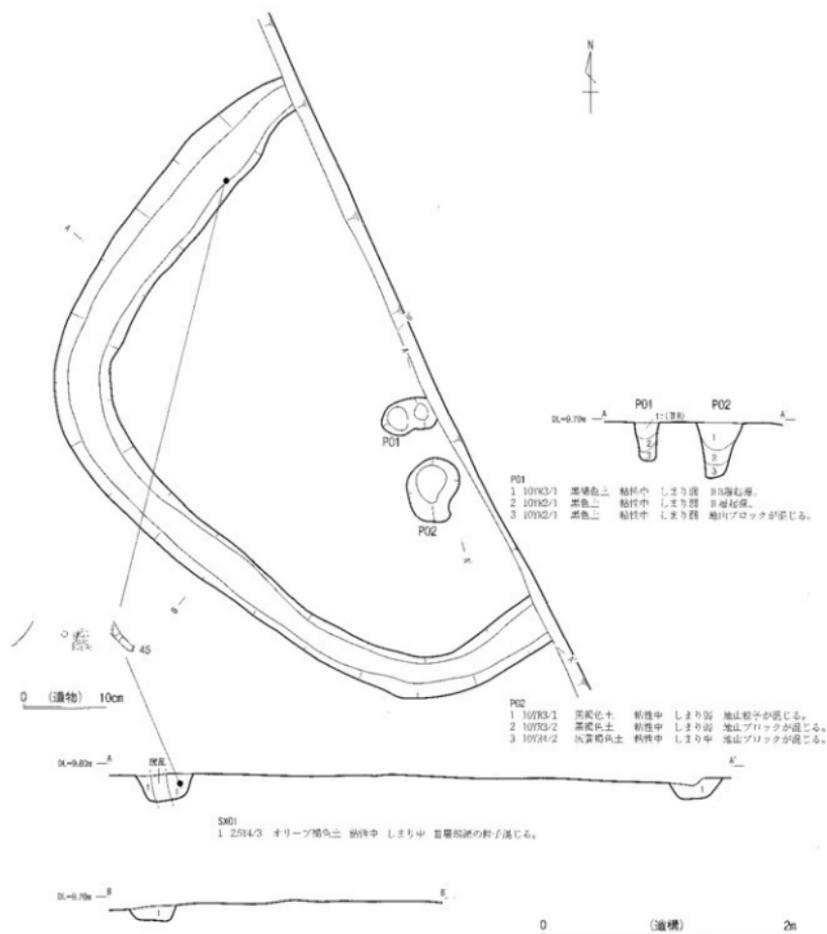




第17図 SZ02等高線図



第18図 SZ02遺物出土状態

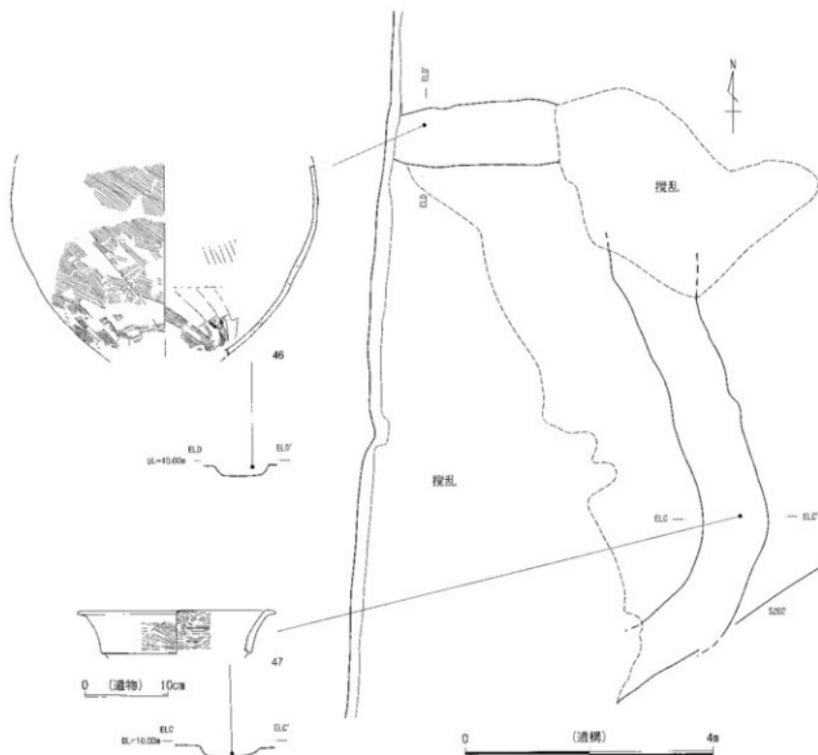


第19図 SX01平面図・断面図

層)で、ほぼ完全な壺(28)が横転して潰れた状態で出土した(第18図)。28は出土層位の性格(B-B'ライン4層相当)から墳丘盛土の崩落とともに転落したと判断される。つまり、28は埋葬儀礼に使用された供献土器と考えられるので、本墳の時期認定の資料となり得る。

(2)方形周溝状遺構

SX01(第19図) 調査区中央東壁付近に位置する。一辺約5mの方形周溝状遺構で、幅0.3m～

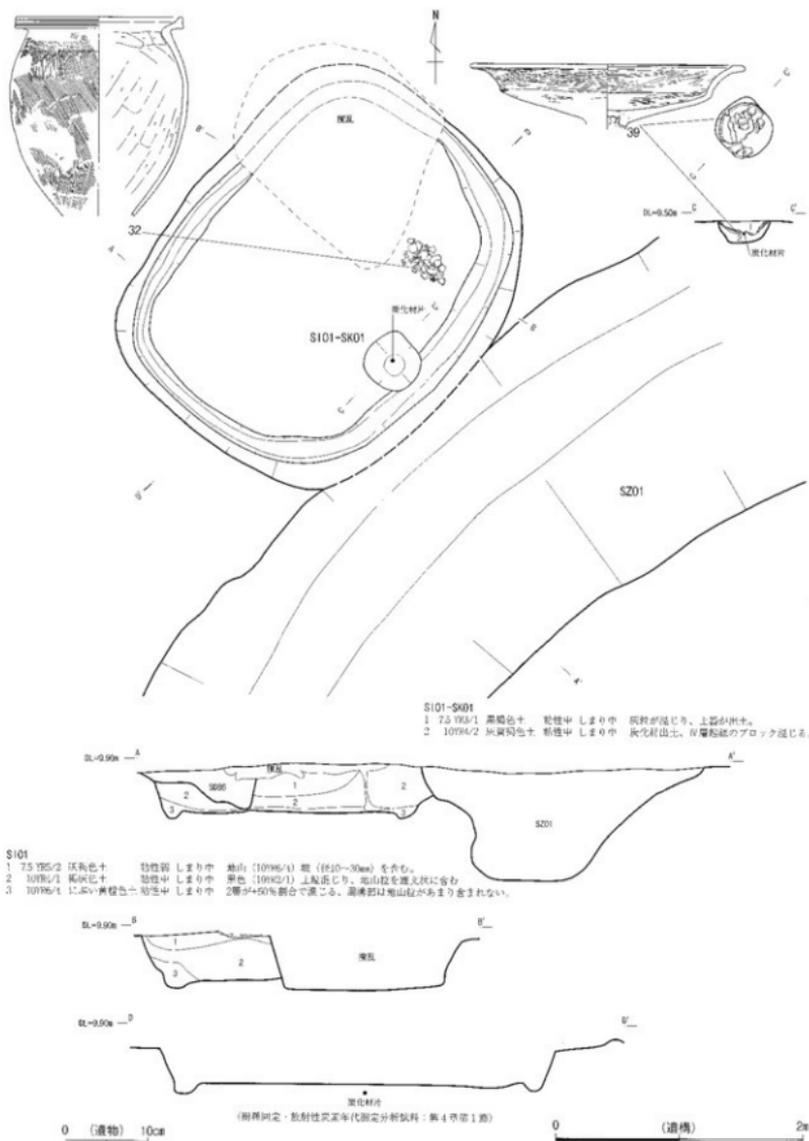


第20図 SX02遺物出土状態

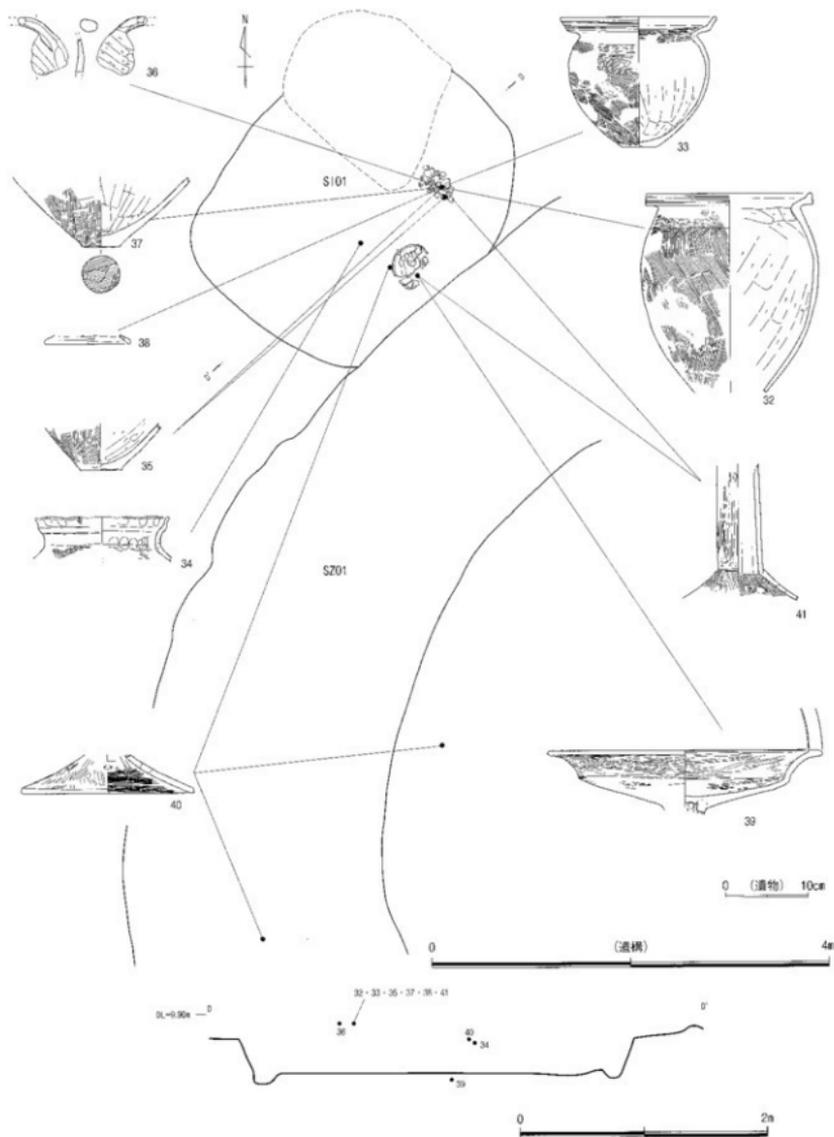
0.5m、深さ約0.2mの溝が方形に巡る。調査区外に伸びることは確かだが、詳細は不明である。覆土は2層で、土器片が数点出土した。北西辺で高坏の脚部(45)が出土した。

溝の内側中央からやや南で柱穴を2基(P01・P02)検出した。P01は直径約0.2mの不整形で深さ約0.3m、P02は直径約0.5mの不整形で深さ約0.4mである。遺物は出土していない。溝の内側の東隅付近で対応するピットは確認されておらず、炉や貼床も確認されていないが、柱穴の存在から本溝を竪穴建物の壁溝と推定する。後述するSI01の壁溝と比べて溝は幅広で深いが、規模はSX01の方が大きい。竪穴が全く遺存していないので、建物が機能していた時期の地表面だけでなく、建物床面まで完全に削平されたと考えられる。

SX02(第16・20号) 調査区南西部に位置する。西半分は調査区外に伸びる。溝はおおむね方形に巡るが、遺構周辺は攪乱を被っており、北東隅と南辺の一部は確認されなかった。溝の東辺長は約11mと推定される。溝は約0.8m、深さ約0.5mである。溝の内側で柱穴・か・貼床等は確認されていない。覆土は2層からなり、上位(1層)はII層起源の黒褐色土、下位(2層)は地山ブロックを含む



第21図 SI01平面図・断面図



第22図 SI01遺物出土状態

砂質土である。

溝の北辺から甕の体部破片(46)が、南東隅から高坏の口縁部(47)が出土した。いずれも覆土2層からの出土品である(第20図)。SX02はSZ02後方部北側周溝の一部を壊しており(SZ02A-A'ライン)、SX02がSZ02より新しいことがわかる。

(3) 竪穴建物

SI01(第21・22図) 調査区中央に位置する。2.5m×3.0mの長方形を呈し、深さは約0.5mである。床面壁際には幅約0.2m、深さ約0.1mの壁溝が巡る。南壁上部はSZ01に削られている。覆土は3層からなり、1層は褐色土、2層は黒色土、3層は床面直上層である。貼床はなく、舟跡や柱穴は確認されなかった。3層中で直径約0.4mの不整形の土坑(SI01-SK01)を検出した。深さは約0.2mである。覆土は1層の黒褐色土、2層の灰黄褐色土からなる。壁溝との重複関係から、SI01-SK01は壁溝埋没後の遺構とわかる。

竪穴北東隅の覆土1層で遺物が集中して出土した。甕・壺・高坏など複数個体の破片が出土しており、竪穴埋没過程でまとめて廃棄されたものと考えられる。SI01-SK01からは高坏の坏部(口径約33cm)が出土した。脚部を欠き、崩れてやや傾くものの、坏部内面を上方に向けていた。坏部口径は土坑直径とほぼ同規模である。坏部の直下(土坑の中央)で長さ5cmほどの炭化材片をほぼ水平な状態で検出した。土坑内に燃焼痕跡はなく、ほかに炭化材や焼土粒は確認されていない。燃焼痕跡は建物内外でも確認されておらず、他から混入した可能性は低い。以上から、SI01-SK01は炭化材片を置くことで防湿性を高めた施設と推定される。炭化材は、樹種同定の結果、針葉樹のマツ属複雑管束亜属と判明した。同試料を放射性炭素年代測定(AMS法)したところ、calAD53-calAD93(σ, IAAA-51952)の結果を得た(第4章第1節)。

(4) 井戸

SE01(第23図) SZ01とSZ02のほぼ中間に位置する直径約1mの円形井戸である。検出面下約2mで湧水層に達した。冬期の調査であり、安全確保のため、下部の調査は断念せざるを得なかった。井戸の深さは不明だが、規模・形状から素掘り井戸の可能性が高いと判断している。

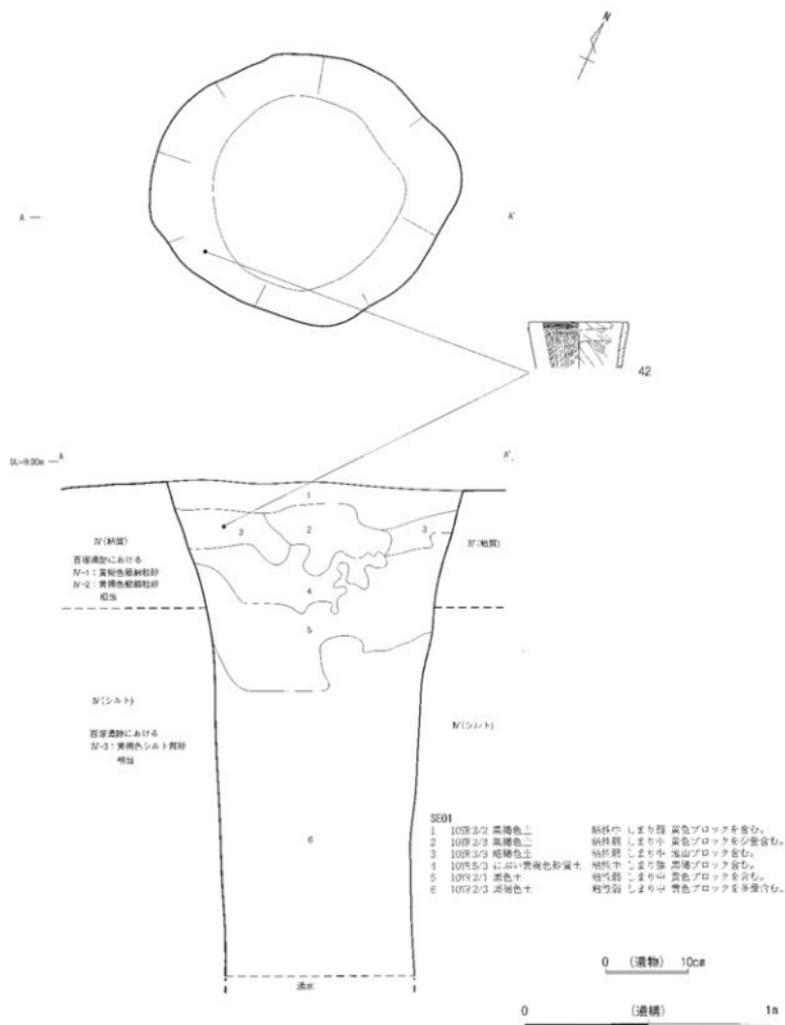
覆土上位には地山ブロックが多量に入っており、この下位に地山起源の黄褐色土と黒褐色土との互層がみられた。廃絶後一定の放置期間(6層の堆積期間)を経て、人為的に埋め戻されたことがわかる。覆土上位からは弥生土器の破片(42)が少量みつかり、埋め戻される段階で紛れ込んだと考えられる。構築時期の特定には繋げられないものの、覆土6層の様相がSI01の覆土(2層)と似ていることから、SI01とほぼ同時期の可能性がある。

(5) 畝跡(第11・24・25図)

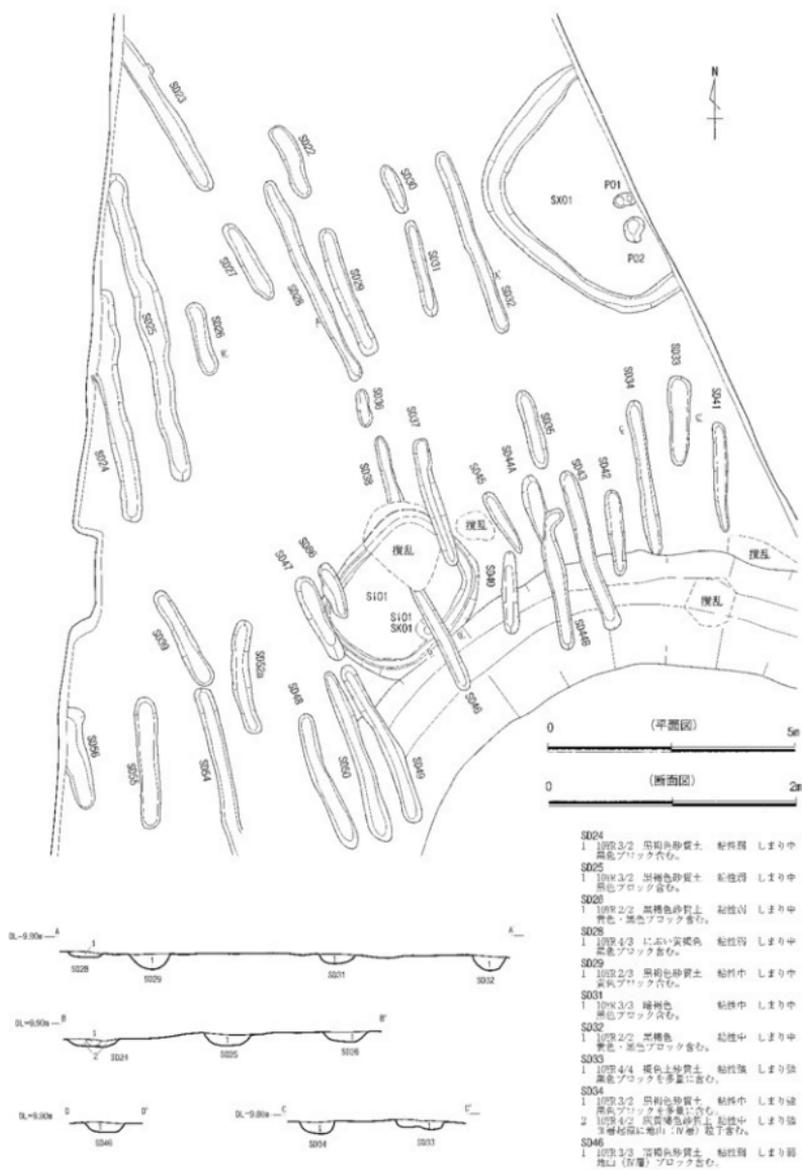
調査区北側から南西にかけて85条の小溝が検出された。溝間に幅があり、壁が崩れやすく、底面に凹凸がみられること、覆土にブロック状の地山を含む小溝群であることから、畝の畝たての溝と判断される。これらは、概ね軸方位でN-5°-W-N-38°-W(北西-南東;以下、第I群とする)、N-0°-W-N-17°-E(北-南;以下、第II群とする)の2群に大別できる(第25図)。第I群は全体の約80%を占め、規模は長いもので約4.5m、短いもので約1m、幅平均約30cm、深さ約10-30cmである。主に調査区の西から南にかけて分布しており、重複関係から調査区中央部のSI01・SZ01・SX02より新しいことがわかる。第II群は調査区北にまとまって分布する傾向がみられる。

なお、SD80・81(N-12°-E・N-9°-E)はいずれも浅く、出土遺物はない。軸方位は北東-南西で第II群と同様だが、調査区北のまとまりから離れていることから第II群とは異なるものと捉えられる。畝跡とは無関係の小溝の可能性が高い。

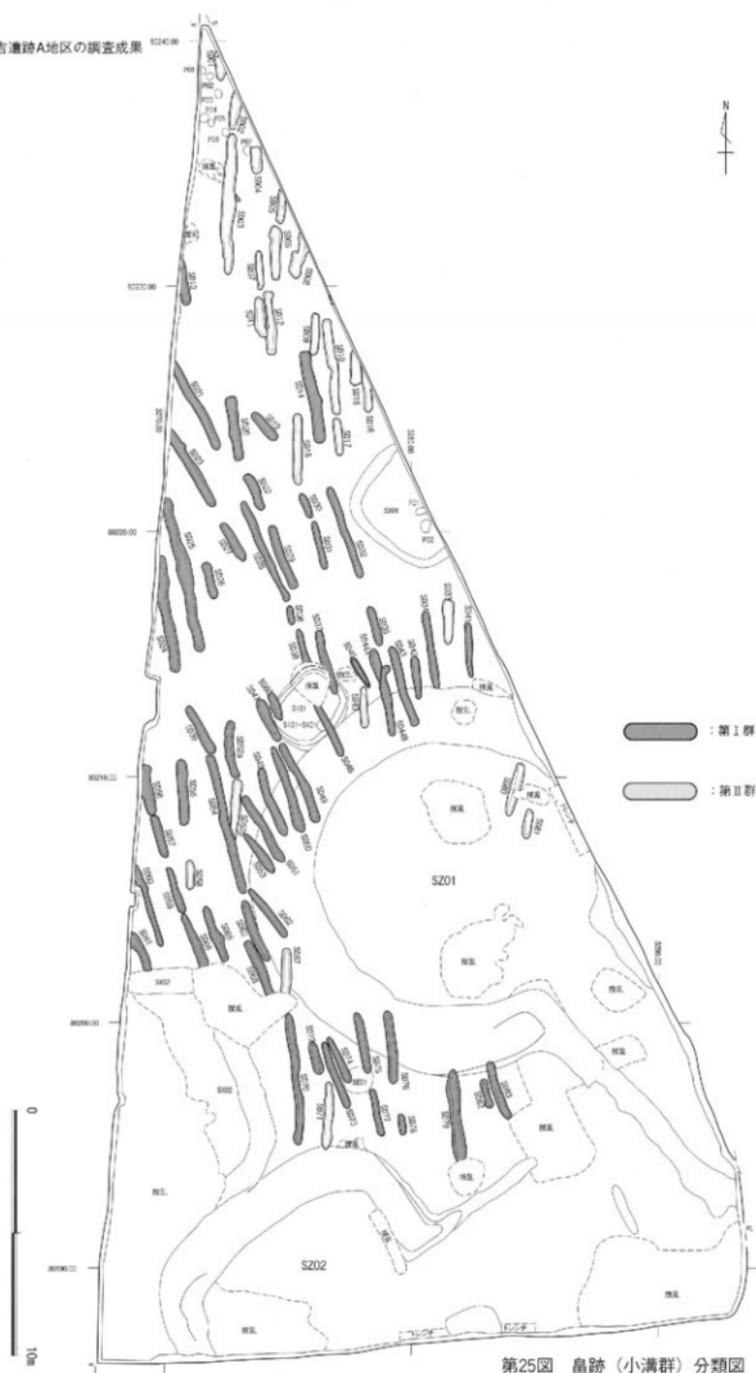
覆土は両群ともに1-2層からなり、上位1層にII層起源の黒褐色土がみられるものもある。おおむね地山起源の粒子・ブロックが混じる。覆土から土器片が数点出土した。ほとんどが摩滅した弥生土器の小破片で、古墳の周溝等からの混入品と考えられる。第I群のSD55(N-3°-W)から須恵



第23図 SE01平面図・断面図



第24図 鳥跡（小溝群）平面図・断面図



第25図 畠跡（小溝群）分類図

器片が出土した。両群の時期差については、第Ⅰ群SD54 (N-13° -W、覆土は地山粒子を含む砂質土)と第Ⅱ群のSD52b (N-9° -E、覆土は褐灰色砂質土)の重複関係を根拠に、第Ⅰ群が新しいと推定できる。

第Ⅰ群は顕著だが、第Ⅱ群を含めて小溝群の平面分布をみると、SZ01・02の周溝部分で途切れる傾向を認めることができる。小溝群の平面分布が墳丘部分を回避した結果と考えると、SZ01・02は少なくとも古代までは墓と認識できるだけの墳丘盛土が存在していたことで、耕地化を免れたと考えられる。

(6)柱穴 (第11・12図)

調査区北端で8基 (P01~08)、やや南側に離れて1基 (P09)の計9基を検出した。P07~P09はいずれも小溝に削られていたため、高よりも古いと判断される。9基の覆土は概ね地山ブロックを含む黒褐色土の単層である。ほぼ垂直に掘られていることや規模・形状からいずれも柱穴と判断した。建物と認定できる配列は見られない。なお、遺物は出土していない。(小柳リラコ)

第4項 出土遺物の概要 (第26~30図, 第5~7表)

出土遺物は総点数で3,514点(破片)、遺物収納コンテナ(内寸54cm×32cm×9cm)で21箱程である。礫や古代の須恵器、近現代の陶磁器類を除くと、土器は3,480点で、そのほとんどが弥生土器である。このうち、半数の1,700点が表土・遺物包含層などからの出土品で、残りの1,780点が遺構出土遺物である。ただし、後者についても覆土内への混入品が多く、遺構が機能していた時期を示す遺物はごくわずかであった。遺物包含層などの遺構外から出土した遺物の分布傾向はSX01周辺に重心がある。

調査区全域にわたって存在する小溝群は、畠(古代)に伴うものである。遺構包含層は、これら畠の耕作土など遺構覆土に由来しており、本来は遺物が存在した層序が擾乱されることで形成されたと理解できる。SX01周辺に遺物の分布重心が偏ることから、当該部分に畠耕作などで失われた遺構が存在した可能性がある。

実測遺物は63個体である。時期別・遺構別に解説を加え、出土遺物のまとめとしたい。土器の編年的位置づけに際しては、次の報告・論考を参考とした。縄文時代は富山市吉岡遺跡の報告(富山市教育委員会2002)を、弥生~古墳時代は高橋浩二氏の論考(高橋2005)を主とし、東海系土器は廻間編年(赤塚1990)を参考とした。主体となる弥生~古墳時代の土器の時期的な対比は、汎用性の高い石川県(加賀)の土器型式名にあてはめ、〇〇式期と表記する。また、加賀漆町遺跡編年(田嶋1986, 以下、漆町編年とする)も併用する。

(1)縄文時代

縄文土器は晩期が主体である。晩期の沈線文・条痕文系土器としては、SZ01(第26図1~4)・SZ02(第27図18・19)、遺構外(第30図51~54)の資料がある。いずれも遺構に直接伴う資料ではない。墳丘盛土への混入品等と考えられる。

深鉢形土器(以下、深鉢とする)は7点(第26図1~3、第27図18、第30図51・53・54)で、口縁部5個体、底部2個体である。口縁部は口唇部直下に弧状の条痕文が巡り、その直下に強い指頭ナデにより複数条の沈線が巡らされる。第26図1は指頭による沈線下に変形工字文が施文される。類例は吉岡遺跡V群a類に認められる。底部個体はいずれも条痕文で、54は底面に縄代痕が認められる。51は表土から出土した口縁部破片である。地文にLRの縄文を施し、沈線により区画され、口唇部・隆帯上の2段にわたり押し列点文を施している。

52は壺形土器(以下、壺とする)の口縁部の破片で、外面は赤色塗彩されている。外面に網状文と思われる沈線文が施文され、ミガキが施されている。鉢形土器は2点(第27図19、第30図53)で、壺と同様外面に浮線網状文風の沈線文とミガキ調整を施し、赤色塗彩される。

これらの土器群は晩期後葉の範疇で捉えられる。

(2) 弥生時代

弥生時代後期に位置づけられる土器が主体を占める。SI01のように遺構に伴うものもあるが、遺物包含層やSZ01・02の周溝覆土に混入するものが大半である。

SI01 甕を主体とし、把手付甕、高坏、無頸甕などが含まれる。全形復元できたのは甕2個体(第28図32・33)のみである。いずれも有段口縁に擬凹線文を巡らせて、肩部には連続する刻みを施し、体部外面はハケ調整、内面はケズリによる。34の甕は指頭押圧によるつまみ出し風の受口状の口縁部が特徴的である。高坏形土器(以下、高坏とする)は全体にミガキが施され、脚底部内面にハケ調整痕が認められる。坏部の口縁が肥厚するが、脚底部に有段を呈するものはない。高坏の坏部口縁の肥厚は古い様相だが、甕の体部が卵形を呈することや、高坏の脚部・裾部の形状から法仏式新段階に比定できる。

SZ01・02、遺物包含層 周溝覆土への混入品や、遺物包含層出土土器としては、壺・甕・甔・高坏・器台・台付装飾壺・蓋などがある。いずれも破片資料であり、全形復元できるものはない。

壺形土器(以下、壺とする)は第26図5・6、第30図55である。5は広口壺の頸部破片で、外面ミガキ、内面ハケ後ナデが施される。55は壺の肩部破片で、外面はハケ調整後ナデ、内面はわずかにハケ調整を残している。壺は10点で、3形態に分類される。有段口縁に擬凹線文を巡らせるものは7・8・20である。9および21は有段口縁だが、擬凹線文は認められない。また、10・22・23・57・58はつまみ出し風の口唇部を持つ。甔は59の1点のみである。底部破片で八の字状に開く器形をとり、外面ハケ調整、内面ケズリで焼成前に径8mmの孔が穿たれている。

高坏は7点で、このうち坏部が25・26・61の3点である。いずれも外反する口縁部をもち、内外面ともミガキ調整を施している。26・61は口唇端部が肥厚する。25は器台形土器(以下、器台とする)の可能性も考えられる。脚部および脚底部は27・62・63である。27は低脚の高坏で、脚底部に擬凹線が施されている。63は外面にミガキ調整を施し、S字状スタンプ文と鋸歯文で装飾されている。13は器台である。外面ミガキ調整で擬凹線文・S字状スタンプ文による装飾が施され、小孔が穿たれている。11・12は台付装飾壺である。いずれも突帯部の小破片で全形は不明だが、11は突帯凸面に連続刺突文が、12は連続山形文が施文される。いずれも突帯部凸面外面が赤色塗彩される。蓋は1点(60)のみで、紐部である。紐部は小孔の開くタイプではない。

これらの土器は、その形態的特徴から法仏式期～月影式期に位置づけられる。

SE01 甕(第29図43)はいわゆる「く」の字口縁甕であり、「能登形甕」といわれるものである。田嶋分類(田嶋1986)のF2類、漆町編年5群に相当する。

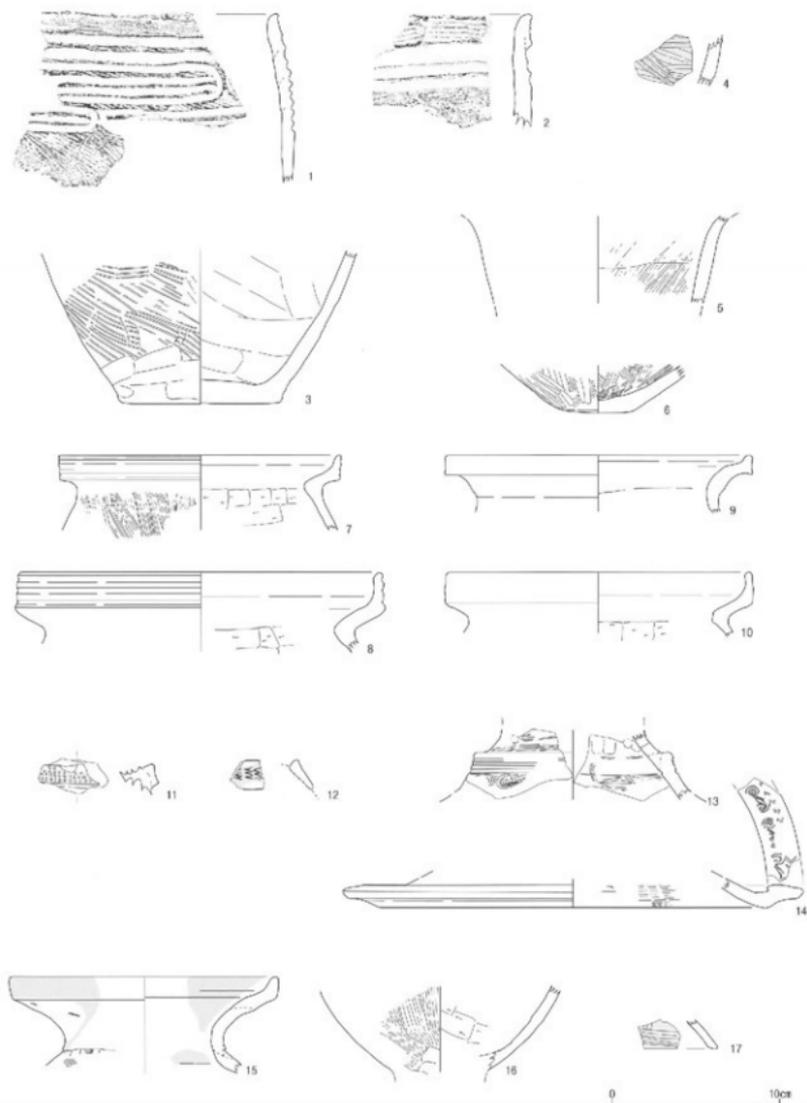
(3) 古墳時代

SZ01・SZ02・SX02出土品がある。

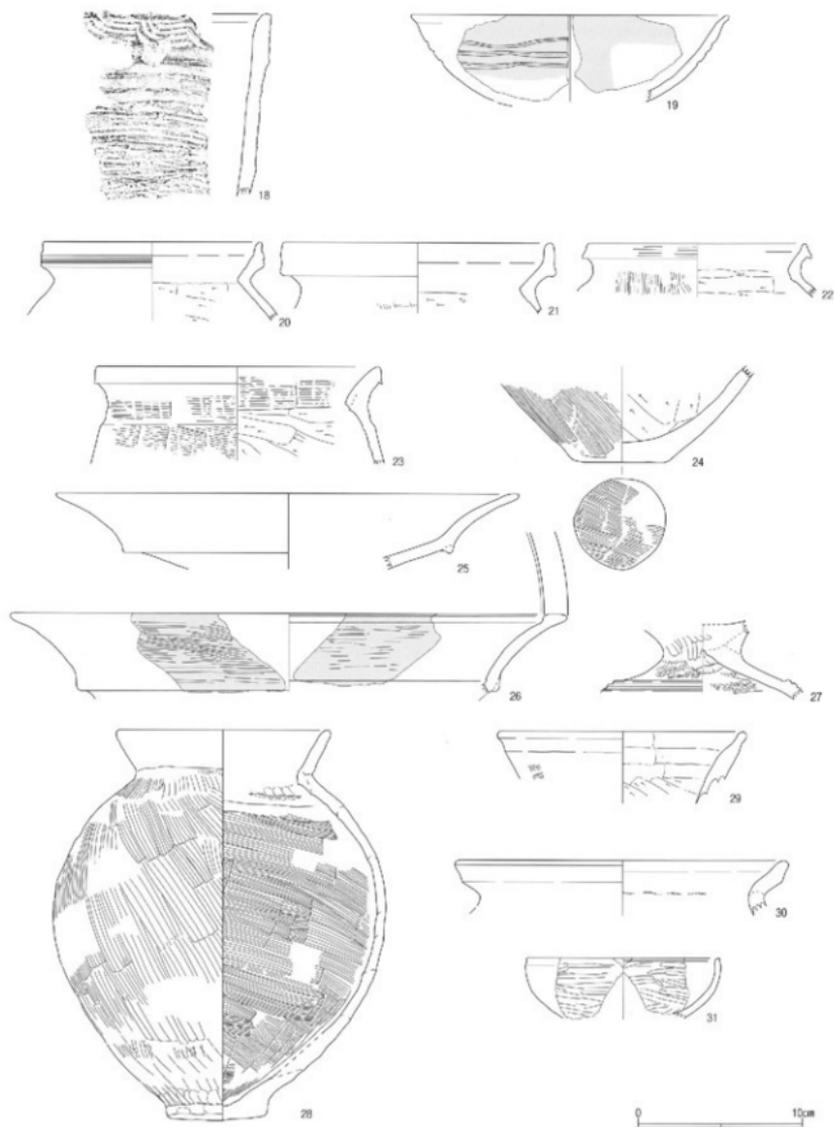
SZ01 遺構に伴うと考えられるもので、図化することができたのは3点である(第26図15～17)。15は壺で、口縁部の約半分が遺存している。短く直立する有段口縁をもち、胴部はハケ調整で、内外面ともに赤色塗彩が施される。16は甕の底部破片と考えられる。器形や調整の特徴から、東海系のS字状口縁台付甕と推定される。17は小型器台の脚部破片で、外面はミガキ調整で赤色塗彩が施される。いずれも破片資料であり、全形をうかがえるものはない。

15は唯一、口縁部形状を知ることができるが、他例との比較が難しい資料である。ここでは、S字状口縁台付甕の存在と合わせ、外面の加飾要素が失われているものの、口縁部の形態的特徴から、東海系土器の影響下にあるものと考えておく。古府クルビ式期の範疇と捉えておきたい。

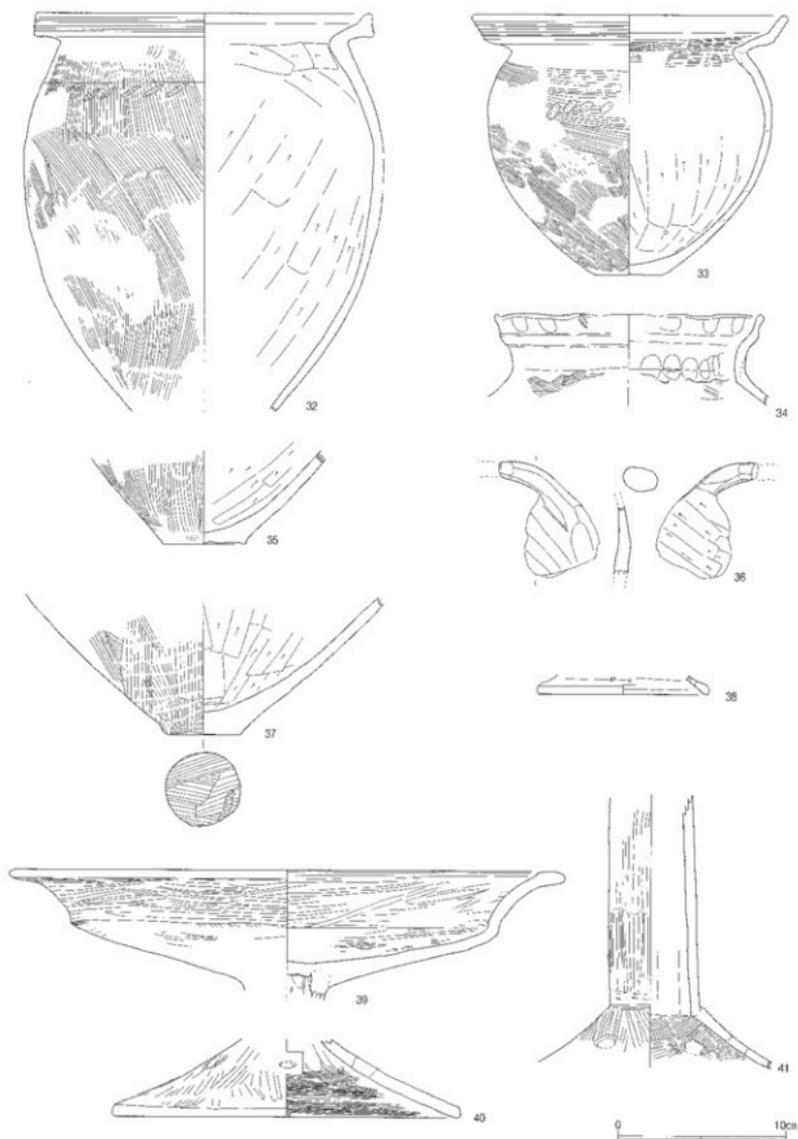
SZ02 遺構に伴うと考えられるものは4点である(第27図28～31)。28は単口縁の壺で、胴部中位に最大径をもつ卵形の胴部をもち、短く立ち上がる口縁部を特徴とする。内外面ともハケ調整である。29も28同様、単口縁の壺の可能性が大きい。28は酷似例が乏しく、比較検討は難しい。形態が比較的近



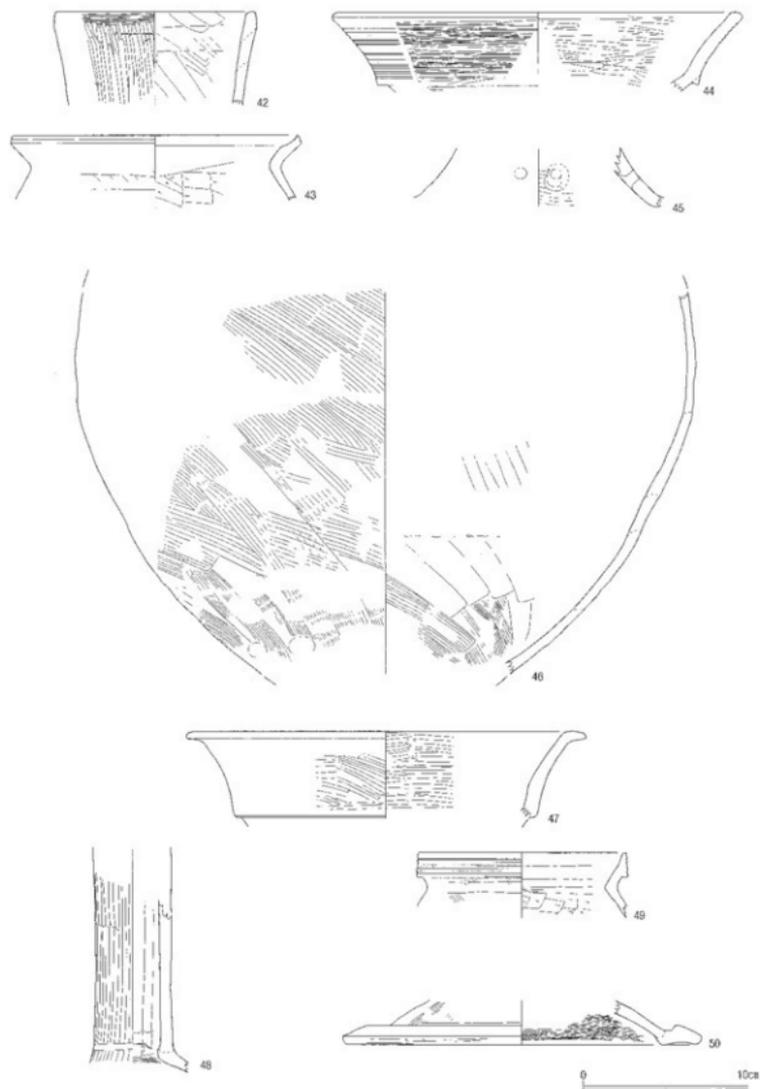
第26図 出土遺物実測図(1) (1~17: SZ01)



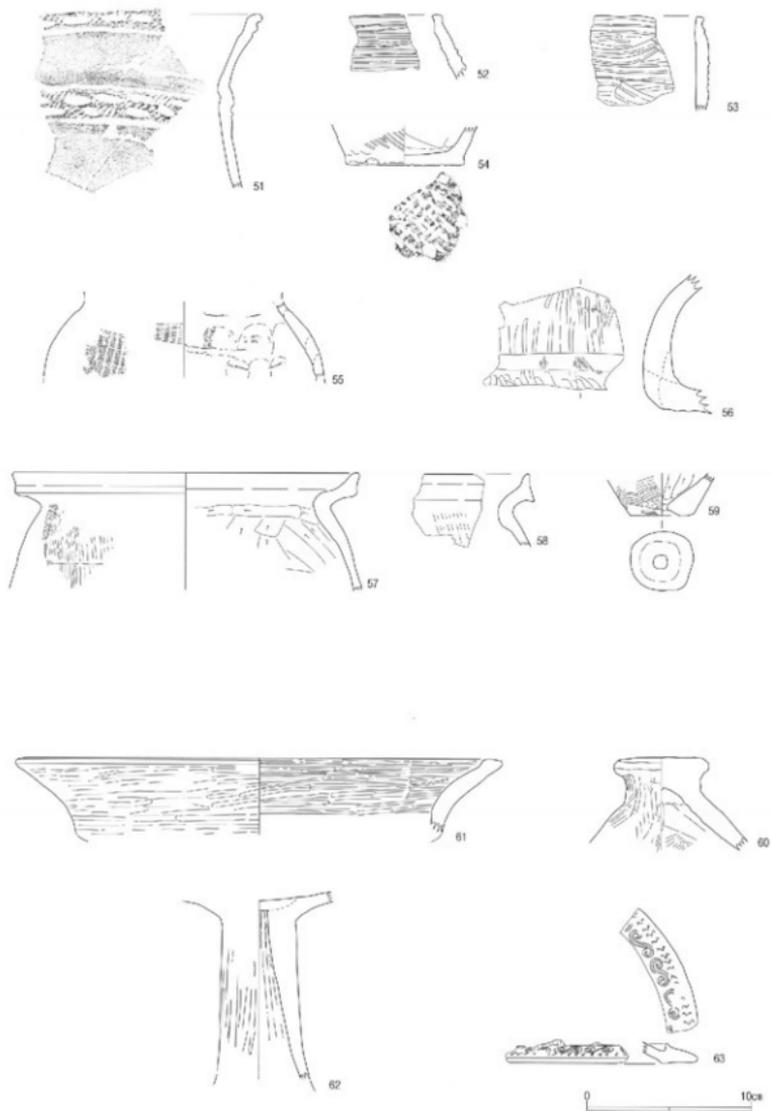
第27図 出土遺物実測図(2) (18~31 : SZ02)



第28図 出土遺物実測図(3) (32~41: SI01)



第29図 出土遺物実測図(4) (42~44 : SE01、45 : SX01、46・47 : SX02、48 : SD03、49・50 : SD79)



第30図 出土遺物実測図⑤遺構外（遺物包含層・表土・攪乱）

第5表 遺物観察表(1)

番号	器種	大きさ ()内は単位	色 調	焼成・胎土	器形・成形・文様・調整の特徴	備 考
1	鉢		外面 藍 (7.5YR6/6) 内面 にぶい黄緑 (10YR7/4)	焼成 普通 胎土 砂较多い	やや内側する口縁部をもつ。外面斜位の赤帯、口唇部は緑色の赤帯。指節による染みの沈着で口縁に緑色の沈着を施す。内面ナシ。	焼成土器、残存、口縁部一部
2	深鉢		灰白 (10YR8/2)	焼成 普通 胎土 砂较多い	ほぼ垂直な口縁部をもつ。1唇部は赤帯部に影する。外面口唇部赤帯部、赤帯ナシ、口唇部直下に指節による43本の染みを施す。内面無文ナシ。	焼成土器、残存、口縁部一部
3	深鉢	高さ (9.5cm)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	焼成 普通 胎土 砂较多い	やや内側傾きに立ち上がる。外面斜位赤帯、赤帯部斜位ナシ、内面斜位ナシ、底面ナシ。	焼成土器、残存、底面1/4、外面赤帯部
4	鉢		赤彩 赤帯 (2.5YR4/6) 藍帯 にぶい黄緑 (10YR7/3)	焼成 良好 胎土 砂较多い	外側斜位ナシ、横紋2条以上、斜位3条の沈着を施す。外面赤帯部影。	焼成土器、残存、赤帯の一部
5	鉢		焼成 良好 胎土 砂较多い	焼成 良好 胎土 砂较多い	Aの赤帯部も残存する。腹縁により調整不明であるが、外面ナシ、内面斜位ハケ後施す。	残存、底面1/6
6	浅 鉢	口径 4.7cm	外面 にぶい黄緑 (10YR7/4) 内面 灰青帯 (10YR4/2)	焼成 普通 胎土 砂较多い	やや内側傾きに立ち上がる。外面斜位ハケのちナシ、内面斜位ナシ。底面ナシ。	残存、底面
7	浅 鉢	口径 (16.8cm)	洗青帯 (10YR8/3) 灰白 (10YR8/2)	焼成 やや不真 胎土 砂较多い	やや外反する1唇部をもつ。3条の斜位赤文が施す。外面洗青ハケナシ。内面内側ナシ。	残存、口縁部1/4
8	浅 鉢	口径 (21.5cm)	洗青帯 (10YR8/4)	焼成 普通 胎土 砂较多い	やや内側する口縁部をもつ。3条の斜位赤文が施す。外面洗青ナシ、内面内側ナシ。口縁部3コナナシ。	残存、口縁部1/4
9	浅 鉢	口径 (18.0cm)	外面 にぶい黄緑 (10YR6/3) 内面 にぶい黄緑 (10YR7/4)	焼成 良好 胎土 砂较多い	つまみ出し状に突出する口唇部をもつ。外側赤文ナシ。内面洗青ナシ。	残存、口縁部1/6
10	浅 鉢	口径 (18.1cm)	にぶい黄 (7.5Y7/4)	焼成 良好 胎土 砂较多い	内側する1唇部をもつ。外側はナシ。内面斜位ナシ。口縁部3コナナシ。	残存、口縁部1/8
11	壺		赤彩 赤帯 (2.5YR4/6) 藍帯 洗青帯 (10YR8/3)	焼成 普通 胎土 砂较多い	外反1コナナシ。突帯部内側4回の連続刻痕。内面ナシ。外面赤色染影。	残存、突帯部の一部 口唇部影
12	壺		赤彩 赤帯 (2.5YR4/6) 藍帯 洗青帯 (10YR8/4)	焼成 普通 胎土 砂较多い	突帯部より見出し状の突帯部。外反1コナナシ。突帯部凸部斜位の連続刻痕ナシ。外面赤色染影。	残存、突帯部の一部 口唇部影
13	石舟		洗青帯 (10YR8/3)	焼成 普通 胎土 砂较多い	有段部をもつ。脚部にむき出し状に外反する。外面横位ミガキで、有段部は3条の縦位赤文が施す。その下位にはS字状スグツ文が施文される。脚部には小丸が施される。内面斜位ハケのちナシ。	残存、1/4
14	高 杯		洗青帯 (7.5YR8/4)	焼成 普通 胎土 砂多、緻密	底面より内側傾きに立ち上がる。外面斜位ナシ。突帯部内側4回S字状スグツ文および連続赤文文。内面横位赤文ハケ。	残存、突帯部1/8
15	浅 鉢	口径 (16.0cm)	洗青帯 (10YR8/4)	焼成 普通 胎土 砂较多い	やや外反傾きに立ち上がる。口唇部つまみ出し状に立ち上がる。外面斜位ハケのち3コナナシ内面ナシ。口縁部内外面赤色染影。	残存、口縁部1/4 赤文
16	白付 壺		外面 にぶい黄緑 (10YR7/2) 内面 藍 (5Y2/1)	焼成 普通 胎土 砂较多い	縦く内側傾きに立ち上がる。外面斜位ナシ。内面斜位ナシ。	残存、1/8 S字状口唇部付 胎土分析：黄4系 赤1部
17	石舟		赤彩 明赤帯 (2.5YR5/8) 藍帯 にぶい黄緑 (10YR7/4)	焼成 良好 胎土 砂多、緻密	やや内側傾きに立ち上がる。外面斜位ナシ。内面ナシ。外反赤色染影。	残存、脚部1/8 以下
18	深鉢		外面 洗青帯 (10YR8/6) 内面 灰白 (10YR8/1)	焼成 普通 胎土 砂较多い	やや外反する1唇部をもつ。外面横位の赤帯、1唇部は縦位の赤帯。口唇部直下に斜位による4条の沈着を施す。内面ナシ。	焼成土器、残存、口唇部一部
19	鉢	口径 (8.9cm)	赤彩 輝赤帯 (2.5R3/6) 藍帯 にぶい黄緑 (10YR7/3)	焼成 普通 胎土 砂较多い	内側する唇部をもつ。口唇部影が外反する。内外面ともナシ。外面外側は赤帯赤文と思われる沈着が施文される。内外面とも赤色染影。	焼成土器、残存、口縁部1/8
20	浅 鉢	口径 (13.0cm)	灰青帯 (2.5YR6/2)	普通 胎土 砂较多い	内側する有段口縁部、3条の縦位赤文が施す。外面ナシ、内面ナシ。1唇部内外面ナシ。	残存、1唇部1/4
21	浅 鉢	口径 (13.1cm)	焼成 普通 胎土 砂较多い	焼成 普通 胎土 砂较多い	内側するつまみ出し状の口縁部をもつ。外面斜位ハケ。内面横位ナシ。口縁部内外面ナシ。	残存、口縁部1/8
22	浅 鉢	口径 (16.0cm)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	焼成 普通 胎土 砂较多い	やや外反する口唇部をもつ。外面斜位ハケ。内面横位ナシ。口唇部内外両面ナシ。	残存、口縁部1/6
23	浅 鉢	口径 (16.8cm)	にぶい黄 (7.5Y7/4)	焼成 良好 胎土 砂较多い	窪く外反する口唇部をもつ。外面斜位ハケ。内面横位ナシ。1唇部内外両面斜位ハケ後施す。	残存、1唇部1/6
24	浅 鉢	高さ (5.5cm)	洗青帯 (10YR8/3) 灰白 (5Y3/4)	焼成 やや不真 胎土 砂较多い	Aの赤帯部に連続的に立ち上がる唇部をもつ。外面斜位ハケ。内面斜位ナシ。底面ナシ。	残存、底面
25	高 杯	口径 (27.7cm)	明赤帯 (2.5YR5/6)	焼成 普通 胎土 砂较多い	外反する1唇部をもつ。唇部影は赤帯部に見付する。内外面とも横位赤文しがいずれも外反したと思われ。	残存、口縁部1/6
26	高 杯	口径 (33.0cm)	赤彩 赤帯 (2.5R4/6) 藍帯 洗青帯 (10YR8/3)	焼成 普通 胎土 砂多、緻密	外反する口唇部をもつ。有段部は突帯部に影する。口唇部影はナシ。内外面とも横位ナシ。	残存、1唇部1/8
27	高 杯		にぶい黄 (7.5Y7/3)	焼成 良好 胎土 砂多、緻密	外面斜位に際し横帯をもつ。突帯部が施す3条の縦位赤文が施される。外面、横位ハケ後施すミガキ、底面内外面ミガキ、脚部内側斜位ハケ、又并部影が施す。	残存、脚部
28	壺	口径 12.6cm 胴高 24.0cm 底径 5.8cm	洗青帯 (10YR8/4)	焼成 普通 胎土 砂较多い	底面斜位に並ぶ凹む口唇部をもつ。外面斜位ナシのち斜位ハケ、肩斜位ナシ。内面斜位ハケ後施すエビナシ。1唇部内外両面ナシ。	残存、口縁部1/4
29	浅 鉢	口径 (14.5cm)	外面 藍 (7.5YR6/6) 内面 藍 (5Y3/6)	焼成 普通 胎土 砂较多い	Aの赤帯部に並ぶ凹む口唇部をもつ。1唇部は赤文をもつ。外面斜位ハケ後施すナシ。内面斜位ナシ。横位ナシ。内面に窪く赤色染影が施す。	残存、口縁部1/4
30	浅 鉢	口径 (19.5cm)	外面 にぶい黄 (7.5YR6/4) 内面 灰青 (2.5Y7/2)	焼成 普通 胎土 砂较多い	縦く外反する口唇部をもつ。内外面ともナシ。	残存、口縁部1/8
31	高 杯	口径 (11.4cm)	赤彩 (5YR4/8)	焼成 良好 胎土 砂较多い	内側する唇部に際し窪く凹む口唇部をもつ。1唇部をもつ。外側斜位ナシハケ後施すミガキ。内面横位ミガキ。	残存、1唇部1/8 突帯部影 胎土分析 (第4表第1部)

第6表 遺物観察表(2)

番号	器種	大きさ () 内は復元	色 調	焼成・胎土	器形・成形・文様・調整の特徴	備 考
32	茶	口徑 20.3cm	浅黄緑 (7.5YR8/6)	焼成 青濁 胎土 砂粒多い	内脣する1線部をもち、3本の縦凹線文がある。外面斜位のハケ。唇部にハケ工具による連続動刻。内面斜位のケズリ。	底部欠、残存、口縁部-体部1/4欠
33	茶	口徑 18.5cm 器高 16.0cm 底径 4.0cm	外面 浅黄緑 (10YR7/4) 内面 緑 (7.5YR7/6)	焼成 青濁 胎土 砂粒多い	やや外反する有段口縁をもち、4本の縦凹線文がある。外面斜位-横位のハケ。肩部にハケ工具による連続動刻。内面斜位のケズリ。口縁部-肩部にハケ調整を施す。	残存、1/2
34	茶	口徑 15.9cm	外面 灰色 (10YR5/2) 内面 土赤い黄緑 (10YR6/4)	焼成 青濁 胎土 砂粒多い	ゆるく外反する有段口縁をもつ。1線部は凹線による肩状が残り、口縁部は流成りをもち、内面斜位ハケ残存。	残存、口縁部1/6
35	茶	底径 5cm	外面 黄緑 (10YR3/1) 内面 土赤い黄緑 (10YR6/4)	焼成 青濁 胎土 砂粒多い	外面斜位ハケ。表面部に繋ぐ彫部をもつ。外面斜位ハケ。内面斜位ケズリ。	残存、底部のみ
36	茶		浅黄緑 7.5YR8/6	焼成 青濁 胎土 砂粒多い	唇部に把手部を彫付する。把手型ナデ。外面斜位ハケ。内面斜位ケズリ。	残存、把手部1/2
37	茶	底径 4.6cm	外面 土赤い黄緑 (10YR7/4) 内面 黄緑 (10YR8/6)	焼成 凡紅 胎土 砂粒多い	やや内湾部域に伸びる唇部をもち、外面斜位ハケのちナデ。内面斜位ケズリ。底面ハケ。	残存、底部体部下手3/4
38	蓋	1径 10.2cm	土赤い黄緑 (10YR7/3)	焼成 青濁 胎土 細砂含む	2孔穿孔が認められる。内外面ともココナデ。	残存、1/5 無蓋面欠
39	高坏	口徑 33.4cm	浅黄緑 (10YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	坏部はゆるやかに内湾し、大きく外反する口縁部をもつ。内外面とも横位のハケを一枚残す。	残存、坏部はほぼ完整
40	高坏	総径 20.5cm	外面 緑 (7.5YR7/6) 内面 土赤い黄緑 (10YR7/4)	焼成 青濁 胎土 砂粒多い	八の字状に開く唇部をもち、寛定孔の円孔を穿孔する。外面斜位のミガキ。内面斜位-斜位のハケ。無蓋部欠。	残存、取組1/2 小型無蓋部
41	高坏	総径 5.6cm 径 7.5YR6/6		焼成 良好 胎土 細砂含む 閉密	ほぼ直線的にのびる唇部。やや外反気味に八の字状に広がる唇部をもつ。寛定孔の円孔を穿孔する。外面、縦位のハケ。唇部と壺部の境は流成りに強いミガキが認められる。内面斜位横位のケズリ。無蓋部欠。	残存、胴部2/3
42	壺	口徑 11.8cm		焼成 良好 胎土 細砂含む	八の字形に開き、1唇部は内側に垂着する。外面縦位のミガキ。内面斜位のケズリ。	残存、口縁部1/7 小型無蓋部
43	茶	口徑 17.0cm	外面 土赤い黄緑 (10YR7/4) 内面 浅黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 青濁 胎土 砂粒含む	口縁部はつつまじり状。外面ハケ残存。内面斜位ケズリ。口縁部内外重ミコナデ。	残存、口縁部1/2
44	鉢台	1径 23.9cm	土赤い黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 青濁 胎土 砂粒多い	緩やかに外反する有段口縁。12本の凹線が通る。内外面とも横位のミガキ。	残存、1線部1/8
45	高坏	外面 黄緑 (10YR8/3) 内面 緑 (10YR7/6)	浅黄緑 (10YR8/3) 内面 緑 (10YR7/6)	焼成 凡紅 胎土 砂粒含む	寛定孔の円孔を穿孔する。外面ミガキ。内面横位のハケ。	残存、1/8
46	壺		浅黄緑 (10YR8/3)	焼成 凡紅 胎土 砂粒含む	外面斜位ハケ (胴部下手と上でハケ変形異なる)。内面斜位ハケ。斜位ナデ。	残存、1/6
47	高不	口徑 23.9cm	外面 凡紅 (10YR8/2) 内面 浅黄緑 (7.5YR8/2)	焼成 良好 胎土 細砂含む	外反気味に立ち上がる口縁部をもち、口縁部閉曲する。内外面とも斜位のミガキ。	残存、1/8
48	高坏	総径 4.8cm	浅黄緑 (10YR8/3)	焼成 良好 胎土 細砂含む	ほぼ直線的に立ち上がる唇部をもつ。外面縦位のミガキ。肩部との境は流成りに強いミガキ。内面斜位横位のケズリ。無蓋部欠。	残存、胴部
49	茶	口徑 12.4cm	浅黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 青濁 胎土 砂粒多い	やや内湾気味に立ち上がる有段口縁。1本の縦凹線文がある。外面斜位ハケのちナデ。内面斜位ケズリ。口縁部閉曲。	残存、口縁部1/8
50	高坏	底径 16.8cm	浅黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 凡紅 胎土 砂粒多い	緩やかに内湾気味に立ち上がる唇部をもつ。1唇部は突出部状に垂着する。外面縦位のミガキ。内面横位のハケ。	残存、底部1/6

似するものとして、富山県射水市(旧小杉町)HS04遺跡SD151出土例(小杉町教育委員会1999)のほか、やや地域が離れたものの、新潟県新潟市(旧巻町)山谷古墳出土例(新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室1993)を挙げられる。いずれも単口縁で、卵形の胴部に内外面ともハケ調整を施す点で類似する。

ただし、これらは口縁部が外反気味に反る点で、28とはやや異なる。これらは共伴資料などから漆町編年の7~8群期に比定されており、28は少なくともこれらを下ることはないと考えられる。30は壺の口縁部破片で、内外面ともナデ調整を施す。

31は高坏の坏部破片で、未接合だが同一個体ないしは同種破片が他に3点存在する。内外面ともミガキ調整を施しているが、外面はミガキの下にケズリが認められる。この高坏は東海地域の塊形低脚高坏に類例を求めることができ、口唇部に弱い稜線が認められるタイプは愛知県清須市廻間遺跡S207例(「愛知県埋蔵文化財センター1990」)などに類例が求められ、廻間編年のⅡ式の範疇に収まると思われる。

SX02 図化する事ができたのは壺・器台の2点である(第29図46・47)。46は大型の壺の体部で1/6程が復元している。外面はハケ調整、内面はハケ調整後ナデ調整である。胴部中位に最大径をもち、球形胴を早する。口縁部は二重口縁と想定されるものの、肩部から上を欠失しており、詳細は不詳である。47は外反気味に立ち上がる口縁部をもち、口唇部が外方に大きく屈曲する器形をとる。

第7表 遺物観察表(3)

番号	器種	大きさ ()内は深さ	色 調	焼成・胎土	器形・成形・文様・調整の特徴	備 考
51	深鉢		外面 灰白 (10YR8/2) 内面 浅黄緑 (10YR8/3)	焼成 普通 胎土 砂粒	外反する口縁をもつ。口部縁部に縦帯状に取付。外面に1線部および隆帯上縁に白点文、口部取付および隆帯端部に点線を施す。焼文は焼文。	焼文土器、焼付、口縁部一部 欠け
52	壺?		外面 赤 (10R4/6) 内面 赤 (10YR2/4)	焼成 普通 胎土 砂粒	控回する口縁をもつ。外面に3線の虎線を施し、ミガキ。内面横位の強いナデ。外面直削。	焼文土器、焼付、口縁部一部 表1
53	深鉢		外面 赤い黄緑 (10YR7/3) 内面 黄緑 (10YR5/1)	焼成 普通 胎土 砂粒多い	やや内湾する口縁部。外面に雲形上字文様の点線文を施す。横位ミガキ。内面ナデ。	焼文土器、焼付、口縁部一部 表1
54	深鉢 底径 (7.2cm)		赤い黄緑 (7.5YR7/1)	焼成 普通 胎土 砂粒	八の字形に開く唇部をもつ。外面斜位の表筋。内面ナデ。底面直削。	灰土土器、焼付、底筋1/4 表筋
55	壺		外面 赤い黄緑 (10YR7/4)、 内面 浅黄緑 (10YR8/3)	焼成 普通 胎土 砂粒多い	外面斜位ハケ後ナデ。内面直削直後後ナデ。	焼付、口部1/6 直削部直削
56	壺		外面 赤い黄緑 (10YR7/4) 内面 赤い黄緑 (10YR7/2)	焼成 普通 胎土 砂粒	外反する口縁をもつ。外面ハケ後縦位ミガキ。唇部縦位ミガキ。内面直削横位ミガキ。肩削ナデ。	焼付、唇部一部 直削
57	美	L径 (20.8cm)	赤い黄緑 (10YR7/4)	焼成 普通 胎土 砂粒多い	縦く外反するつまずき口縁の有後口縁。外面直削ハケ後ナデ。内面直削。縦位のミガキ。L径部内面直削ハケナデ。	焼付、口縁部1/4 内面直削
58	壺		赤い黄緑 (10YR7/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	内反する口縁部。外面斜位ハケ後ナデ。内面、横位ミガキ。口縁部内面直削ナデ。	焼付、口縁部一部 直削部直削
59	深 底径 (3.8cm) 孔径 (0.8cm)		浅黄 (2.5Y7/3)	焼成 普通 胎土 砂粒多い	八の字形に直線的に開く唇部をもつ。外面横位ハケ。内面縦位ナデ。底面直削直後ナデ。	焼付、口部 直削部直削
60	蓋 径径 5.8cm		赤い黄緑 (7.5Y7/4)	焼成 普通 胎土 砂粒多い	外面縦位ナデ、内面斜位ハケ後ナデ。	焼付、口部
61	高杯 1径 29.5cm		赤い黄緑 (10YR7/4)	焼成 良好 胎土 直削砂含む	外反する口縁部をもつ。口部口に突帯状に彫りつける。内外とも直削ミガキ。	焼付、口部は1/6に彫り直削部直削 直削
62	高杯 脚部径 5.1cm		浅黄 (10YR8/4)	焼成 不良 胎土 砂粒多い	縁やかに開く唇部をもつ。外面縦位ミガキ。内面横位ミガキ。脚部直削直後直削。	焼付、口部 直削部直削
63	高杯		赤い黄緑 (10YR7/2)	焼成 やや不良 胎土 細粒	外反する口縁部をもつ。外面ミガキ。S字状スタンプ文および点線文を施す。内面ナデ。	焼付、脚部一部 直削部直削

受部以下を欠失するが、器台と思われる。いずれも古府クルビ式期に比定される。

SZ01・SZ02・SX02の先後関係 SZ01・SZ02出土遺物は、同器種が認められないため直接的な対比が難しい。SZ02の壺(28)は東海系の影響下にあるものの、加飾性が一切認められないことから形骸化が進んでいると考えられ、SZ01の壺(15)も外面調整はハケ調整のみであり、ミガキ調整が施されていない点で、共に新しい要素と考えることができる。

SZ02から出土した東海系坑形低脚高杯(31)は、廻間Ⅱ式期の範疇で捉えることが可能であり、漆町6群期に比定される。SZ02の土器に若干の時間幅を認める可否かは議論を要するが、この高杯の存在をもってSZ02がSZ01より先行すると捉える。SX02の壺(46)は内面のハケ調整範囲の狭小化などから、SZ02出土の壺(28)より後出する可能性も考えられるが、体部資料なので、ここではその可能性を示唆するに留める。従って、出土遺物からはSZ02→SZ01・SX02の変遷をうかがえることになる。(佐藤好司)

第5項 小結

百塚住吉遺跡(A地区)では、主に弥生時代後期および古墳時代前期の遺構・遺物を確認した。

弥生時代 竪穴建物SI01(法仏式新段階)がある。SI01は、床面壁立により壁溝をめぐらせ、竪穴内におきもたない。主柱穴が存在しないため、竪穴の外側に欄干をもつことも想定したが、鳥跡(小溝群)やSZ01の周溝などの後世の土地利用に加えて、旧地表の削平等により、その痕跡は確認されなかった。竪穴が小規模であることから、壁立による上屋構造と復元できる。

竪穴内の遺構は、付属施設としての塹溝のほか、壁溝埋没後に造られ、高杯(坏部)が置かれた土坑(SI01-SK01)1基がある。坏部口径(約33cm)と土坑直径はほぼ等しい。坏部の下位で炭化材片(マツ属)を検出した。マツ属は、富山地域の弥生時代遺跡、打出遺跡(富山市教育委員会2006)の焼失住居(SI01)の上層建築材でも確認されており、当該期において比較的入手しやすい樹種とされる(バリノ・サーヴェイ株式会社2006)。

SI01-SK01出土炭化材片の上位には、高杯(坏部)が蓋をするように置かれていることから、炭化材片は混入ではなく、意図的に置かれたものと考えられる。防湿(腐)性といった炭の特性から、

SI01-SK01を貯蔵穴と想定する。ただし、炭化材の数量から防湿（腐）効果は長期にわたらなかつたと考えられる。以上は推測の域を脱し得ないが、SI01は壁立構造の施設としての期間を経て、壁溝埋没後に土坑を造って利用された仮小屋などを想定できるのではなからうか。

古墳時代 前方後方墳SZ02（推定全長（周溝を含む）約18.5m）は後方部周溝底面付近から出土した甕（第18図28）が漆町編年の7～8群期に位置づけられる。後方部周溝覆土中位から出土した東海系埴形低脚高坏（第18図31、廻間Ⅱ式期）は、東海に類例を求められる。これらの年代観から、本墳が遅くとも古墳時代前期前半には築かれていたと考えられる。

前方後円墳SZ01（推定全長約24m）は、覆土から散発的に弥生土器が出土した。後円部周溝から出土した甕（第15図15）やS字状口縁台付甕（16）など東海系土器の特色をあわせもつ土器は、古府クルビ式期の範疇で捉えられる。胎土分析によると、台付甕は胎土中に含まれる岩石片組成から、本遺跡が立地する段丘周辺の粘土が使用されている可能性があり、SZ02出土東海系埴形低脚高坏（第27図31）の胎土は庄川下流域の堆積物が由来とされ、いずれも富山平野で製作された可能性が高い（第4章第1節）。

土器の型式学的様相からは、SZ02の東海系埴形低脚高坏（第27図31）がSZ01で基準資料とする土器群よりもやや古相を示すと考える。また、SZ01の墳丘形態の類例を富山県小矢部市谷内16号墳（小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団1988）に求めると、SZ02がSZ01に先行する可能性が高いことになり、土器の年代観と合致する。

SZ01とSZ02の主軸方位の方向に注目すると、SZ02が略東西であるのに対し、SZ01は略南北である。SZ01の前方部は南にあり、この前面に立ち、西に目を転じるとその先にSZ02の前方部を臨むこととなる。このような2基の配置は、築造時にある程度の時間差があったとしても、比較的強い意識のもとで造営された結果と考えられる。

平安時代 調査区北部から中央部にかけて畠が広がっていた（小溝群）。SI01・SZ01・SZ02・SX02の埋没後に耕作されており、墳丘部分には認められない。畠間の小溝（SD55）から須恵器（9世紀頃）の破片が出土しており、畠として利用されていた段階で紛れ込んだものと判断される。Ⅱ層（遺物包含層）にもわずかではあるが、当該期の須恵器が含まれており、Ⅱ層形成の上限の日安は9世紀頃と推定できる。

SZ01・SZ02・SX02の周溝覆土上部はⅡ層由来であり、周溝は9世紀頃におおむね埋没したことになる。小溝群の平面分布からは、残存する墳丘を避けるように軌立してたと考えられる。墓地として利用された当地が、畑地として利用される契機になったのは、SZ01・02の周溝が埋没して平坦地形が生じたことであり、耕作時期は平安時代（9世紀以降）と推定できる。

同様に、重複関係からSZ02より新しいことが明らかなSX02も、平安時代のもものと推定できる。SX02は、SD61との重複関係から畠跡（第Ⅰ群）に先行するので、SZ02の周溝埋没後、第Ⅰ群の耕作が行われるまでの間に利用・埋没した遺構と考えられる。従って、SX02出土土器は混入品ということになる。（小柳リラコ）

第4節 平成18年度調査の成果（百塚住吉遺跡B・C地区、百塚住吉B遺跡）

第1項 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

平成18年度は百塚住吉遺跡と百塚住吉B遺跡の発掘調査を行った。百塚住吉遺跡は2地区に分かれるので、便宜的にB地区・C地区と仮称した。本報告でもそのように呼称する（第31図）。調査区は南から百塚住吉遺跡B地区、百塚住吉遺跡C地区、百塚住吉B遺跡と南北に展開する。現況（地表面）は、百塚住吉遺跡B地区の北端が標高約10.5m、南端が標高10.5m、百塚住吉遺跡C地区は北端が用水に向かって落ち込むものの、落ち込み前は標高9.7m、南端が標高9.7mである。百塚住吉B遺跡の標高は北端で9.6m、南端で9.7mである。3地区ともほぼ平坦で、百塚住吉遺跡B地区は他に比べて70～80cm程高い位置にある。

調査は、百塚住吉遺跡A地区の調査成果を参考にして、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理担当者（以下、監督員と略す）の立会いのもと、基本層序（遺物包含層・遺構検出面）の確認を行うことから始めた。調査・記録等一連の作業は百塚住吉遺跡B地区→百塚住吉B遺跡→百塚住吉遺跡C地区の順で、北側から南側に向けて進めることとした。定期的な報告に加え、重要と思われる遺構・遺物の検出時は、監督員と逐次連絡を取りながら調査を行った。

包含層出土遺物は原則として全点トータルステーションによる三次元計測を行うこととした。また、便宜的に座標基準線に基づいて各調査区内を10m×10mに区割りし、南から北に向けて1・2・3…、西から東へ向けてA・B・C…としてグリッドを設定した。各調査区では、包含層出土遺物の記録・取り上げの後、検出遺構の概略図作成と写真撮影を行った。ピットや土坑は半截、古墳の周溝や溝、堅穴建物は土層観察用バルトを残して掘り下げ、断面観察・写真撮影・測量を行い、必要に応じて遺物出土状態を示す図面を作成した。特に古墳の周溝や堅穴建物は微細遺物に留意して調査を進めることとした。古墳の墳丘が削平されていることから、表土・耕作土・攪乱から出土する遺物についても接合関係を追究することとした。

(2) 調査の経過

遺跡の調査は、平成18年9月28・29日に基準点・水準点測量と調査区の設定を行うことから開始した。百塚住吉遺跡B地区の表土機械掘削は10月5日から開始し、同時に調査員が除去後の清掃を並行して行い、7日に終了した。人力による遺物包含層掘削・遺構検出は10日から開始した。遺物包含層掘削と遺構検出作業を並行して行い17日には高所作業車を用いて遺構検出状態の写真撮影を行った。遺構発掘は18日から開始し、写真撮影や断面図作成等を並行して行い、11月14日に終了した。

百塚住吉遺跡C地区の表土機械掘削は10月12日から開始し、同時に作業員が除去後の清掃を並行して行い、19日に終了した。人力による遺物包含層掘削・遺構検出は20日から開始した。遺物包含層掘削と遺構検出作業を並行して行い、27日には高所作業車を用いて遺構検出状態の写真撮影を行った。遺構発掘は27日から開始し、写真撮影や断面図作成等を並行して行い、11月17日に終了した。

百塚住吉B遺跡の表土機械掘削は10月11日に開始し、同日に終了した。同時に作業員が除去後の清掃を並行して行った。人力による遺物包含層掘削・遺構検出は12日から開始した。遺物包含層がほとんどなく、遺構検出が16日に終了し、17日には高所作業車を用いて遺構検出状態の写真撮影を行った。遺構発掘は18日から開始し、写真撮影や断面図作成等を並行して行い、10月26日に終了した。

11月18日に、ラジコンヘリコプターを使用して各調査区の完掘写真を撮影した。同時に、全景写真や図化写真撮影も行い、空中写真測量により遺構平面図を作成した。18日以降、補足測量を行い、12月5日に主体部が遺存しているかどうかを確認するため、古墳の断ち割り調査と写真撮影を行った。包含層・遺構出土遺物はトータルステーションによる三次元計測の後、番号を付して取り上げた。各調査区の境界測量は遺構検出写真撮影後、随時行った。

終了確認検査を経て、現地調査を終了した。

(3)整理等作業の経過

現地調査と並行して遺物洗浄を行い、効率的な作業の実施に努めた。遺物台帳・遺構台帳の作成、フィルム・デジタル写真の整理は平成18年12月25日に終了した。平成19年1月10日からジェットマーカーによる注記作業を行い、2月末日に終了した。遺物の接合作業は主だったものについて行った。測量用写真から断面図・平面図を作成すると共に、出土遺物の観測データから遺物の分布図を作成した。図面の校正は平成19年1月半ばから2月にかけて数次行い、マット加工フィルム等に出力した。

百塚住吉遺跡B地区で検出した前方後円墳(SZ04)と百塚住吉遺跡C地区で検出した竪穴建物(SI01)から出土した土器に付着していた炭化物を対象として、放射性炭素年代測定(AMS法)および各古墳周溝覆土の土壌分析、土器胎土分析を実施した(第4章第2・3節)。

終了確認検査を経て、以上の基礎整理を平成19年3月9日に終了した。

百塚住吉遺跡の本格整理(遺物実測・トレース・写真撮影)を3月に実施した。百塚住吉遺跡B・C地区の本格整理(接合・復元・実測)は平成19年9月から開始した。百塚住吉遺跡の報告書原稿(本文・図版)作成に加え、12月からトレース、報告書原稿(本文・図版)作成、遺物写真撮影を行った。数次の校正を行った後、終了確認検査を経て平成20年3月21日に終了した。

第2項 基本層序(第33・75図)

土層観察は各調査区で最も遺存状態が良好な部分で実施した。百塚住吉遺跡B地区では百塚住吉遺跡A地区の続き部分の西壁北側と東壁、百塚住吉遺跡C地区では西壁で行った(第33図)。百塚住吉遺跡は西壁(第75図)で行った。基本層序は各調査区により異なる。

百塚住吉遺跡B地区では、上位からⅠ層：耕作土及び表土 Ⅱ層：遺物包含層Ⅰ Ⅲ層：遺物包含層Ⅱ Ⅳ層：漸移層 Ⅴ層：地山となる。Ⅱ層・Ⅲ層は若干の色調の違いがあるものの、遺物包含層である。両層とも、弥生時代後期～古墳時代初期の遺物を主体としつつも、平安時代の須恵器が少量出土したため、土層による時代区分はできない。遺物包含層は、最も堆積の厚かった南西側で15cm程度遺存していた。粘土質シルトで黒褐色を呈し、他調査区の遺物包含層と比較してやや水分を含む。なお、隣接する百塚住吉遺跡A地区も同様に上位から耕作土(Ⅰ層)、遺物包含層(ⅡA層・ⅡB層)、漸移層(Ⅲ層)、地山(Ⅳ層)となっている(第8表)。

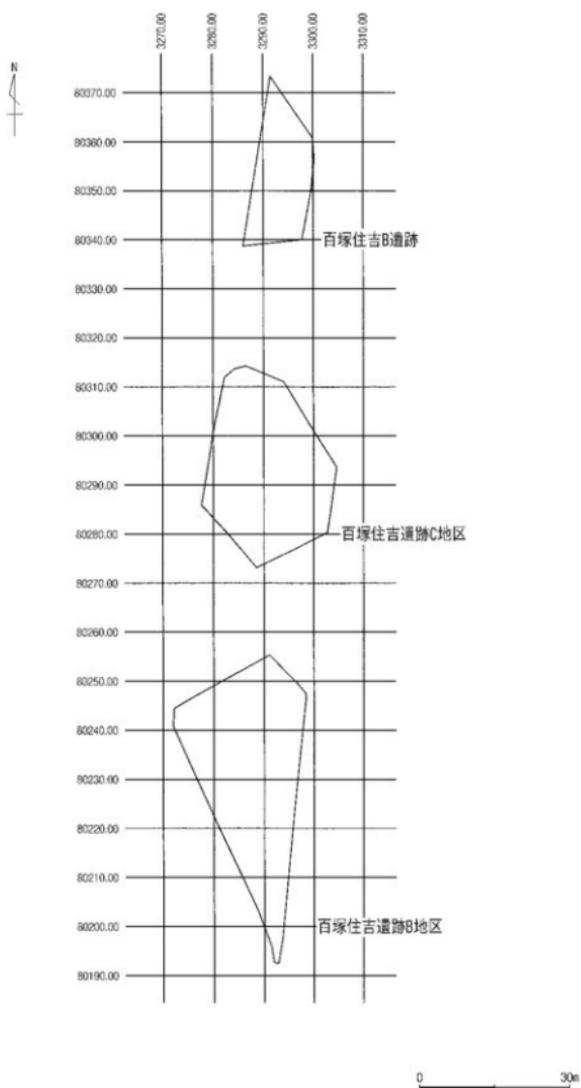
百塚住吉遺跡C地区では、上位からⅠ層：耕作土及び表土 Ⅱ層：遺物包含層 Ⅲ層：漸移層 Ⅳ層：地山となる。百塚住吉遺跡B地区と異なり、遺物包含層は単層である。百塚住吉遺跡B地区のⅢ層と対応し、最も深かった西側部分で15cm程度遺存していた。東側に向かって大きく落ち込む地形だが、当該部では10cm弱の堆積が認められた。

百塚住吉遺跡では、上位からⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層：耕作土及び表土 Ⅳ層：漸移層もしくは乱乱Ⅴ層：地山となる。Ⅳ層は漸移層なのか乱乱なのか確定させることができなかった。後世の削平によって、表土直下で地山向が検出された部分が多く、表上もわずかに10cm程度の厚さしかなかった。

地山は、百塚住吉遺跡B地区南側では砂粒の細かいシルト状の上だったが、百塚住吉B遺跡北側に向かうにつれて砂粒の粗い砂質土に変化していた。

第8表 百塚住吉遺跡A地区・B地区の基本層序対照表

百塚住吉遺跡B地区	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層
	耕作土及び表土	遺物包含層Ⅰ	遺物包含層Ⅱ	漸移層	地山
百塚住吉遺跡A地区	Ⅰ層	ⅡA層・ⅡB層	Ⅲ層	Ⅳ層	
	耕作土	遺物包含層	漸移層	地山	



第31図 調査区配置図



第32図 百塚住吉遺跡B地区遺構全体図

第3項 百塚住吉遺跡B地区の調査成果

(1) 検出遺構の概要

検出した遺構は、前方後円墳2基（SZ01・SZ04）、前方後方墳1基（SZ03）、溝50条（SD01～50）、土坑1基（SK01）、柱穴96基（P01～104）である（第32図）。ここでは主要遺構について評述する。

①古墳

前方後円墳 SZ01（第34～37図） 調査区南西部で南東部分の周溝を検出した。百塚住吉遺跡A地区（以下、A地区とする）で検出された続きの部分である。IV層除去後、地山面で黒褐色の周溝プランを検出した。墳丘盛土及び主体部は後世の削平を受け、遺存しない。古墳時代の旧表土についても、調査区壁面でも確認できない。すでに削平されたと考えられる。周溝は後円部が大きく深い。上面の最大幅が約2.5m、下面の最大幅は約30cmである。後円部周溝の最大深は約1.5mだが、前方部の周溝は深さ約20cmで、くびれ部を境に急激に浅くなる。周溝の形状は、A地区のSZ01と類似している。周溝の墳丘外方壁面にはやや傾斜の緩い肩がある（第35図A-A'ライン）。後円部の周溝は、その断面形状から、一度浅く掘った溝をさらに深く掘り下げるという二段掘りの工程を経たと考えられる。墳端（周溝内の墳丘側傾斜変換線（下端線））付近の斜面は概して緩やかである。

周溝覆土は墳丘外斜面の傾斜変換線付近を境に堆積時期の異なる2層に大別でき、上位は遺物包含層（Ⅱ・Ⅲ層）起源の堆積である（第35・37図）。下位には地山（周溝壁面）起源の崩落土を含む堆積が両脇にみられる。盛土起源と考えられる崩落土は確認できなかった。下位はやや水分を含む層が主体をなす。

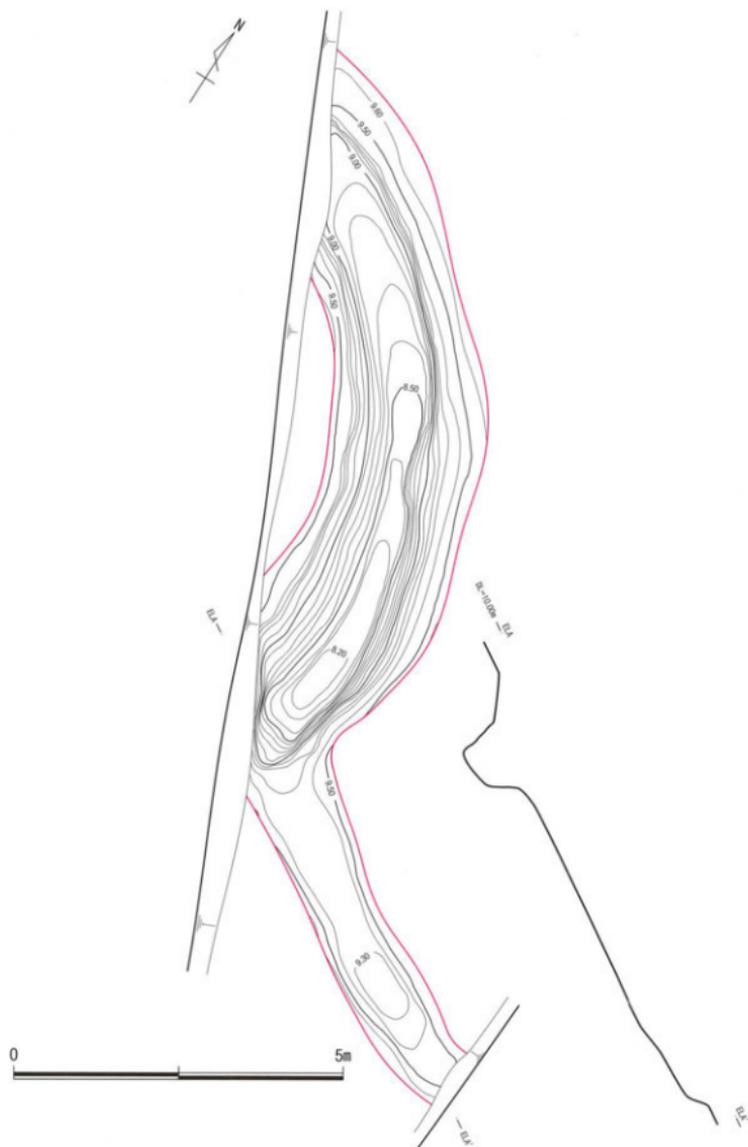
周溝内の遺物は平面的には満遍なく出土している（第36図）が、垂直分布をみるとⅡ・Ⅲ層起源と考えられる上位層に土器片が集中していることがわかる（第37図）。従って、SZ01出土遺物の多くは墳丘削平後、遺物包含層が堆積する過程での混入品と考えられる。B地区では小破片を含め多量の土器片が出土したが、A地区では出土遺物が3点と少なく、遺物が東側に偏って出土していることがわかる。

SZ04（第38～43図） 調査区北部で検出した。地山面で黒褐色の周溝プランを検出した。前方部南側周溝は調査対象地外に伸びる。なお、攪乱により地山面が調査区北東部に向かって緩やかに落ち込んでいるため、前方部北側周溝先端の様相は不明だが、ほぼ全体を把握できる。周溝の調査終了後、主軸方向にトレンチを設定し、断ち割り調査を実施した結果、旧表土や墳丘盛土及び主体部は後世の削平を受けて遺存しないことを確認した。

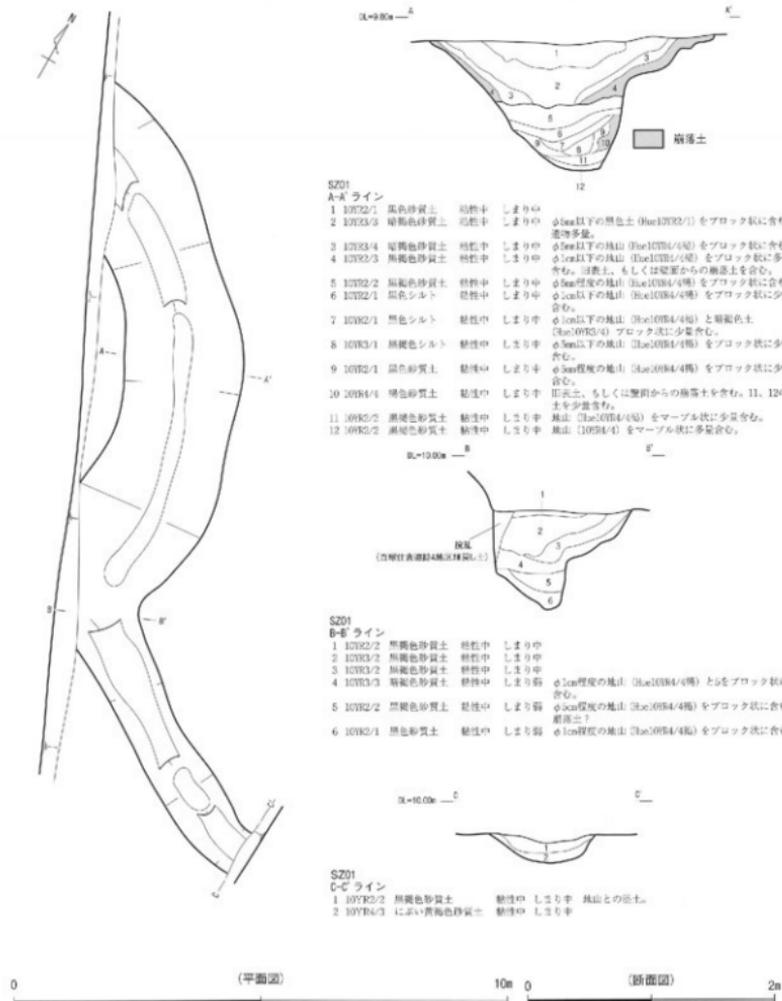
墳丘主軸長（墳端は周溝内の墳丘側傾斜変換線（下端線））は検出部分で21.2mである。主軸方位はS-20°-Wである。周溝の幅にはばらつきがあり、後円部の内隅はSZ01と同様の二段掘りを呈し、やや広めに掘られている。周溝北側が円形なのに対して、南側の墳丘側は円形だが外方は直線状となり、南北で大きく異なる。後円部の周溝最大幅約4m、平均幅は約3m、最大深は約70cmである。前方部の周溝は幅約1m、最大深は約40cmで、後円部側から緩やかに浅くなり、前端の周溝は確認できなかった。本来的に存在しないのか、調査区外に存在するののかについては、本調査では確認できなかった。前方部の前端が攪乱に切られているため、長さは不明である。北側のくびれ部は広く掘られており、広場状を呈する。

遺物包含層起源の覆土がレンズ状に堆積し、その下位には地山（周溝壁面）の崩落土と考えられる堆積層が周溝の両壁面に沿って存在する。墳丘盛土由来の堆積層は観察できなかった。遺物は多数出土しており、大部分は周溝埋没時に混入したと考えられる。南北のくびれ部と後円部後端にややまとまって上下の差がなく出土した（第41・42図）。

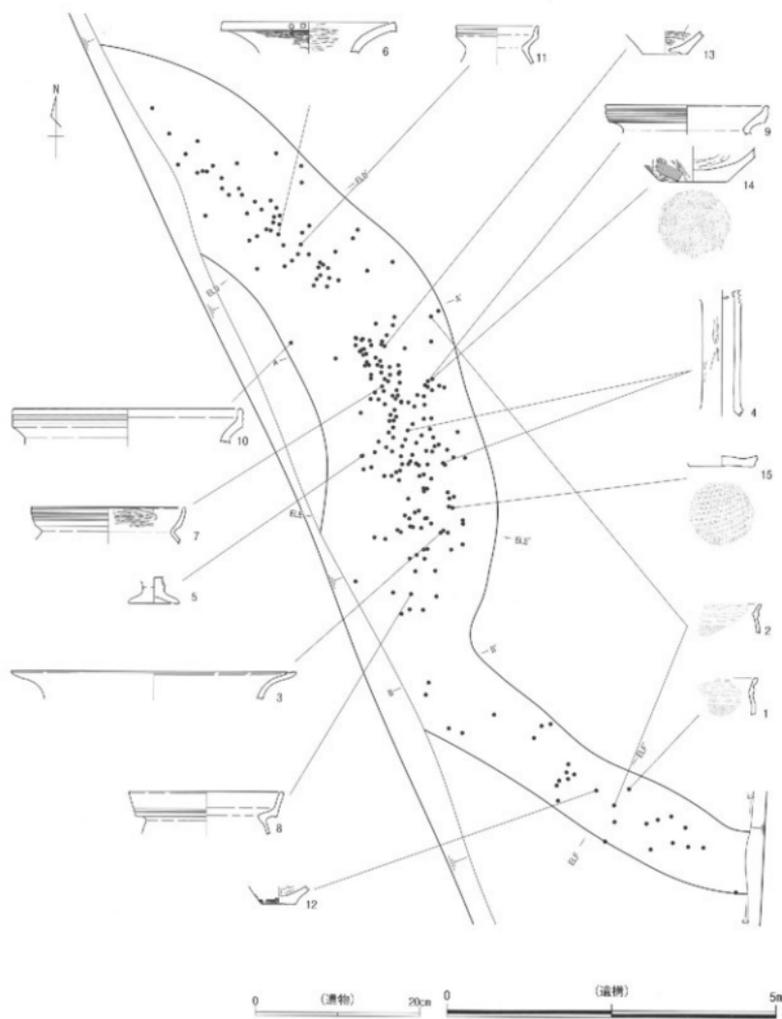
南側くびれ部の周溝底面では、全面赤色塗彩された高坏・小壺・小甕蓋がまとまって出土した（第43図）。赤色塗彩された高坏（第43図20）は坏部が上向きに出土し、脚部が坏部の下から横向きに出土した。さらに、小壺・小甕蓋が坏部に載るように出土した。小甕蓋は完形のまま出土したが、小壺



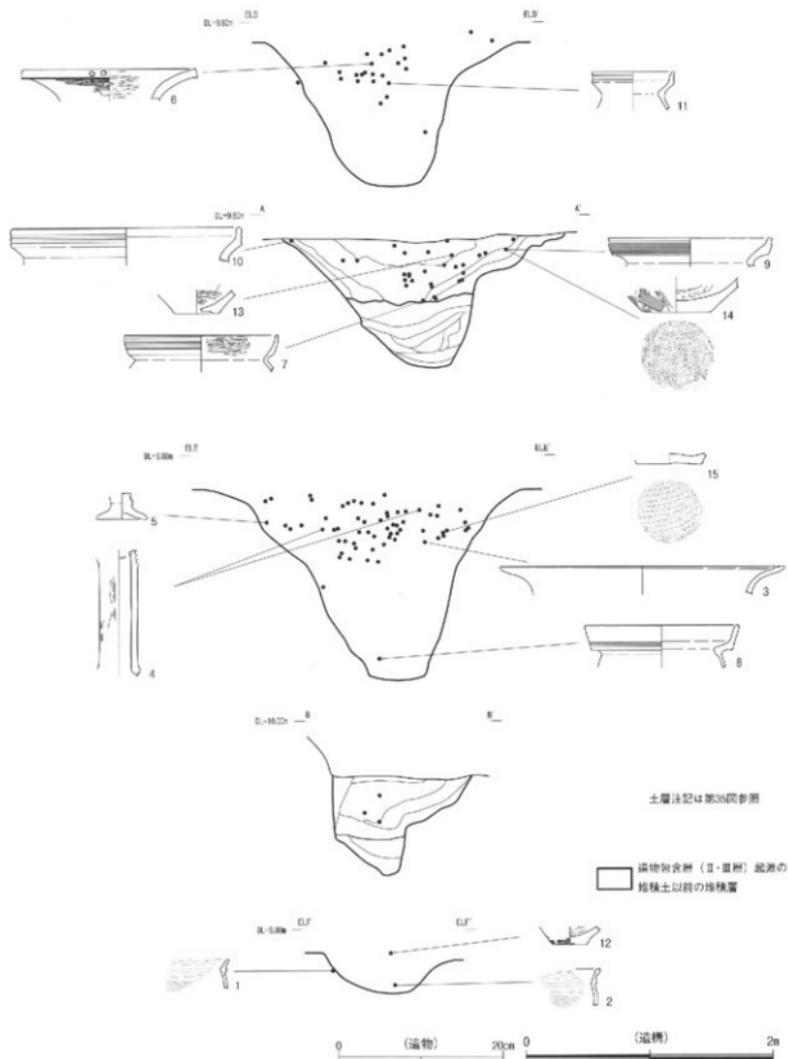
第34図 SZ01等高線図



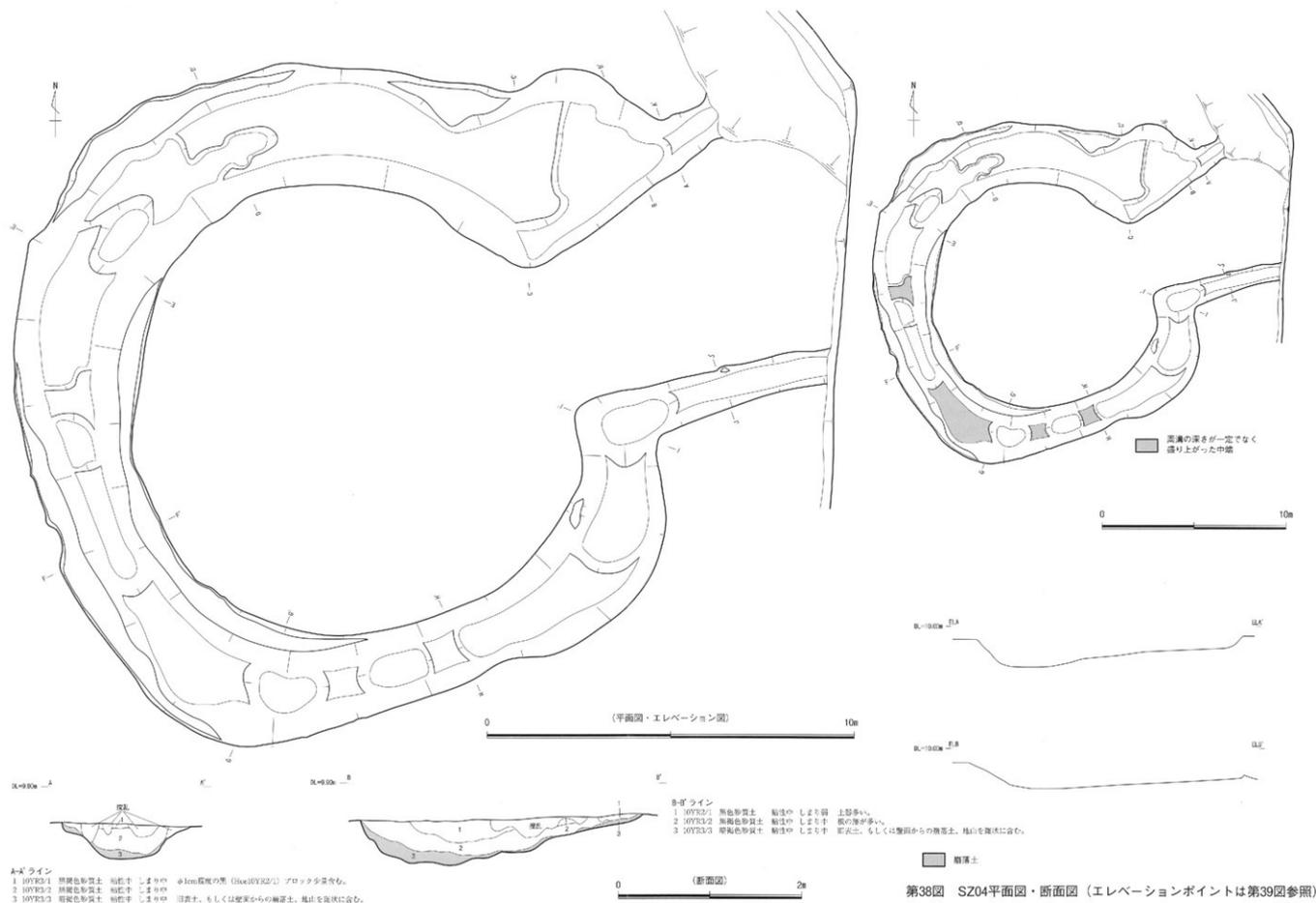
第35図 SZ01平面図・断面図



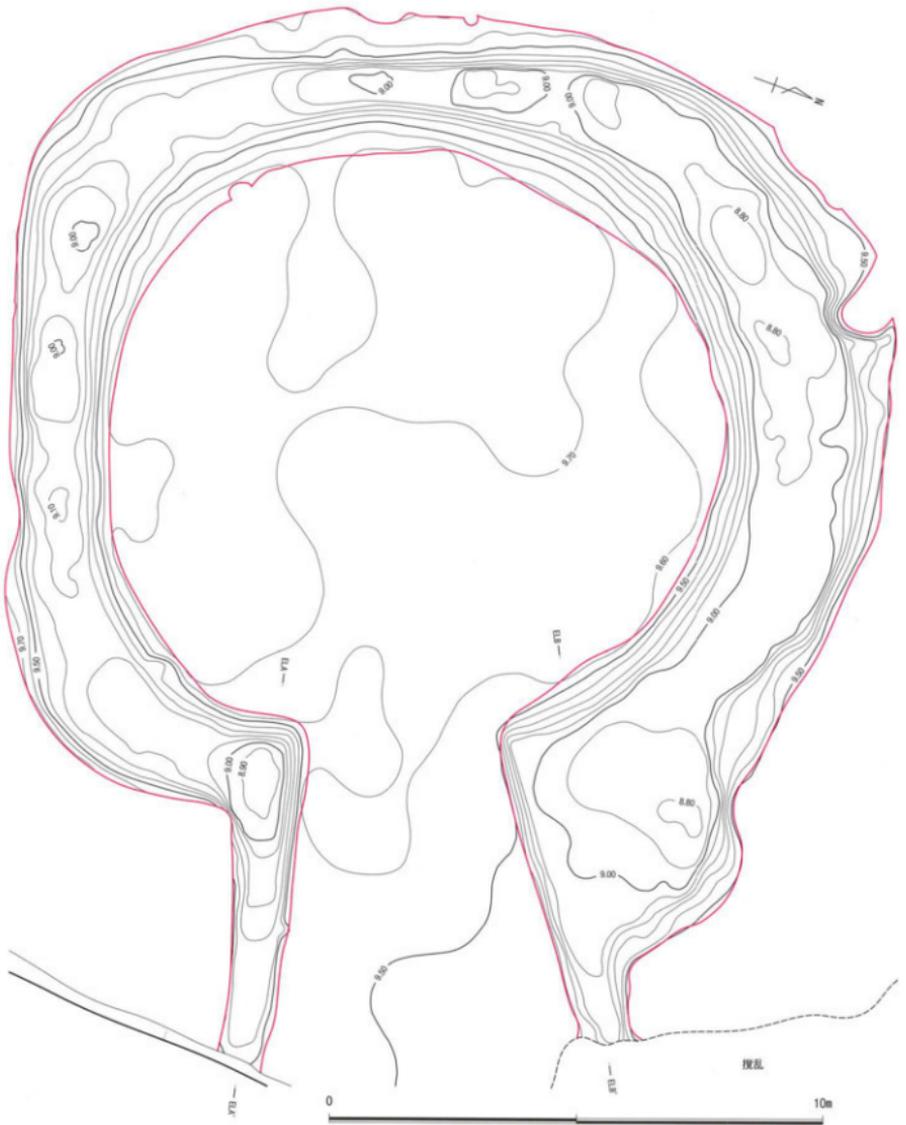
第36図 SZ01遺物出土状態（水平分布）



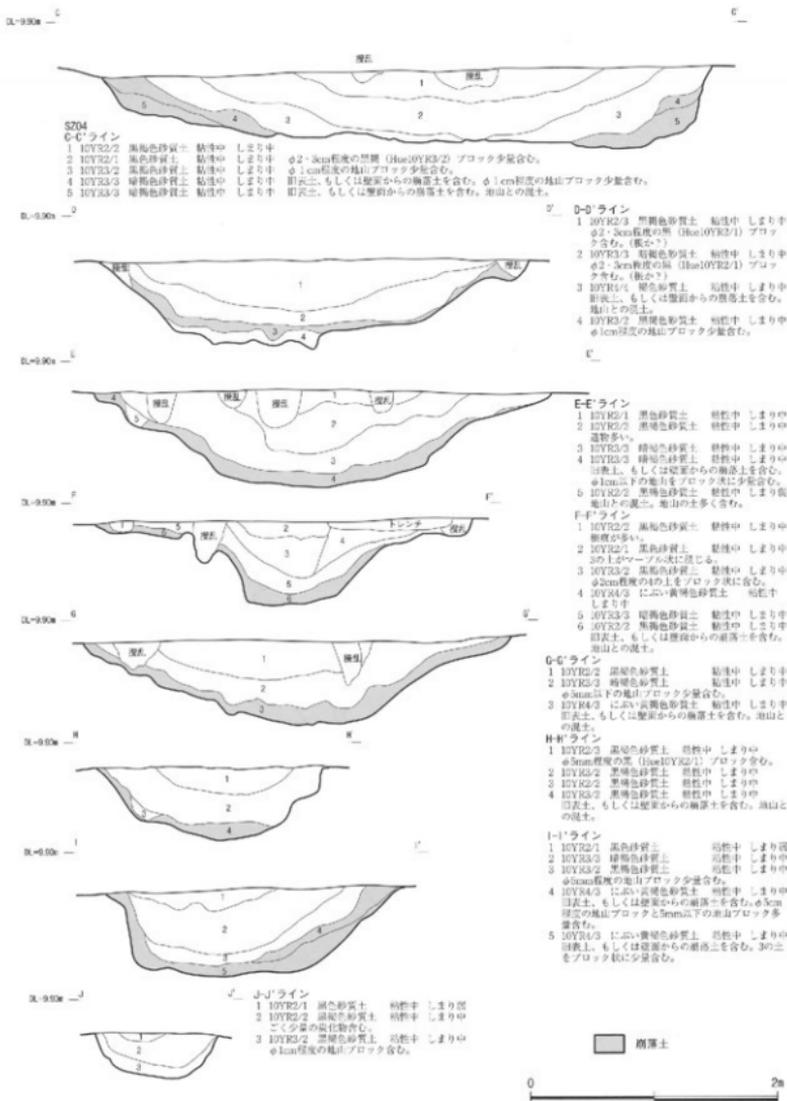
第37図 SZ01遺物出土状態
 (垂直分布、セクション・エレベーションポイントは第36図参照)



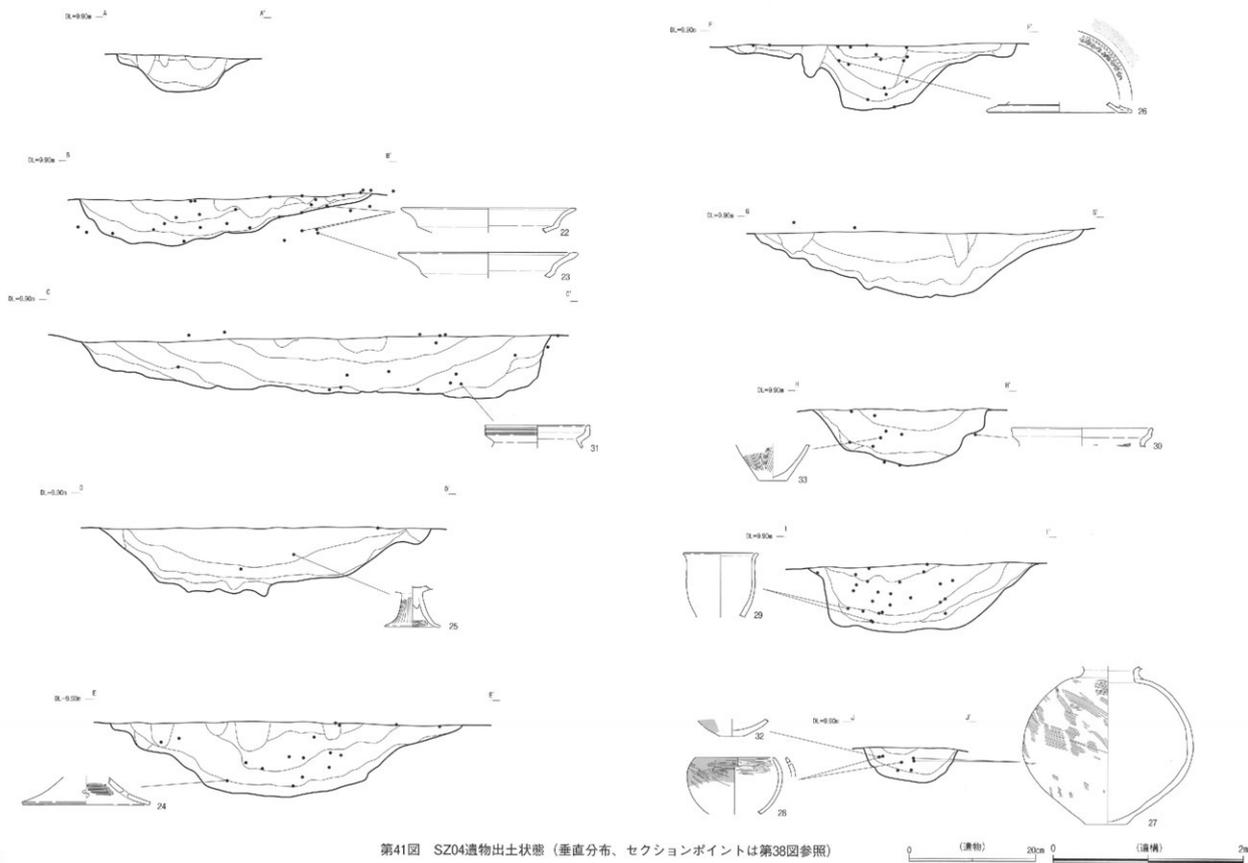
第38図 SZ04平面図・断面図 (エlevationポイントは第39図参照)



第39図 SZ04等高線図



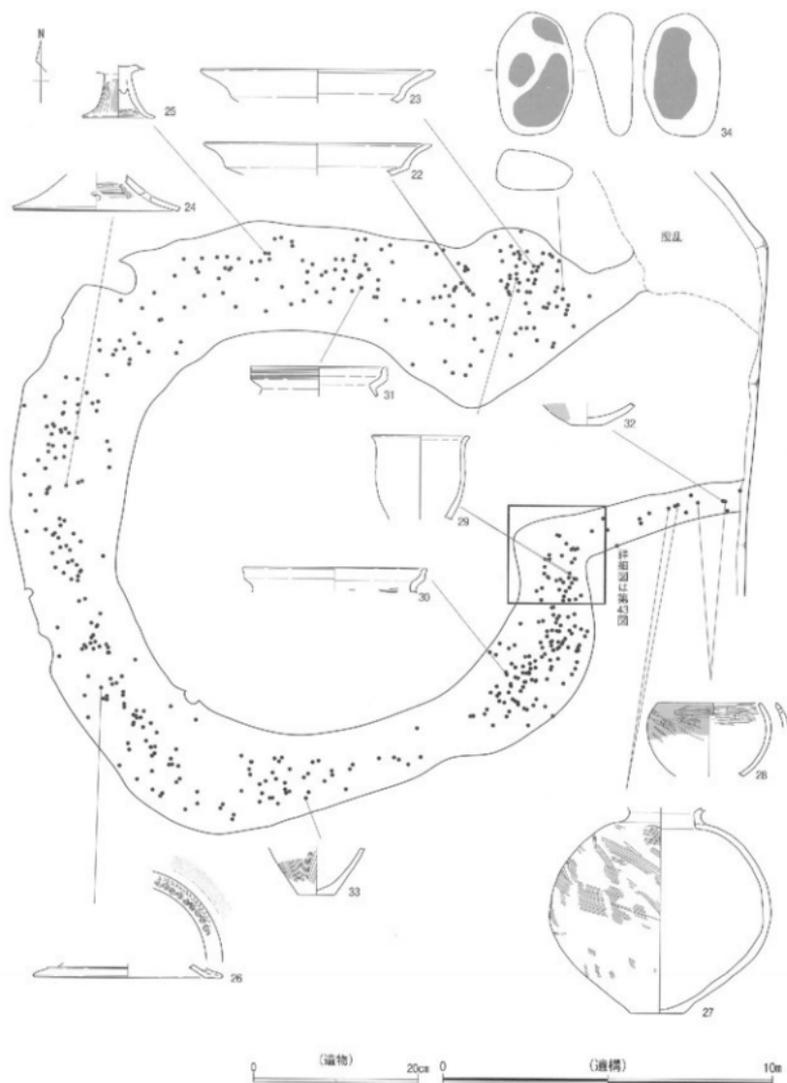
第40図 SZ04平面図・断面図 (セクションポイントは第39図参照)



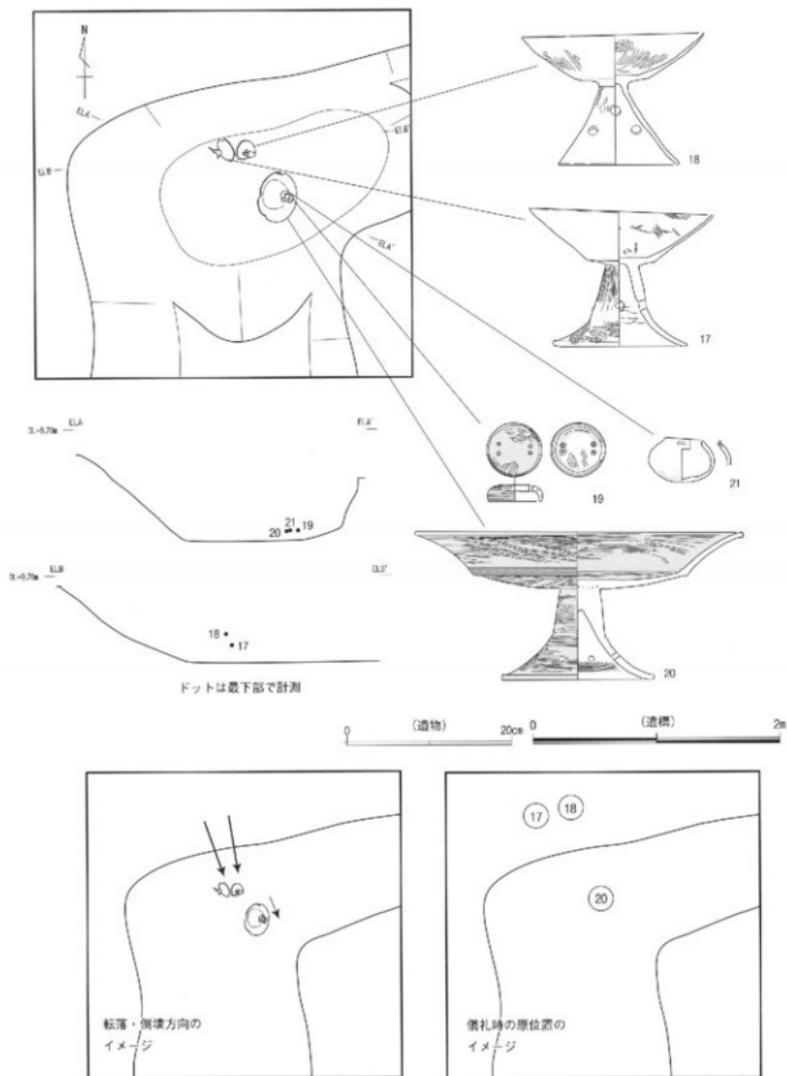
土層注記は第38・40図参照

第41図 SZ04遺物出土状態(垂直分布、セクションポイントは第38図参照)

0 (遺物) 20cm 0 (遺構) 2m



第42図 SZ04遺物出土状態（水平分布）



第43図 SZ04くびれ部遺物出土状態

は上から押しつぶされた状態で出土した。以上から、くびれ部底面に蓋が被せられた小壺が置かれた高坏があり、坏部と脚部との接合部分から折れてそのまま埋没したと考えられる。その北側20cm程度の周溝底面で、赤色塗彩されていない2つの高坏(17・18)が、坏部が向き合うように倒れた状態で出土した。これらは、その出土状態から20と一括性が高いと判断される。墳丘側立ち上りの斜面になりかかっている部分で出土していることから、墳丘から転落したものと考えられる。

前方後方墳 SZ03 (第44-46図) 調査区東部で検出した。SZ01・SZ04に挟まれるような配置である。古墳の約半分が調査対象で、墳丘東側半分は調査対象地の外に続く。地山面で黒褐色の周溝プランを検出した。墳丘盛土及び主体部は後世の削平を受け、遺存しない。墳丘の主軸長は約14mである。主軸方位はS-15°-Eである。周溝は最大幅2m、最大深約1mで、前方部でもほぼ同一規模の周溝が続いている。この点はSZ01と異なる。前方部周溝は前端に向かって緩やかに浅くなり、前端の周溝は本来的に存在しない可能性が高い。周溝壁面の両脇には地山(周溝壁面)の崩落土と考えられる覆土があり、さらに遺物包含層起源の黒褐色土層がレンズ状に堆積し主体を占める。

周溝覆土全体から上下の差がなく土器片が出土した。遺物包含層堆積時の混入品と思われる。平面分布は後方部後端周溝(南辺)に集中している(第46図)。底面付近出土遺物のうち、埋葬時の儀礼に用いられたと考えられるものは認められない。

②溝(第32図)

50条検出した。SD20以外は、他遺構との切り合い関係から古墳の周溝埋没後に形成された溝と考えられる。これらの主軸方向は、A地区で検出された同様の溝と類似している。なお、第32図ではSZ04上に溝が表現されていないが、これは周溝上の溝の調査は不要とされたためであり、周溝上にも確実に溝は伸びていた。

SD36 (第32図) SZ04の周溝北側に位置し、覆土の色調が黄褐色で他の遺構より明るく、粘質度も弱いことから、他の遺構と時代が異なると考えられる。重複関係から、SZ04の周溝埋没後に形成されたことは確かだが、出土遺物がないため詳細は不明である。

SD20 (第32図) SZ03の西で検出したL字状の溝である。他の遺構と同じく、黒褐色の覆土が堆積している。A地区で検出された竪穴建物(SX01)の壁溝の続きと考えられる。調査区壁面付近の壁溝は削平により検出されなかったと考えられる。P01-12・93・104のいずれかはこの建物に伴う柱穴と考えられるが、主柱穴配置は不明である。SD27と重複するものの、SD20が先行するので他の溝群よりは古い。出土遺物がないため詳細は不明である。古墳とは接していない。

③土坑

SK01 (第32図) SZ03の後方部北西隅で検出した。覆土は主に黒褐色で、周溝や溝の覆土と同様である。位置や覆土の様相から、墳丘が削平され、周溝が埋没した後の遺構と考えられる。出土遺物がなく、詳細は不明である。

④柱穴(第32図)

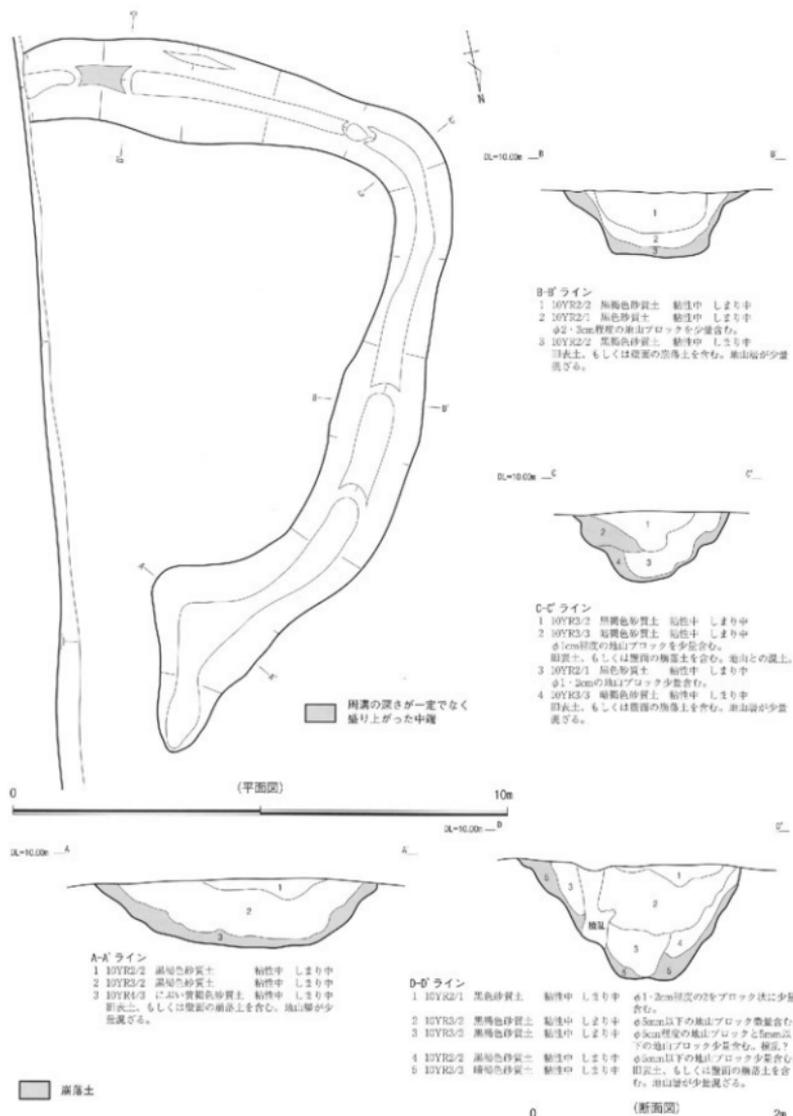
96基検出した。覆土はほとんどが黒褐色の単層である。地山面で検出した。竪穴建物(SD20)に伴うものの他、SZ04の周囲にピット群があり、SZ04内にはP22・23があるのみである。SZ04とSZ03の間、SZ03とSZ01の間にはピットがまとまって所在するが、周溝内側の墳丘があった部分にはピットが存在しない。以上から、本調査区のピットは主に墳丘が削平される以前に形成されたと考えられる。

(2)出土遺物の概要

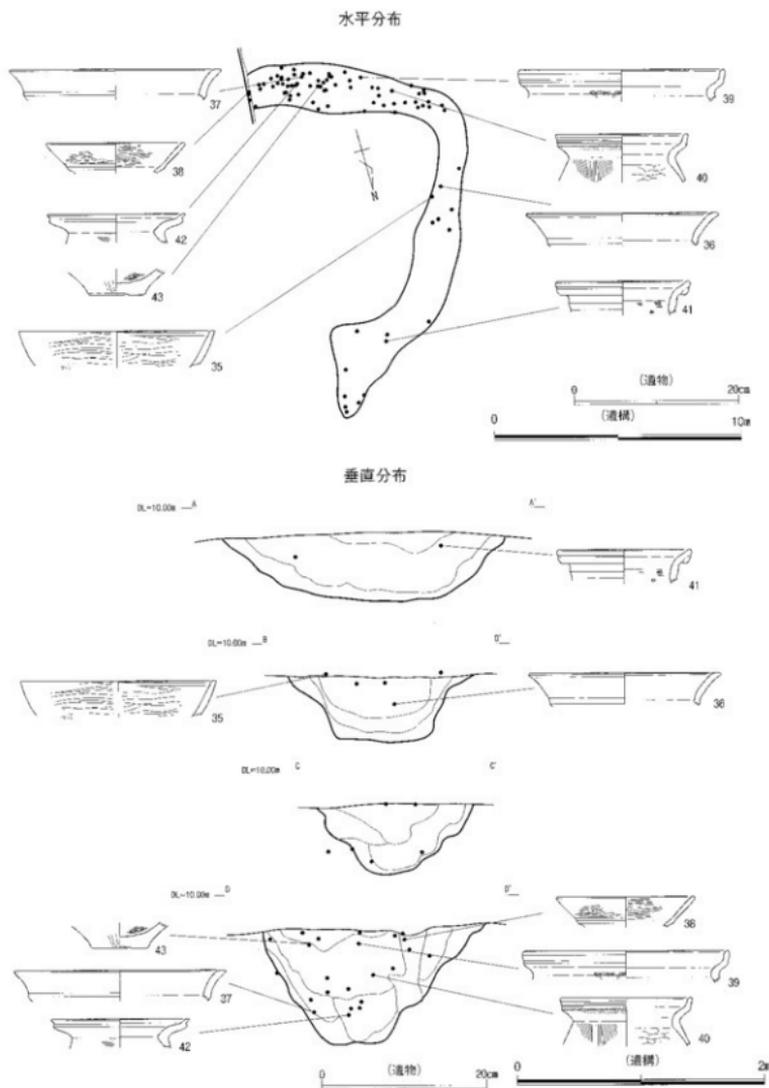
本調査区では弥生～古墳時代の遺物を主体として縄文土器、須恵器が出土した。編年的位置付けを与える際、縄文時代は下老子笹川遺跡の報告(跡富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事業所2006)、弥生～古墳時代は高橋浩二氏の研究(高橋2000)、須恵器は田嶋明人氏の研究(田嶋2000)を参考とした。なお、主体を占める弥生～古墳時代の土器については、汎用性の高い石川県(加賀)の土器型



第44図 SZ03等高線図



第45図 SZ03平面図・断面図



第46図 SZ03遺物出土状態（セクションポイントは第45図参照）

式名にあてはめ、〇〇式期と表記する。

SZ01 (第47図) 1・2は口縁部がくの字状に外反する器形で、屈曲部前後に2条の沈線を施し、その下に縄文を施す。3は高坏の口縁部で、口縁部内面に粘土紐を一周貼付けて肥厚させている。4は高坏の脚柱部で長い円筒形を呈する。弥生時代後期(法仏Ⅰ～Ⅱ式期)と考えられる。5は低脚高坏の脚部で、底部分もナデで丁寧に調整している。6は壺の口縁部である。口縁部に向けて大きく外反する。口縁部には円形の刺突を2つセットで施す。7～11は弥生～古墳時代の甕である。太さは異なるが、有段部に擬凹線を施す。12～15は甕または壺の底部である。底面は、輪や成形されているもの(12・13)、ハケ調整しているもの(14)、網代痕を残すもの(15)とバラエティーに富む。16は磨石で、両面から使い込まれ、中央部が薄くなっている。

SZ04 (第47～49図) 17・18・20は高坏で、完形に復元できた。17は口縁部がほぼ直線状に伸びる。脚柱部をもち、裾部に向かってラッパ状に大きく外反する。脚部を坏部に埋め込んで作られている。脚柱部には四方向に穿孔がある。脚部内面以外は全面をミガキ調整している。18は口縁部がやや内湾するように伸びる。脚柱部をもたず、直線的に裾部まで広がる三角錐のような器形をなす。脚部を坏部に埋め込んで作られている。脚部には横位2列で上段に2ヶ所、下段に4ヶ所、それぞれが三角形もしくは逆三角形をなすように配置された、計6ヶ所の穿孔がある。摩滅が激しいが、部分的にミガキ調整がみられる。表面には剝離した部分が多いものの、胎土よりやや淡色の化粧土がみられる。化粧土は全面に施されていたと考えられる。20は高坏で、坏部の径が40cm弱と大型である。脚部内面を除いて、全面赤色塗彩されている。坏部は大きな段を有し、段部分には3条の沈線を施す。段より上部は大きく外反し、口唇部は面取りによる角をつくっている。脚部は5cm程度の短い脚柱部をもち、ラッパ状に外反する裾部とは3条の沈線で区画されている。柄端部も口唇部と同様に面取りし、角をつくっている。脚部には穿孔が2段にわたって施されており、上段は0.4cm程度の穿孔が3ヶ所、下段は0.8cm程度の穿孔が6ヶ所で、計9ヶ所施されている。また、穿孔は上段1ヶ所と下段2ヶ所が三角形になるように配置されている。

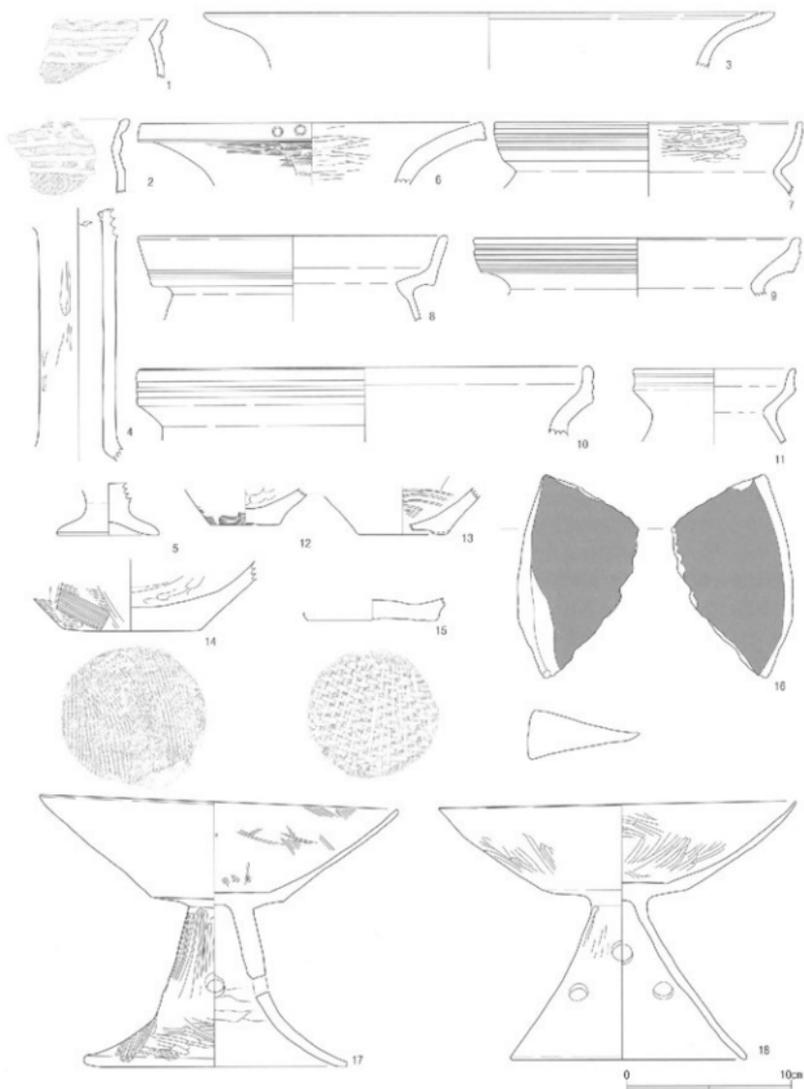
19・21は小壺とその蓋と考えられる。19は蓋である。2ヶ所が対になるよう配置された4ヶ所の穿孔を有する。穿孔は上面から行っており、内面には穿孔時の剝離痕が残る。内面以外は赤色塗彩されている。全面ミガキ調整で、丁寧に仕上げられている。21は無頸壺で、口縁部付近に穿孔を1ヶ所確認できる。摩滅のため不明瞭だが、穿孔と思われる部分もある。19と同じく、2ヶ所が対になるよう配置された計4ヶ所の穿孔を有すると考えられる。底面付近に、胎土より淡い色調の化粧土を確認できる。化粧土には赤色塗彩された痕跡がところどころに残存している。

22・23は高坏の坏部で、口縁部内面に粘土紐を一周させて肥厚させている。24～26は高坏の脚部で、24は4ヶ所に穿孔をもつ。26は裾部にS字状スタンプ文がみられる。25は脚柱部が5cm程度と短く、坏との接合部分の充填が観察できる。27は壺で、前方部でまとまって出土した。口縁部は無いが、ほぼ完形に復元できた。胴部が球状をなす。28は口縁部が内湾する鉢で、口縁部付近に1ヶ所穿孔がみられる。29は小型の甕で、摩滅が激しく調整は不明である。30・31は有段口縁をもつ甕である。31は擬凹線が4条みられる。32・33は壺または甕の底部である。34は磨石で、磨痕が両面に残る。

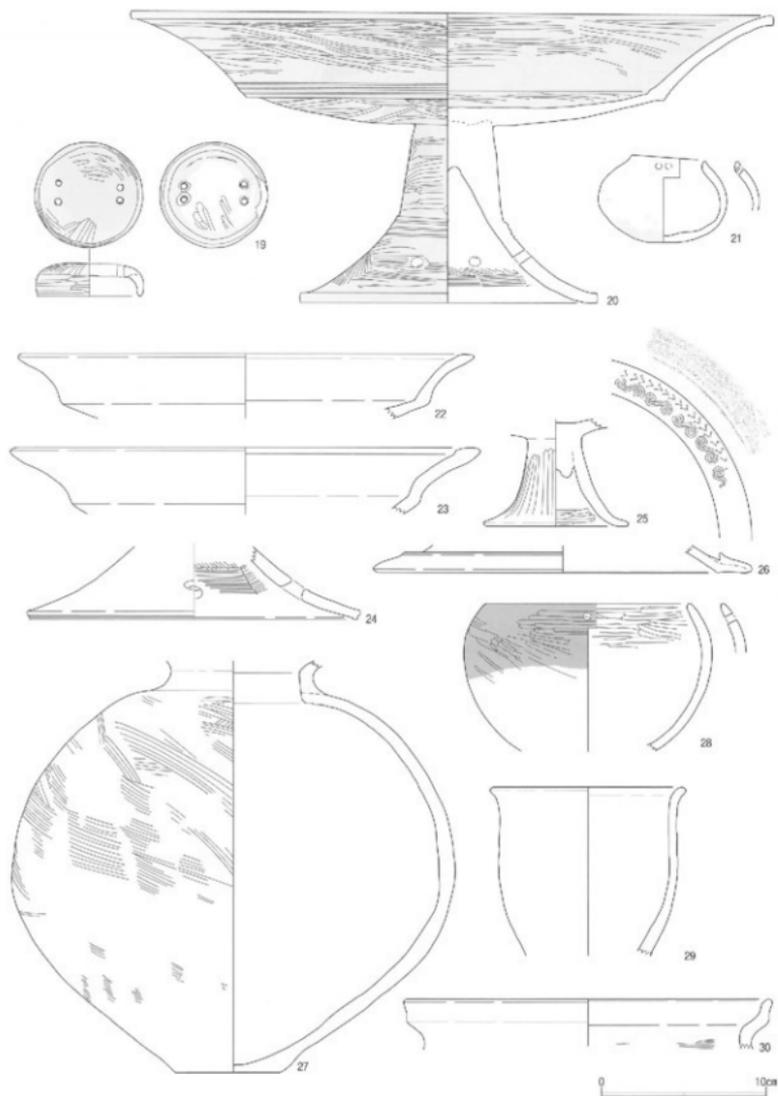
SZ03 (第49図) 35は縄文時代の浅鉢と考えられる。表裏ともミガキ調整を施し、口縁部内面には1条の沈線を加える。口唇部はやや内傾するように面取りされている。36～38は高坏の坏部で屈曲部をもち、屈曲部より上部は外反もしくは直線的に伸びる。39～42は甕の口縁部で、有段をなす。有段部の長さにはばらつきがあることから時間幅が広いと考えられるが、弥生時代後期～古墳時代初頭の範疇で捉えられる。

43は甕もしくは壺の底部である。底の中心部を抉り取るようにして上げ底にしている。44は甕である。穿孔後に穿孔部分の調整をしていない。

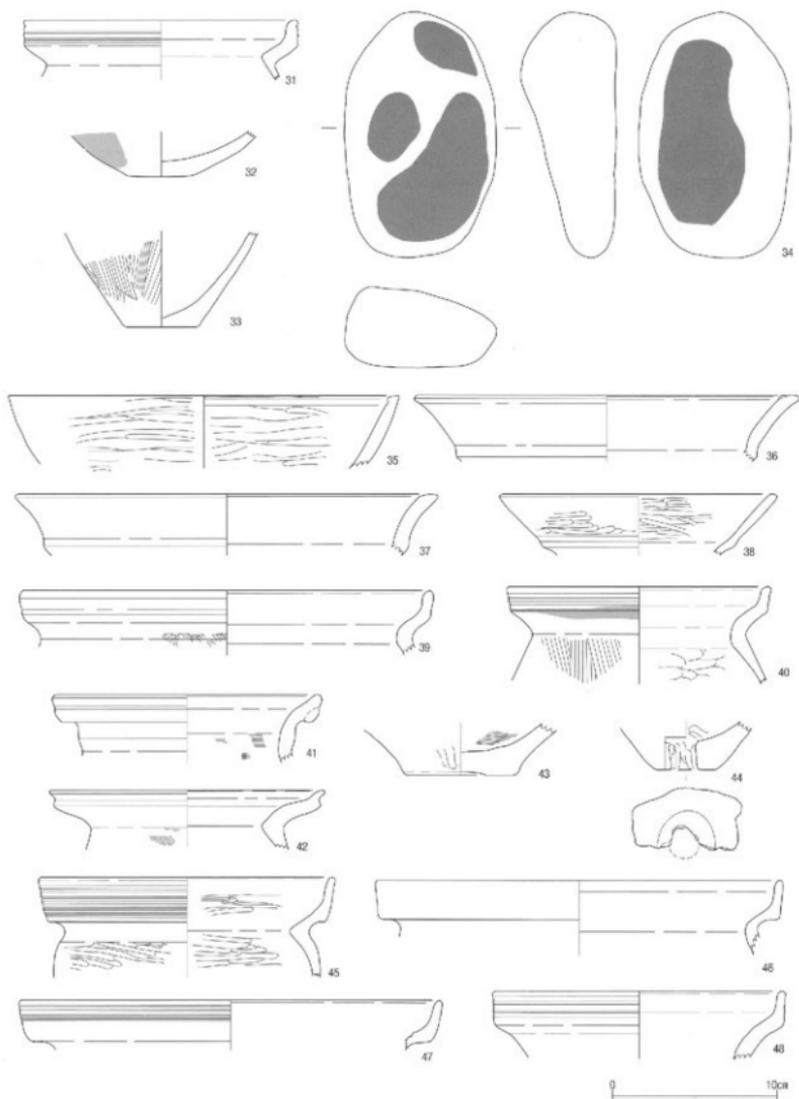
遺物包含層 (第49・50図) Ⅱ・Ⅲ層出土遺物である。45～55・57・58は甕の口縁部である。いず



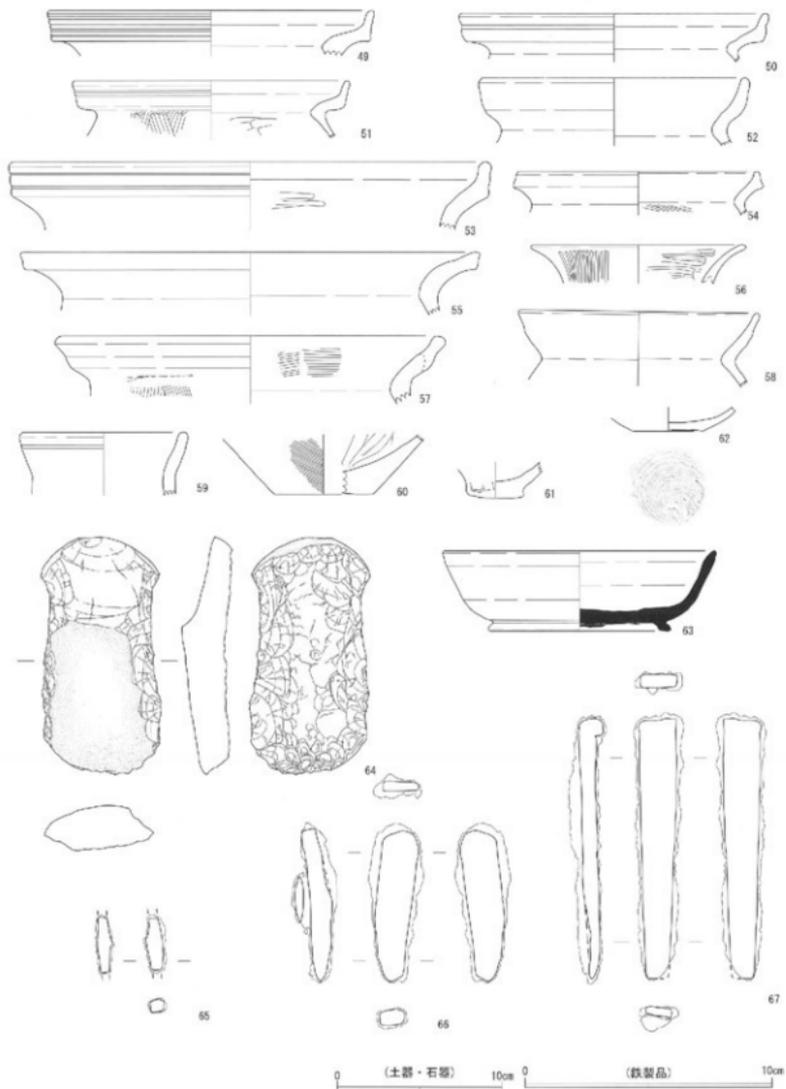
第47図 出土遺物実測図(1) (1~16: SZ01、17・18: SZ04)



第48図 出土遺物実測図(2) (19~30 : SZ04)



第49図 出土遺物実測図(3) (31~34 : SZ04、35~44 : SZ03、45~48 : 遺物包含層)



第50図 出土遺物実測図(4) (49～67：遺物包含層)

第9表 遺物観察表(1)

大洲館 番号	器種	大きさ (1)内径(横元)	色調	焼成・胎土	器形・成形・文様・調整の特徴	備考
1	焼土土器 高杯		赤褐色 (10YR2/2) 土点いり黄褐色 (10YR5/3)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	口縁部に文様施文。外面黄褐色。内面ミガキ。	
2	焼土土器 高杯		赤褐色 (2.5Y3/1) 灰黄色 (2.5Y4/2)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	1口縁部に文様施文。外面黄褐色。内面ミガキ。口縁部に突起。	
3	高杯	口径 (34.8cm)	赤褐色 (2.5Y3/6)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	外面ミガキ。内面黄褐色。外反する口縁部をもつ。内外ともに磨減が著しい。	焼成 口縁部 1/3
4	高杯	胴柱径4.5cm	赤褐色 (7.5YR8/4~5YR7/8) 灰黄色 (10YR8/3)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	ほぼ直線的にのびる胴柱をもつ。外面黄褐色のみ。縦文ミガキ。内面ナツ。	焼成 胴柱部 1/5
5	高杯	口径6.0cm	赤褐色 (5YR6/6~10YR6/4) 灰黄色 (5YR6/6~10YR6/1)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	外面ナツ。内面ナツ。	焼成 口縁部 5/6
6	高杯	口径 (21.0cm)	赤褐色 (10YR7/4) 灰黄色 (10YR8/3)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	口縁部は2本の肩稜突。外面黄褐色。内面黄褐色ミガキ。	焼成 口縁部 1/5
7	高杯	口径 (18.8cm)	赤褐色 (10YR7/4) 灰黄色 (7.5YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	口縁部に2本の肩稜突。外面ナツ。内面黄褐色ミガキ。	焼成 口縁部 1/9
8	高杯	口径 (18.8cm)	灰黄色 (7.5YR7/2)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	1口縁部に2本の肩稜突。外面ナツ。内面ナツ。外内面とも磨減が著しい。	焼成 口縁部 1/6
9	高杯	口径 (10.8cm)	赤褐色 (7.5YR6/6) 灰黄色 (2.5YR8/6~10YR4/1)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	口縁部に2本の肩稜突。内外面ともナツ。	焼成 口縁部 1/10
10	高杯	口径 (27.8cm)	赤褐色 (7.5YR6/4) 灰黄色 (2.5Y4/2)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	口縁部には2本の肩稜突。内外面ともナツ。	焼成 口縁部 1/6
11	高杯	口径 (9.8cm)	灰黄色 (2.5Y3/2)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	口縁部には2本の肩稜突。内外面とも厚縁が著しい。	焼成 口縁部 1/6
12	焼土土器 高杯	口径 (4.3cm)	赤褐色 (10YR2/4) 赤褐色 (10YR2/3)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	外面黄褐色。内面黄褐色。	焼成 底部 1/5
13	焼土土器 高杯	口径 (5.4cm)	赤褐色 (10YR2/4) 赤褐色 (10YR2/3)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	外面ナツ。内面黄褐色。外周へうろちひついたりうろちたり。上げ底になっている。	焼成 底部1/3
14	焼土土器 高杯	口径 (6.4cm)	赤褐色 (10YR2/4) 赤褐色 (10YR2/3)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	人々の字状に立ち上る外縁をもつ。外面黄褐色。内面黄褐色。	焼成 底部 1/6
15	焼土土器 高杯	口径6.0cm	赤褐色 (10YR6/6) 灰黄色 (7.5YR6/6)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	外面ナツ。内面ナツ。底面黄褐色。	焼成 底部 1/6
16	高杯	最大口径15.2cm 最大胴径10cm 口径25.2cm	赤褐色 (7.5YR6/6~5YR6/8) 灰黄色 (7.5YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	頸部に磨減がみられる。表面から使用されかけた痕跡は非常に著しい。	
17	高杯	口径13.8cm 口径26.0cm	赤褐色 (7.5YR6/6~5YR6/8) 灰黄色 (7.5YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	口縁部には2本の肩稜突をもつ。4/7の厚縁をもち、4/7の厚縁をもち、外面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 底部 1/11
18	高杯	口径12.9cm 口径34.30cm	赤褐色 (5YR6/8~7.5Y5/1) 赤褐色 (5YR6/8)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	口縁部には2本の肩稜突をもつ。2段の厚縁の厚縁をもち、外面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 底部 1/11
19	高杯 (ヒツナツ)	口径6.6cm	赤褐色 (2.5YR4/8) 赤褐色 (2.5YR4/8)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	4/7の厚縁の厚縁に2本の肩稜突をもち、外面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 底部 1/11
20	高杯	口径28.3cm 口径18.3cm	赤褐色 (10YR5/8) 赤褐色 (2.5YR5/8)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	頸部から外反する厚縁をもつ。厚縁と頸部に2本の肩稜突をもち、4/7の厚縁をもち、外面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 底部 1/11
21	高杯 (ヒツナツ)	口径 (4.0cm)	赤褐色 (10YR8/6) 赤褐色 (7.5YR7/8)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	底面ミガキの厚縁が2本の肩稜突に直交。外面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 底部 1/6
22	高杯	口径 (7.0cm)	赤褐色 (7.5YR8/6) 赤褐色 (7.5YR8/6)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	外反する口縁部をもつ。	焼成 口縁部 1/5
23	高杯	口径 (28.0cm)	赤褐色 (10YR7/3) 灰黄色 (10YR5/4)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	外反する口縁部をもつ。内面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 口縁部 1/10
24	高杯	口径 (20.0cm)	赤褐色 (10YR8/4) 赤褐色 (10YR8/6)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	人々の字状に立ち上る外縁をもち、底面ミガキの厚縁をもち、外面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 底部1/8
25	高杯または 高杯	口径8.6cm	赤褐色 (7.5YR8/2~5YR6/4) 赤褐色 (10YR8/2)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	厚縁は外反する。外面黄褐色。内面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 底部 1/6
26	高杯	口径 (22.6cm)	赤褐色 (7.5YR8/6) 赤褐色 (10YR8/4)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	厚縁は外反する。外面黄褐色。内面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 底部 1/6
27	高杯	口径6.3cm	赤褐色 (7.5YR7/6~10YR7/2) 赤褐色 (10YR7/3)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	厚縁は外反する。外面黄褐色。内面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 底部 1/6
28	小皿 灰皿	口径 (12.4cm)	赤褐色 (7.5YR7/6~10YR2/1) 赤褐色 (7.5YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	内径より厚縁をもつ。焼成時に厚縁の厚縁をもち、外面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 口縁部 2/3
29	高杯	口径 (11.6cm)	赤褐色 (5Y6/1) 赤褐色 (5Y5/1)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	内外面とも磨減が著しく調整不良。	焼成 口縁部 1/4
30	高杯	口径 (22.2cm)	赤褐色 (7.5YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	内面黄褐色。内外面ともナツ。	焼成 口縁部 1/6
31	高杯	口径 (16.6cm)	赤褐色 (10YR7/4)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	口縁部には2本の肩稜突。内外面ともナツ。	焼成 口縁部 1/5
32	焼土土器 高杯	口径 (4.0cm)	赤褐色 (10YR6/4~10YR2/1) 赤褐色 (7.5YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	内面より厚縁をもつ。内面ナツ付。内外面ともナツ。	焼成 底部 1/5
33	高杯	口径 (4.2cm)	赤褐色 (10YR6/4)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	やや内面黄褐色に立ち上る。外面黄褐色。内面ナツ。底面ナツ。	焼成 底部1/2
34	高杯	最大口径15.2cm 最大胴径9.3cm 口径10.2cm	赤褐色 (10YR6/4~10YR3/2) 赤褐色 (5YR6/6~2.5Y4/2)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	厚縁に磨減がみられる。表面には数ヶ所にのびて磨減がみられる。	焼成 口縁部 1/10
35	高杯	口径 (24.0cm)	赤褐色 (10YR6/4~10YR3/2) 赤褐色 (5YR6/6~2.5Y4/2)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	内外面とも厚縁をもち、厚縁の厚縁をもち、外面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 口縁部 1/10
36	高杯	口径 (23.2cm)	赤褐色 (10YR8/4)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	外反する口縁部をもつ。内面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 口縁部 1/10
37	高杯	口径 (25.4cm)	赤褐色 (7.5YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	外反する口縁部をもつ。内面黄褐色。厚縁をもち、化粧のし加減が異なる。内面黄褐色。底面ナツ。	焼成 口縁部 1/13

第10表 遺物観察表(2)

実測図 番号	器種	大きさ ()内は単位	色調	焼成・胎土	器形・成形・文様・調整の特徴	備考	
38	高杯	口径 17.6cm	表 赤い黄緑 (7.5YR7/4) 裏 赤い黄緑 (10YR7/3)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	縁やかに外反する口縁部をもつ。外唇3条の沈線。内面横線1本。内面縦線1本。	残存 1/11 1線部 1/13	
39	高杯	口径 25.0cm	表 17.5YR7/6	焼成 胎土 良好 砂粒含む	有段口縁部に縦凹線。外唇斜位ハケ。内面ナデ。	残存 1/6 口縁部 1/13	
40	甕	口径 16.0cm	表 赤い黄緑～黒 (10YR7/4～10YR2/1) 裏 黄緑 (10YR7/4)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	口縁部に2条の縦凹線。外唇ハケ、スス付。内面ナデとユビヤナデ。	残存 1/6 口縁部 1/6	
41	甕	口径 16.0cm	表 赤い黄緑 (10YR7/4) 裏 黄緑 (10YR7/4)	焼成 胎土 良好 砂粒含む	粘土線を斜り付けて有段した口縁部に1条の縦凹線。内面縦凹線ハケ。内唇外にもナデ。	残存 1/6 口縁部 1/6	
42	甕	口径 16.6cm	表 黄緑 (7.5YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	有段口縁部に1条の縦凹線。外唇斜位ハケ。内唇外にもナデ。	残存 1/5 口縁部 残存1/5	
43	甕 C4	口径 16.6cm	表 黄緑～黒 (10YR8/4～2.5Y4/1) 裏 黄緑 (10YR8/3)	焼成 胎土 普通 砂粒少ない	外唇ミダガ。内面ハケ。底平上7条。	残存 底部2/3	
44	甕	口径 16.6cm	表 黄緑～黒 (10YR8/4～2.5Y3/1) 裏 黄緑～黒 (2.5Y6/2～2.5Y5/1)	焼成 胎土 普通 砂粒多い	外唇ナデ。内面ヘラタズリ。底部の穿孔部分は調整されていない。	残存 底部1/2	
45	甕	口径 18.0cm	表 17.5YR7/6	焼成 胎土 良好 砂粒含む	有段口縁部に3条の縦凹線。内唇外にも横線ミダガ。	残存 1/8 口縁部	
46	甕	口径 24.6cm	表 黄緑 (10YR8/6)	焼成 胎土 不良 砂粒含む	内外唇とも横線強く、調整不明。	残存 1/25 口縁部 1/10	
47	甕	口径 25.6cm	表 黄緑 (10YR7/6)	焼成 胎土 不良 砂粒含む	有段1線部に1条の横凹線。内唇外とも横線が強い。	残存 1/6 口縁部	
48	甕	口径 17.6cm	表 赤い黄緑 (5YR5/6) 裏 黄緑 (7.5YR6/6)	焼成 胎土 普通 砂粒含む	有段口縁部に3条の縦凹線。内唇外とも横線が強い。	残存 1/16 口縁部	
49	甕	口径 18.8cm	表 黄緑 (10YR8/4)	焼成 胎土 普通 砂粒少ない	有段口縁部に5条の縦凹線。内唇外にもナデ。	残存 1/16 口縁部	
50	甕	口径 18.6cm	表 黄緑 (10YR8/4)	焼成 胎土 不良 砂粒少ない	有段1線部に1条の横凹線。内唇外にもナデ。	残存 1線部 1/8	
51	甕	口径 16.8cm	表 赤い黄緑～黒 (10YR6/4～10YR2/1) 裏 赤い黄緑 (10YR3/4)	焼成 胎土 普通 砂粒含む	有段口縁部に2条の縦凹線。外唇斜位ハケ。内面ナデ、ヘラタズリ。	残存 1/8 口縁部	
52	甕	口径 18.2cm	表 黄緑 (10YR8/6) 裏 黄緑 (10YR8/4)	焼成 胎土 普通 砂粒含む	有段口縁部をもつ。内唇外にもナデ。	残存 1/6 口縁部	
53	甕	口径 28.0cm	表 黄緑～黒 (2.5Y3/1～10YR8/6) 裏 黄緑～黒 (10YR8/3)	焼成 胎土 普通 砂粒含む	1線部に2条の横凹線。外唇ナデ。内面ナデ、一部ヘラタズリ。	残存 1/11 口縁部 1/21	
54	甕	口径 14.6cm	表 17.5YR7/6	焼成 胎土 普通 砂粒少ない	外唇ナデ。内面斜位ハケ。	残存 1/8 口縁部	
55	甕	口径 27.8cm	表 赤い黄緑 (5YR7/8～2.5Y5/2) 裏 赤い黄緑 (5YR6/8～2.5Y5/2)	焼成 胎土 不良 砂粒多い	内唇外とも横線強いが、ナデが。	残存 1/13 口縁部 調整1/9	
56	甕	口径 18.0cm	表 黄緑 (10YR7/6)	焼成 胎土 普通 砂粒少ない	縁やかに外反する口縁部をもつ。外唇縦線ミダガ。内面横線ミダガ。調整痕で調整。	残存 1線部 1/13	
57	甕	口径 22.8cm	表 黄緑 (10YR7/6)	焼成 胎土 普通 砂粒含む	外唇ナデ、斜位ハケ。内面横線ハケ。外唇部部に1本ナデ。	残存 1/6 口縁部	
58	甕	口径 14.6cm	表 赤い黄緑 (7.5YR7/6) 裏 黄緑 (7.5YR7/6)	焼成 胎土 不良 砂粒多い	外唇外とも横線が強いが、有段1線部に縦凹線ハケ。	残存 1/6 口縁部	
59	甕 遺物番号は 不明	口径 16.0cm	表 黄緑 (10YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	人の字状に外向く口縁部に1条の沈線。外唇外とも、ナデ。	残存 1線部 1/7	
60	甕または 甕	口径 16.0cm	表 赤い黄緑～黒 (10YR6/4～10YR6/1) 裏 赤い黄緑 (10YR7/4)	焼成 胎土 普通 砂粒少ない	底人の字状には横溝的に立ち上る作柄をもつ。外唇斜位ハケ。内面ヘラタズリ。	残存 底部2/3	
61	甕	口径 13.6cm	表 赤い黄緑 (2.5YR6/3) 裏 赤い黄緑 (2.5YR6/2)	焼成 胎土 普通 砂粒少ない	外唇へ調整。内面調整ともナデ。	残存 底部	
62	甕	口径 4.3cm	表 黄緑 (7.5YR6/6) 裏 黄緑 (10YR7/4)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	縁やかに内反する底部をもつ。外唇ナデ。内面斜位ハケ。底面平切。	残存 底部	
63	甕	口径 16.5cm	表 黄緑 (2.5Y7/3)	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	内唇外とも同形ナデ。底面に泥土付着。	残存 口縁部 1/6 底部1/2	
64	石斧	最大長14.6cm・最大幅7.2cm 最大厚2.7cm・重量392.1g				刃部形が刃部が内。中央よりやや基部側に傾いており折れを伴う。刃部の表面にはほとんど凹凸がみられない。基部にも表面が傾いている。	刃部
65	不明鉄片	最大長2.4cm・最大幅0.9cm 重量1.88g				形状で尖った刃部をもつ。刃部に面がうっすらとみられる。	
66	不明鉄片	最大長6.5cm・最大幅2.2cm 最大厚1.6cm・重量17.93g				形状で尖った刃部をもつ。刃部に面がうっすらとみられる。	
67	甕	最大長10.9cm・最大幅2.0cm 最大厚1.3cm・重量36.93g				瓶口で片側が弱くなる。基部には90°の折れ返しがある。	

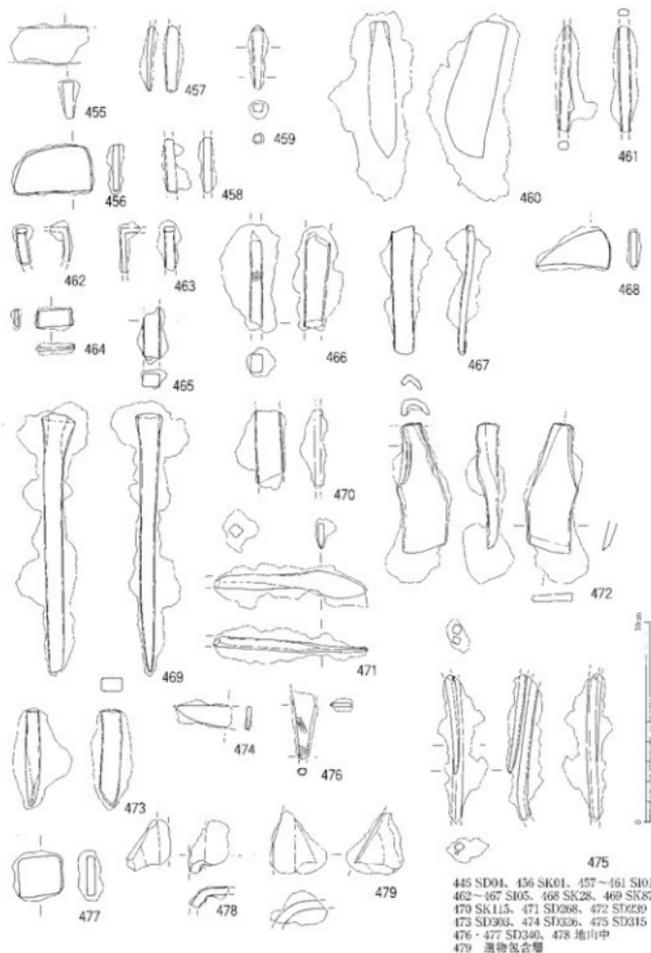
れも有段で、有段部には縦凹線を施している。57は有段の甕の口縁部で、接合痕を観察できる。

59は細頸甕または直口壺の口縁部で、口縁部に1条の沈線を施す。60・61は底部である。61は底部先端までミダガ調整が施されている。

62は土師器の底部で、底面に糸切り痕がみられる。63は須臾器の外で、高台が貼り付いてある。

64は打製石斧で、両面加工している。基部にやや括れがみえる。

この他、鉄製品が2点・不明鉄片が1点出土した。X線写真による検討を経て図1した。67は棒状の不明鉄片である。両端が折れている。長さは2.4cm、幅0.9cm、重量1.88gである。類別としては、富山市打出遺跡出土品458・459・461・475(富山市教育委員会2006, 第51図)がある。



第51図 打出遺跡出土弥生~古墳時代鉄器 (455を除く、富山市教育委員会2006)

66は不明鉄片である。板状の鉄片でやや反っている。刃部に向かうにつれ、若干厚みが増す。側面図左側は当該部が剥離し、その破片が若干上部で錆着していることが、X線写真からうかがえる。刃部は向刃で、切先は尖る。長さ6.5cm、幅2.2cm、厚さ1.6cm、重量17.93gである。類例としては、富山市打出遺跡出土品460・473(富山市教育委員会2006, 第51図)がある。打出遺跡458~461の年代は、類例との比較から弥生時代終末期前半~古墳時代前期前葉の時期幅で捉えられ、473・475は弥生時代後期後半と推定されている(小黑2006b)。67は槌と考えられる。長さ10.9cm、幅2.05cm、厚さ1.2cm、重量38.96gである。先端部分が扁平になっており、基部には90°の折り返しが見られる。(下島勉弘)

第4項 百塚住吉遺跡C地区の調査成果

(1) 検出遺構の概要

検出した遺構は、円墳1基（SZ05）、方形周溝墓1基（SZ06）、竪穴建物1基（SI01）、溝18条（SD01～20、うち欠番2条）、土坑5基（SK01～05）、柱穴73基（P01～85、うち欠番12基）である（第52・53図）。ここでは主要遺構について詳述する。

①古墳

円墳 SZ05（第54～56図） 調査区東側で検出した。東側1/4程度は調査区外に続く。地山面で黒褐色の周溝プランを検出した。墳丘盛土・主体部は後世の削平を受け、遺存しない。南側には根跡やモグラによる攪乱が多かった。直径12m（墳端は周溝内の墳丘側傾斜変換線（下端線）の円墳である。周溝は最大幅1.2m、最大深65cmである。遺物包含層（Ⅱ層）起源の覆土がレンズ状に堆積しており、周溝壁面の両脇には地山（周溝壁面）の崩落土と考えられる堆積がある。遺物は上下の差がなく覆土全体から出土したが、底面直上からは出土していない。

図化できる遺物はほとんどが竪穴建物（SI01）との重複部分から出土した。さらに、SI01と同様に赤色塗彩された土器が多いことから、SZ05出土遺物は、周溝埋没時期にSI01の覆土から流れ込んだものが多数を占めると考えられる（第56図）。

②方形周溝墓

SZ06（第54・57・58図） 調査区北西部で検出した。地山面で黒褐色の周溝プランを確認した。墳丘盛土・主体部は後世の削平を受け、遺存しない。長軸は7.0m、短軸は5.2m（墳端は周溝内の墳丘側傾斜変換線（下端線）で、主軸方位はN-20°-Wである。周溝は最大幅2m弱、最大深は北西隅で40cm程度である。底面の深さはばらつきがあり、一定でない。地山をブロック状に含む覆土が周溝下部に堆積している。遺物包含層（Ⅱ層）由来の層がレンズ状に堆積しており、主たる覆土となっている。

遺物は上下の差がなく出土した。特に、最も深い北西隅から多く出土した。埋葬時の儀礼に用いたと判断できるものはない。図化できる良好な資料は西辺から出土した（第58図）。

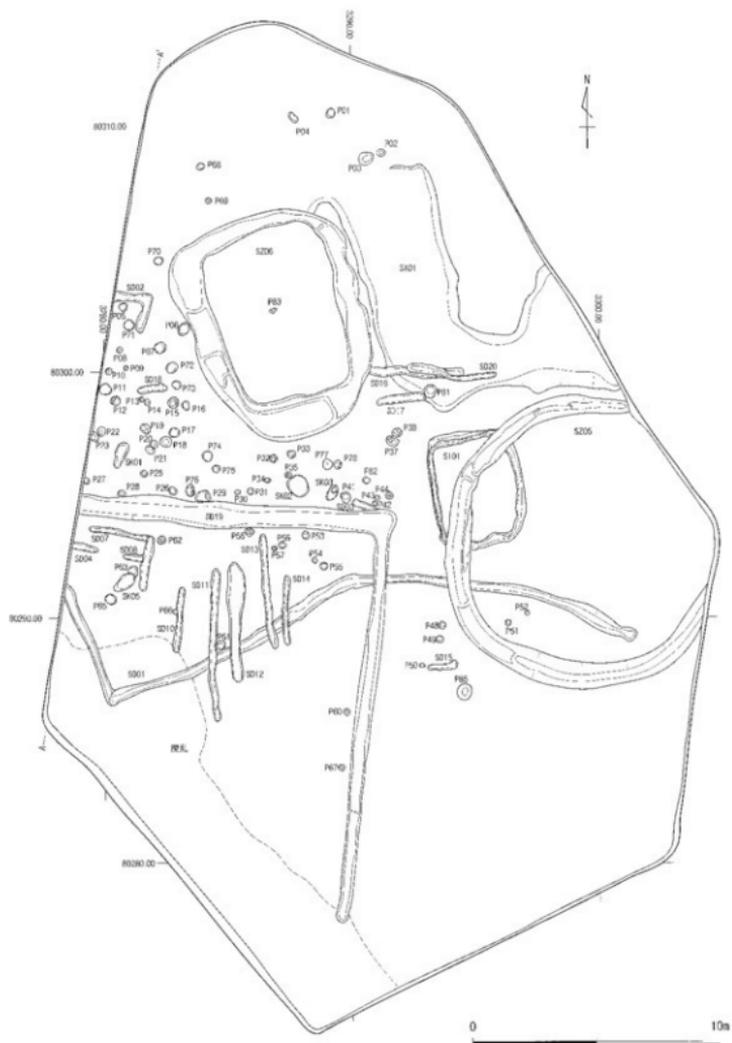
③竪穴建物

SI01（第59～61図） 調査区中央やや東側で検出した。地山面で黒褐色の長方形プランを確認した。SZ05に一部破壊されているが、ほぼ全容を把握できる。SZ05の調査終了後に精査した。長軸約4.8m、短軸約3.7mで、床面には幅15cm、深さ5cm程度の壁溝が西側に半周めぐる。覆土は黒褐色土の単層である。覆土を除去すると砂質地山になり、縮まり具合も変化しなかったため、貼床は当初から存在しなかったと考えられる。同様に炬も確認されなかった。柱穴は、攪乱によりわかりにくかったが、精査を経て当初から存在しなかったことを確認した。遺物は覆土から満遍なく多量に出土し、図示できる遺物が最も多かった（第60・61図）。垂直分布をみると、遺構中央部で底面直上からの出土品が多いことがわかる。123のうち最も大きい破片と120は底面直上で並んで出土した。124は底面直上で逆位で潰れたように出土した（第61図）。

④溝（第52・53図）

18条を地山面で検出した。SD02～18・20は畝間の溝と思われる。軸を南北方向にもつ一群（百塚住吉遺跡A地区の第Ⅱ群に相当する）と東西方向にもつ一群（同第Ⅰ群に相当する）に大別できる。長さは長いもので6m、短いもので1m、幅は20cm～50cm、深さは深いもので15cm程度である。これらは、重複関係から後述するSD01より新しく、平成18年度調査で確認された遺構のなかでは最も新しいと考えられる。重複関係から、須臾器が多数出土したSD19以降に耕作された畑の畝間の溝と判断できる。

SD01（第62～64図） 調査区を東西に蛇行し、西側で北西に向けて直角に屈曲する。調査区西壁の外側に続いていく。重複関係から、SZ05・SD19より古いことがわかる。全長27.6mで、最大幅

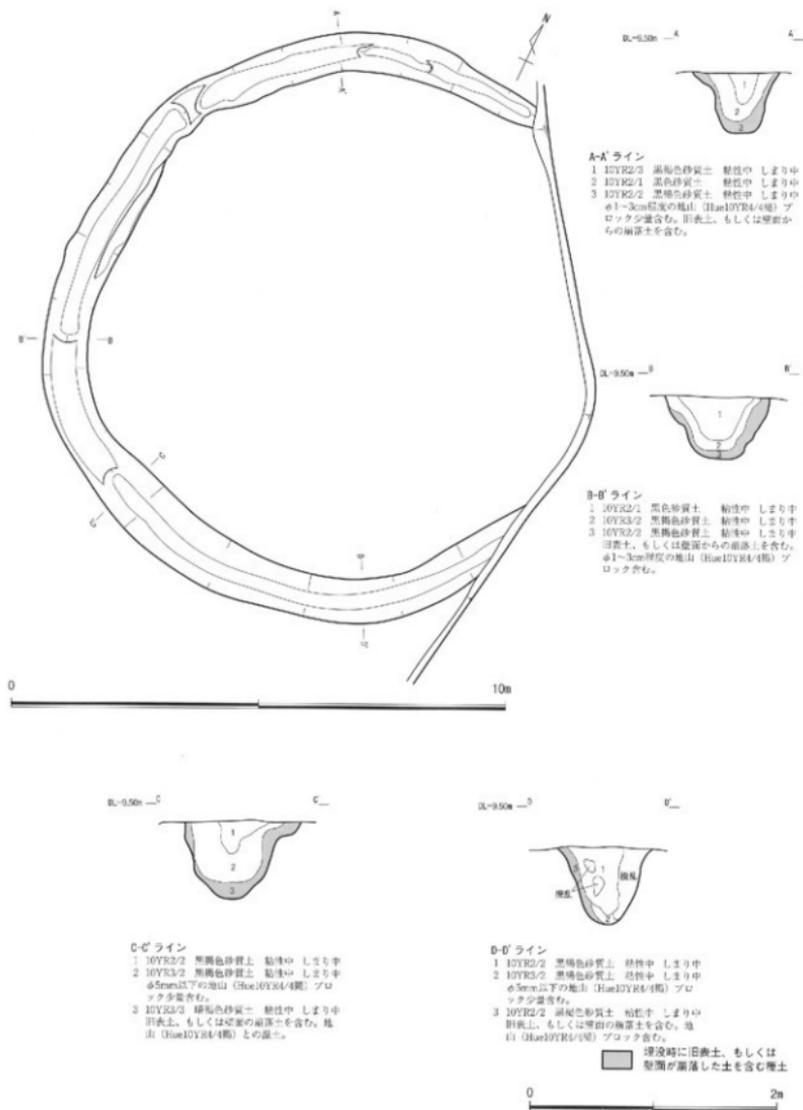


*SD03は、平面図ではSD19より古いことになっているが、実態としてはSD19より新しい。
SD19との重複部分の上・下層が未測量のため、本図の表層とした。

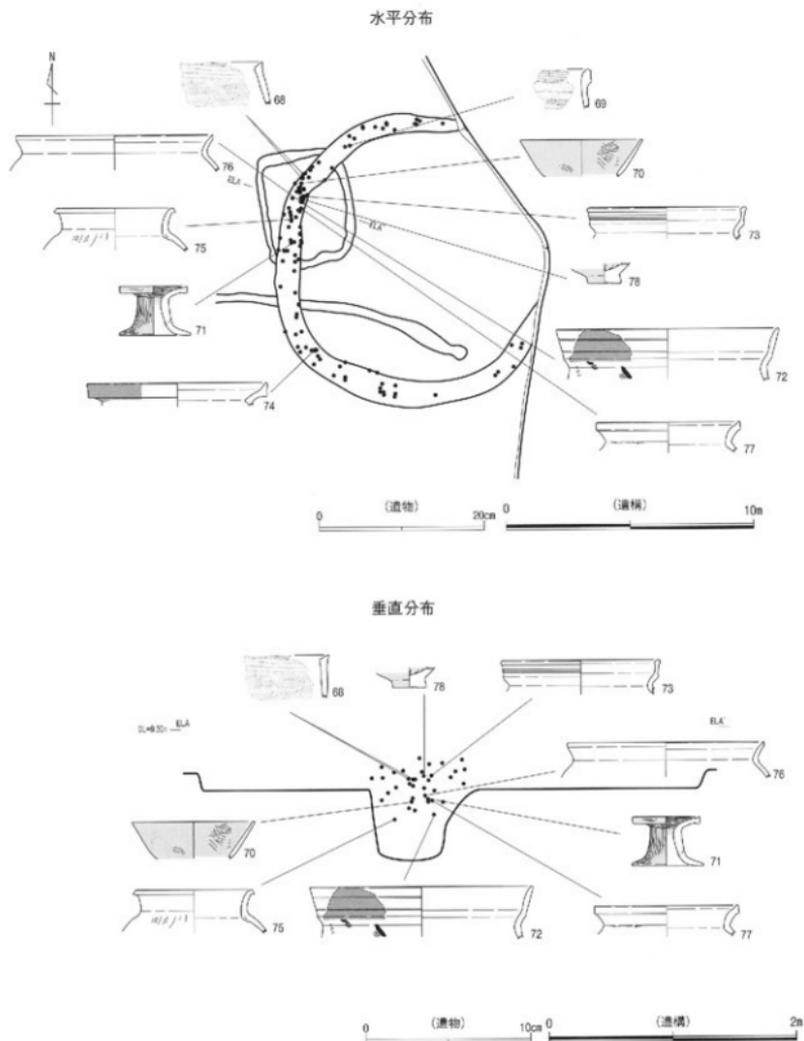
第52図 遺構全体図



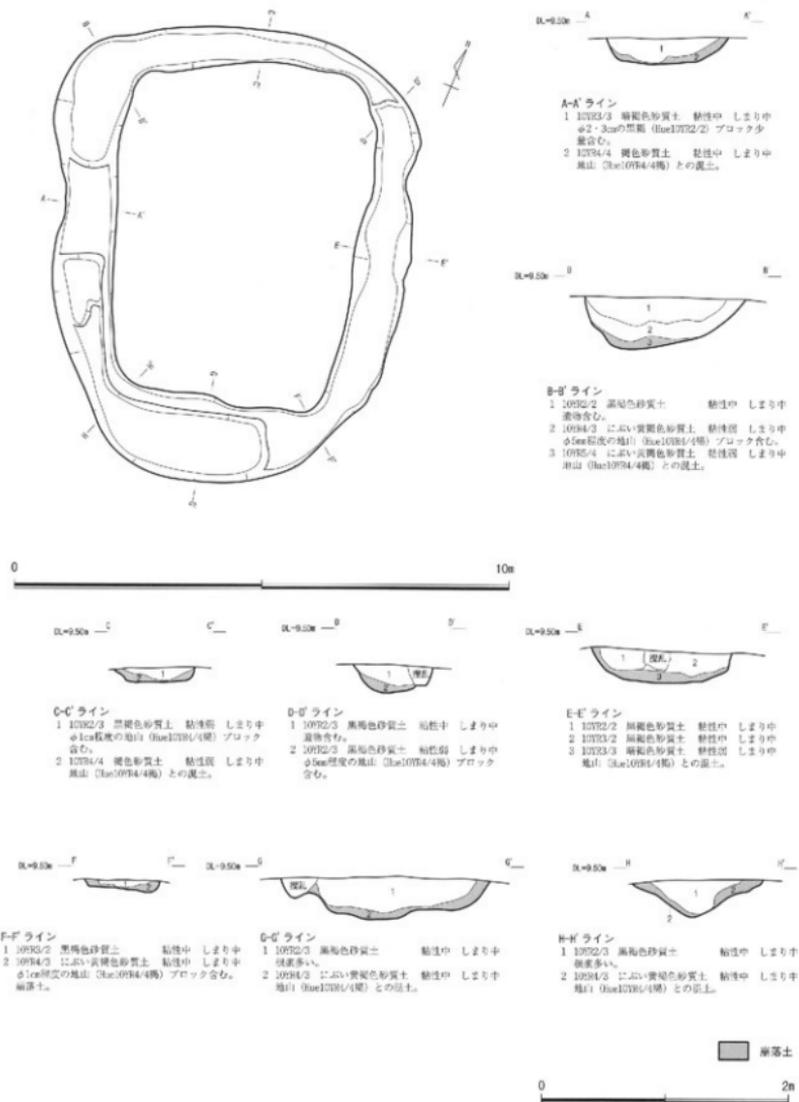
第54図 SZ05・06等高線図



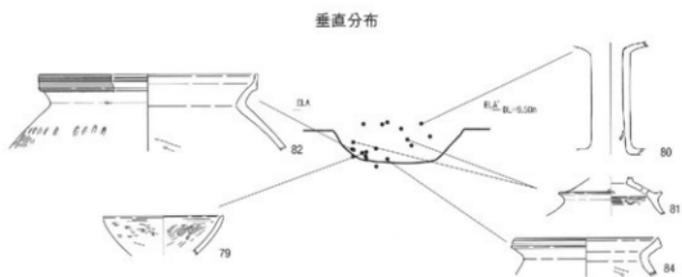
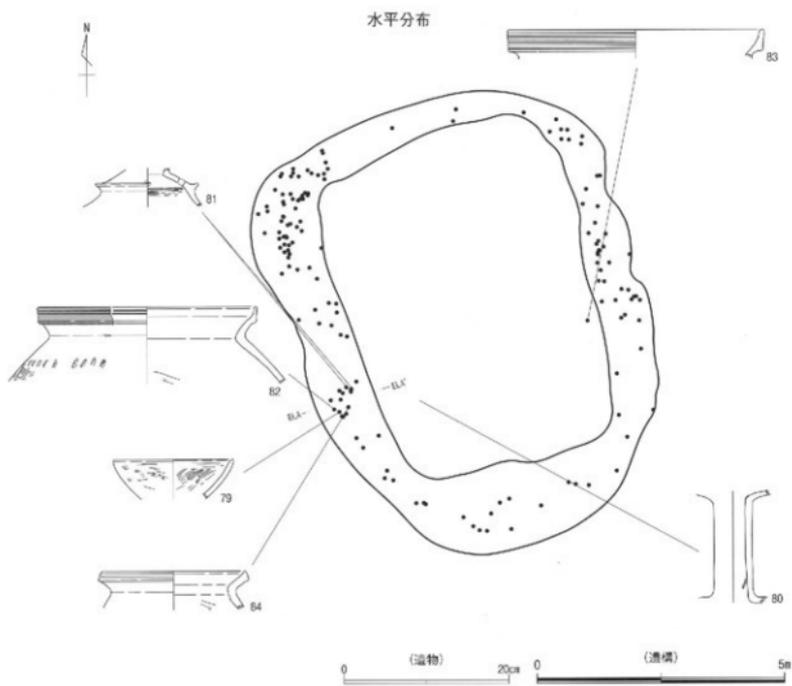
第55図 SZ05平面図・断面図



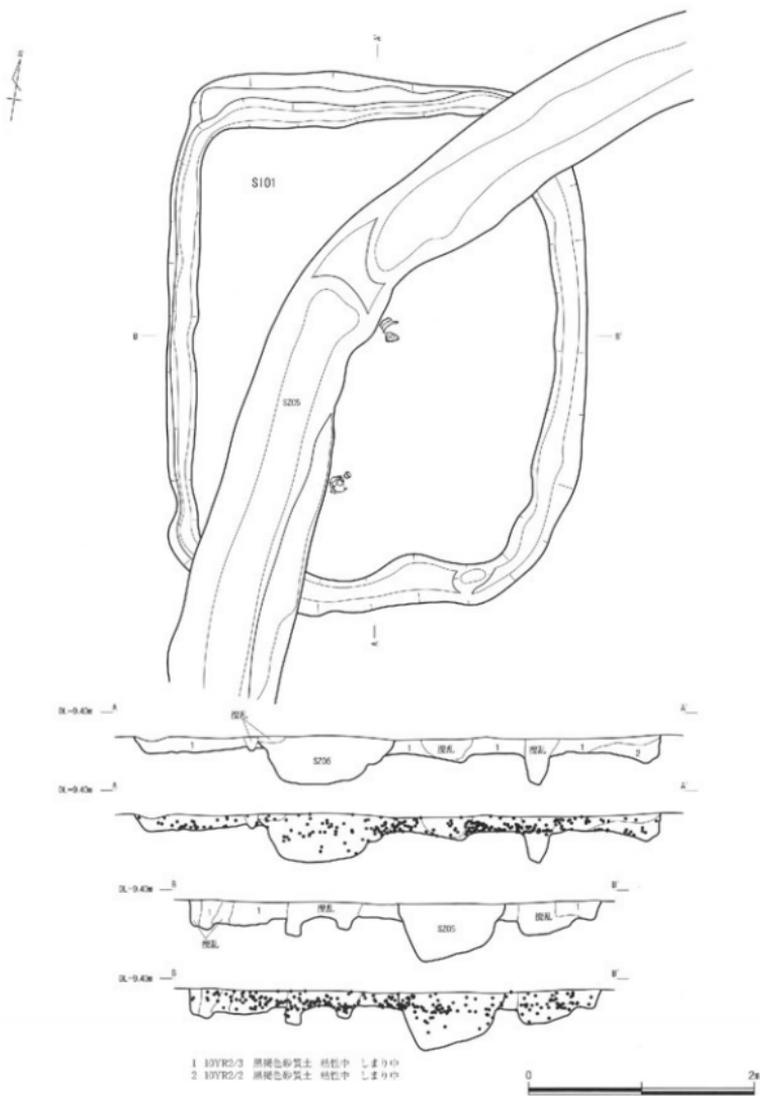
第56図 SZ05遺物出土状態



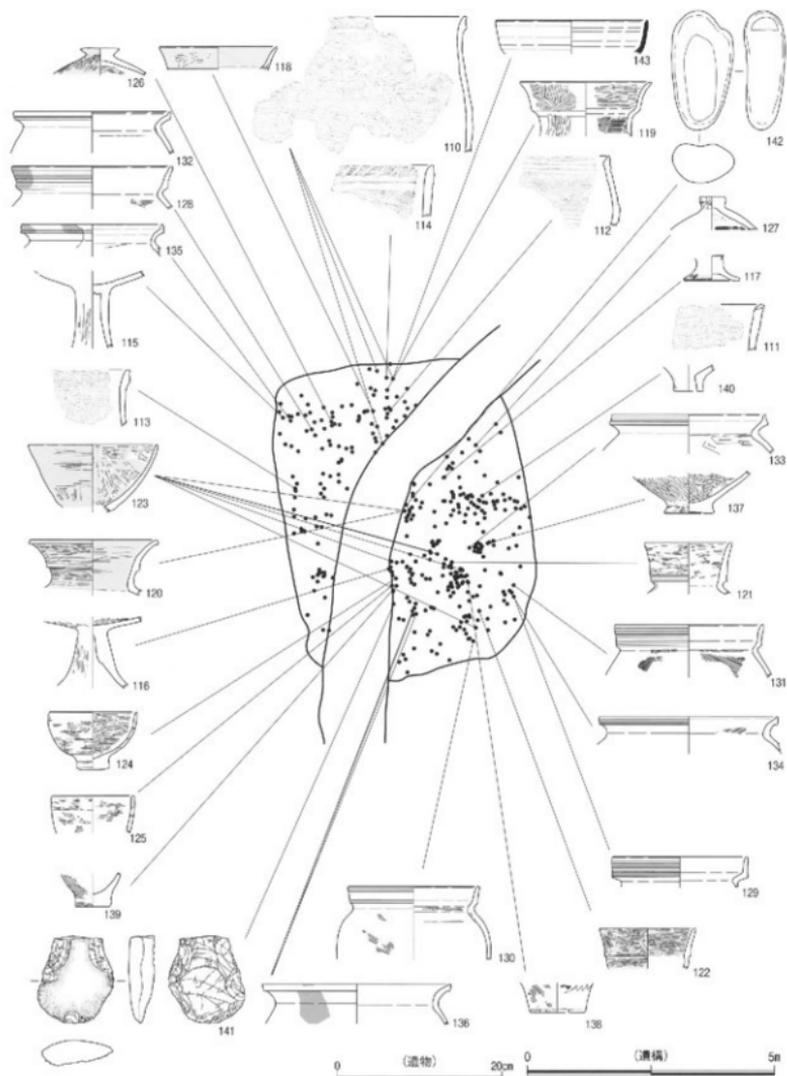
第57図 SZ06平面図・断面図



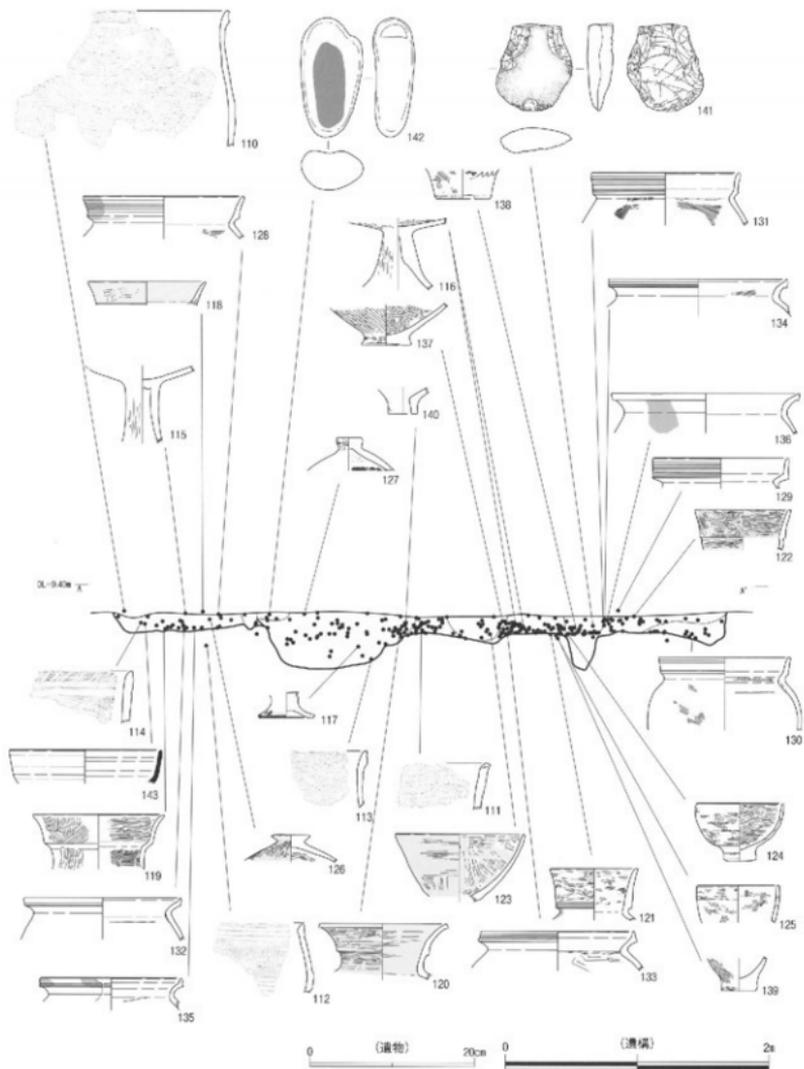
第58図 SZ06遺物出土状態



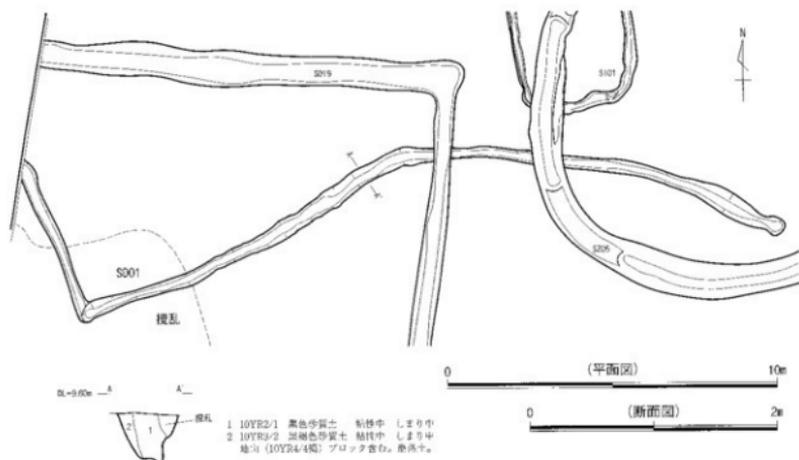
第59図 S101平面図・断面図



第60図 S101遺物出土状態（水平分布）



第61図 SI01遺物出土状態(垂直分布)



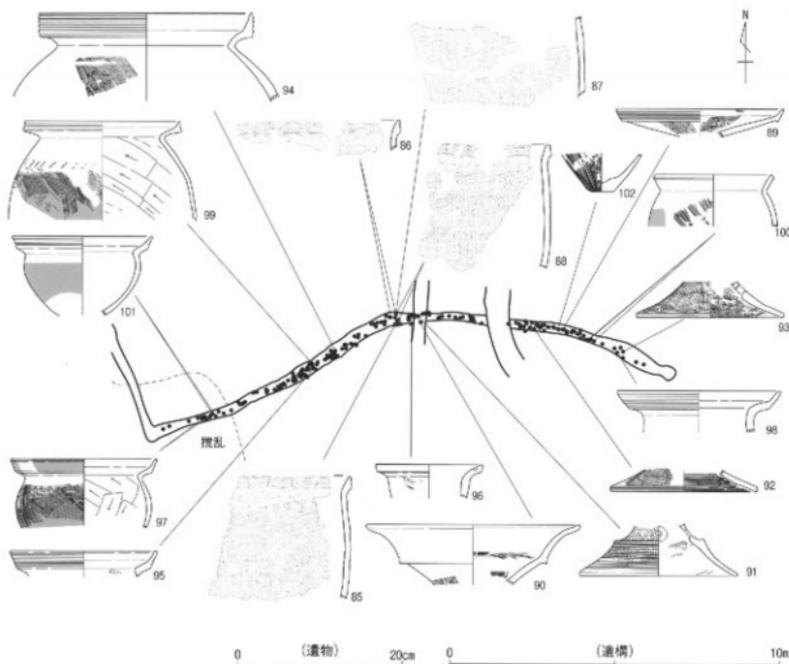
第62図 SD01平面図・断面図

63cm、最大深は40cmである。覆土は遺物包含層（Ⅱ層）起源の黒褐色土（単層）だが、両壁面付近には地山崩落土がブロック状に含まれている。大形の破片を含む多量の土器が出土した（第63・64図）。壁面に貼り付くように85・86・87・88が出土した。90は溝中央部分において逆位で出土した。しかし、遺構底面から浮いていたため、後世の混入遺物と考えられる。

SD19（第65・66図） 調査区南西部の地山面で黒褐色のプランを検出した。重複関係から、畝間の溝群よりも古いことがわかる。平面形はL字形を呈し、調査区西壁の外側に続く。全長30m弱で、最大幅1m、最大深は25cmである。覆土は遺物包含層（Ⅱ層）起源と考えられる黒褐色土の単層で、下部に地山崩落土をブロック状に含む。検出当初は古墳の周溝と想定して調査したが、須恵器等の古代遺物が多く出土したため、古墳ではなく、古代の溝と判断した。遺物は偏りなく出土している。重複関係から、SD01より新しいことがわかる。SD01からの混入遺物が一部紛れ込んでいると考えられる。最新の遺物としては3個体出土した7～9世紀の須恵器（完形）があるものの、底面直上からの出土遺物はない（第66図）。

⑤溝状遺構

SX01（第67・68図） 調査区北東部で検出した。地山面でL字形のプランを確認した。覆土は他遺構と同じ黒褐色で、細砂～シルトであった。SI01と近接していたため、竪穴建物が重複したものではないかと考えて土層観察用バルトを残して調査を進めた。その結果、SZ06の東側から南へと向かい、SZ05の北側を東に向かって大きく蛇行し、調査区外東側の河岸段丘端へと流れる溝状遺構と判明した。SZ06に沿う部分の最大幅が2.5m弱、屈曲部分では1m強に狭くなるが、調査区東側に向けてラッパ状に広がる。SZ06横部分が最も深く、40cmである。覆土は上層（遺物包含層（Ⅱ層）起源の黒褐色細砂）と下層（漸移層と地山の混土）に大別され、遺物は主に上層からまとまって出土した。平面分布をみると、SZ06東側で出土量が多いものの、SZ05北側では遺物は出土していないことがわかる。



第63図 SD01遺物出土状態(1)

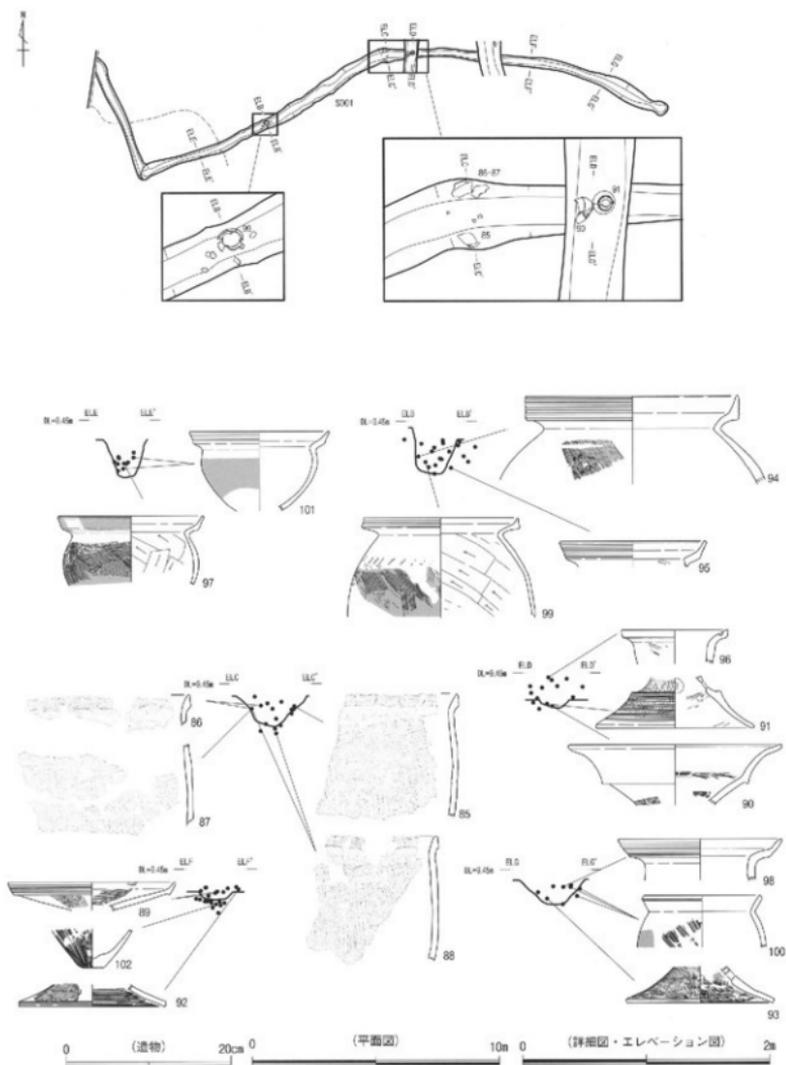
(第68図)。ローリングによって破片端部が摩滅している土器が多い。それらは流れ込みと考えられる。

なお、SX01の調査終了後、遺構底面から淡黄色の粗い砂粒が湧き出るように地山表面に出てきたことについて、監督員から噴砂ではないかとの指摘を受け、1m×2mで深さ1mのテストピットによる補足調査を行った。その結果、噴砂の痕跡はみられなかった。

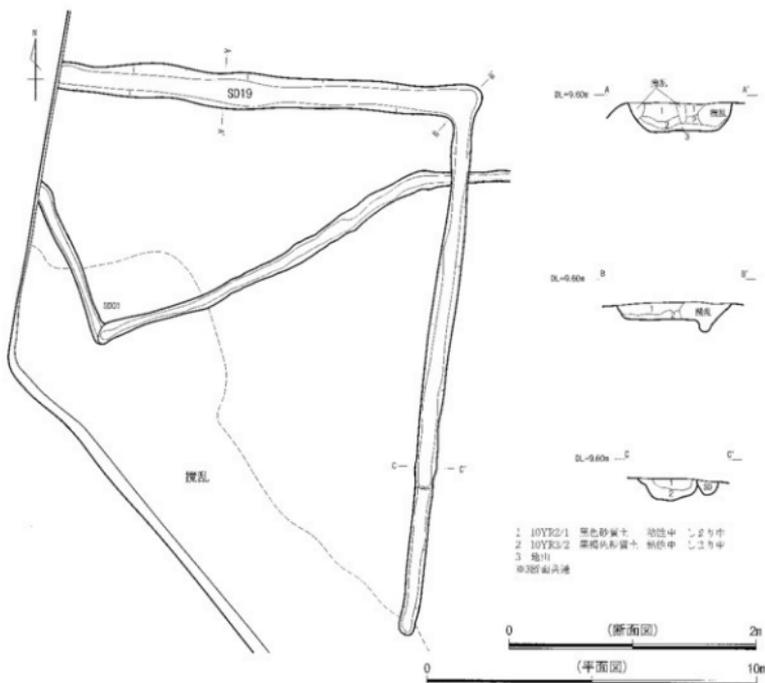
(2)出土遺物の概要

SZ05 (第69図) 68は縄文土器である。精製土器で、口縁部が内傾するように面取りされている。口縁部外面に3条の沈線がめぐる。胴部が張り出し、口縁部が内傾する器形と考えられる。69も縄文土器である。粗製土器で、口縁部外面に絡条体条痕による押しきが施され、下位に凹線が2条めぐる。部分破片のため不明瞭だが、凹線以外にも絡条体条痕が少し確認できる。70はやや小型の高坏の坏部で、赤色塗彩されている。内外面ともミガキ調整で丁寧に仕上げている。71はほぼ完形の小型器台で、外面と上面も赤色塗彩されている。72～77は甕の口縁部である。72・73は有段口縁に擬凹線を施す。甕の口縁部形態は有段口縁部、有段部分の長いもの短いもの、直立するようなものと多岐に及ぶため、時間幅は広いと考えられる。78は壺もしくは甕の底部で内外面とも赤色塗彩されている。

SZ06 (第69図) 79は高坏の坏部で内湾する。内外面ともミガキ調整で丁寧に仕上げている。口



第64図 SD01遺物出土状態(2)

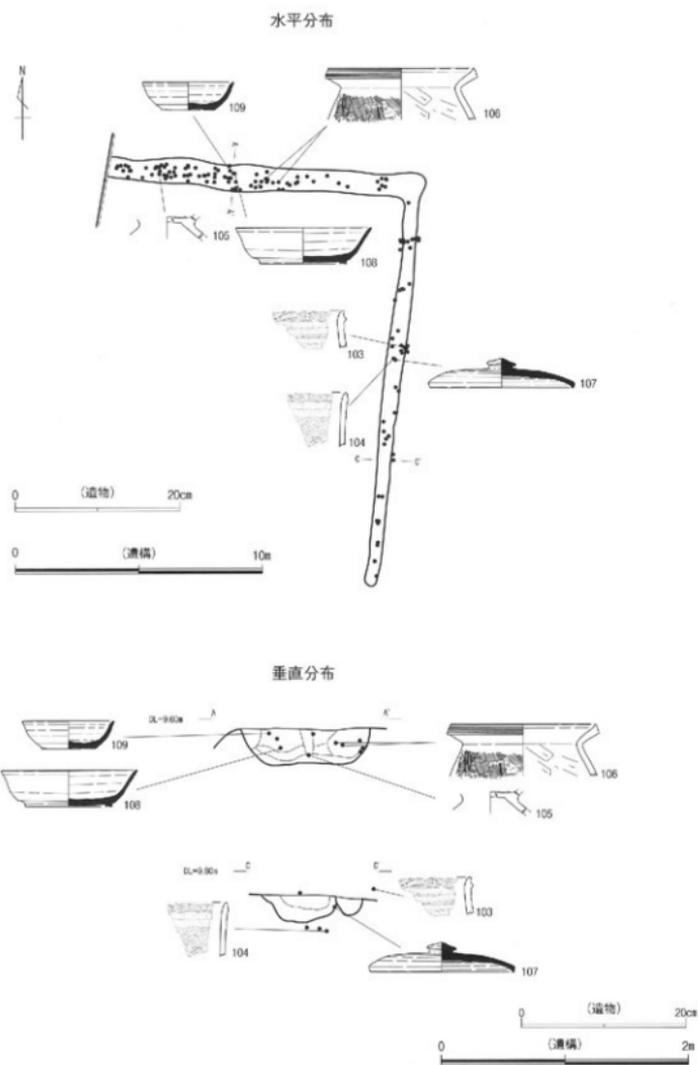


第65図 SD19平面図・断面図

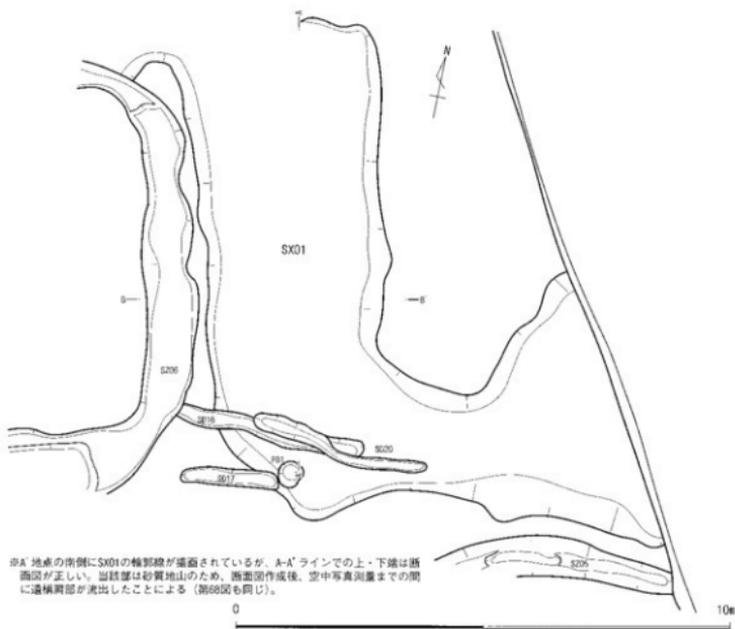
縁端部が断面三角形になるようにシャープに整形している。80は高坏の脚柱部で棒状に伸びる。先端に粘土の剝離痕がみられる。81は高坏または器台の脚柱部で段を有する。段より上部で4方向に穿孔がある。82~84は甕の口縁部で、擬凹線が施される。大きさにばらつきがあり、口縁部形態にも差異がみられる。82の肩部にめぐる、糸痕施工工具による連続刺突は、一周完全には廻らない。

SD01 (第70・71号) 85・86・87・88は類似した縄文土器破片で、口縁部が外反する深鉢である。肥厚させた口縁部に、横位に絡糸体条痕を押し引きし、頸部に無文帯、もしくは凹線を1~2条施す。胴部は縦位と横位に交差するように絡糸体条痕を施している。89は器台で、口縁部を有段にして文様帯を作り、擬凹線を施している。90は坏部をほぼ完形に復元できる高坏で、口径は26cmと大型である。有段口縁で、接合部分には粘土を余らせて段を作っている。91~93は高坏もしくは器台の脚部である。91は段を形成し、段より下部には沈線を10数条施している。段より上部では4方向に穿孔がみられる。表面から穿孔されており、裏面には穿孔時の剝離痕がある。94~100は甕の口縁部で、有段口縁の段部には擬凹線を施している。大きさはばらつくものの、有段部の長さは一定である。96は外反した口縁部内面に器壁の半分程度まで穿孔している。101は鉢である。有段口縁部の作り、長さは甕と変わらないが、底部に向けて急激にすぼまる。

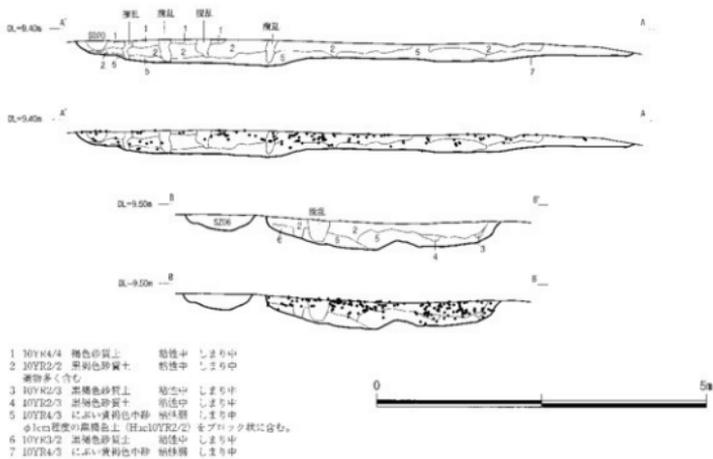
SD19 (第71号) 103・104は粗製の縄文土器の深鉢である。103は肥厚させて作った口縁部文様帯に刺突を施して、下位に凹線を4条施している。104は口縁部文様帯に絡糸体条痕を施し、下位に2



第66図 SD19遺物出土状態



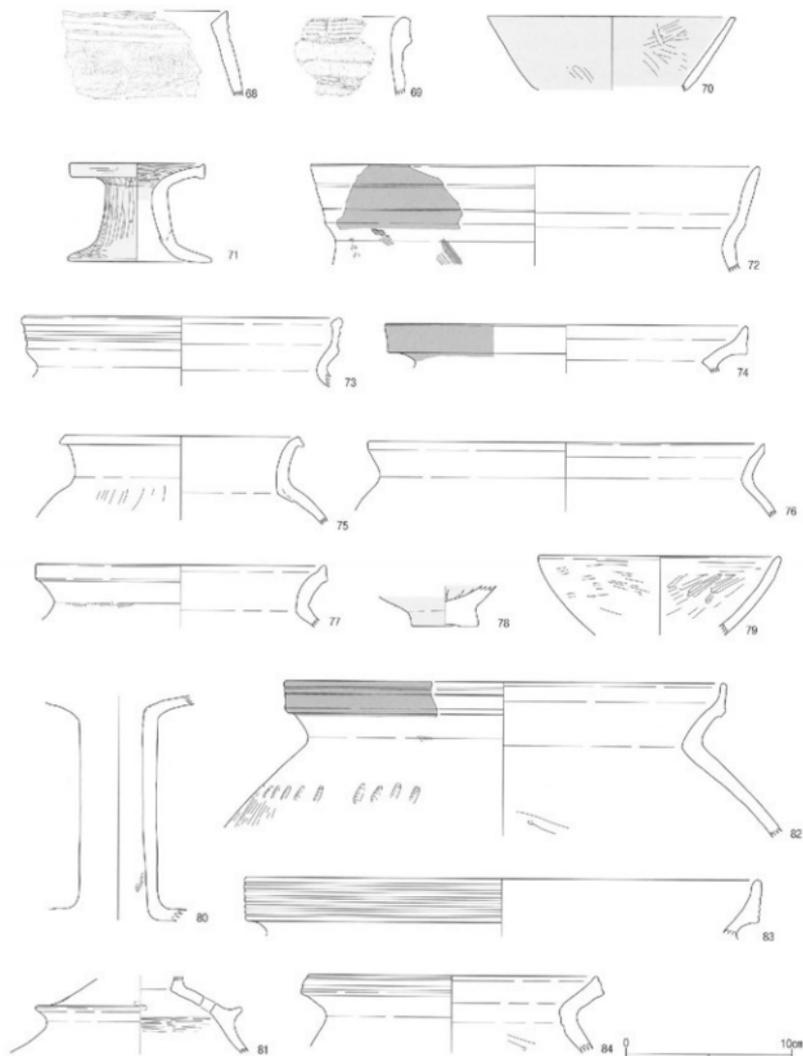
※A' 地点の南側にSX01の輪郭線が描画されているが、A-A'ラインでの上・下端は新断面図が正しい。当該部は砂質土山のため、断面図作成後、空中写真測量までの間に遺構崩壊が流出したことによる（第68図も同じ）。



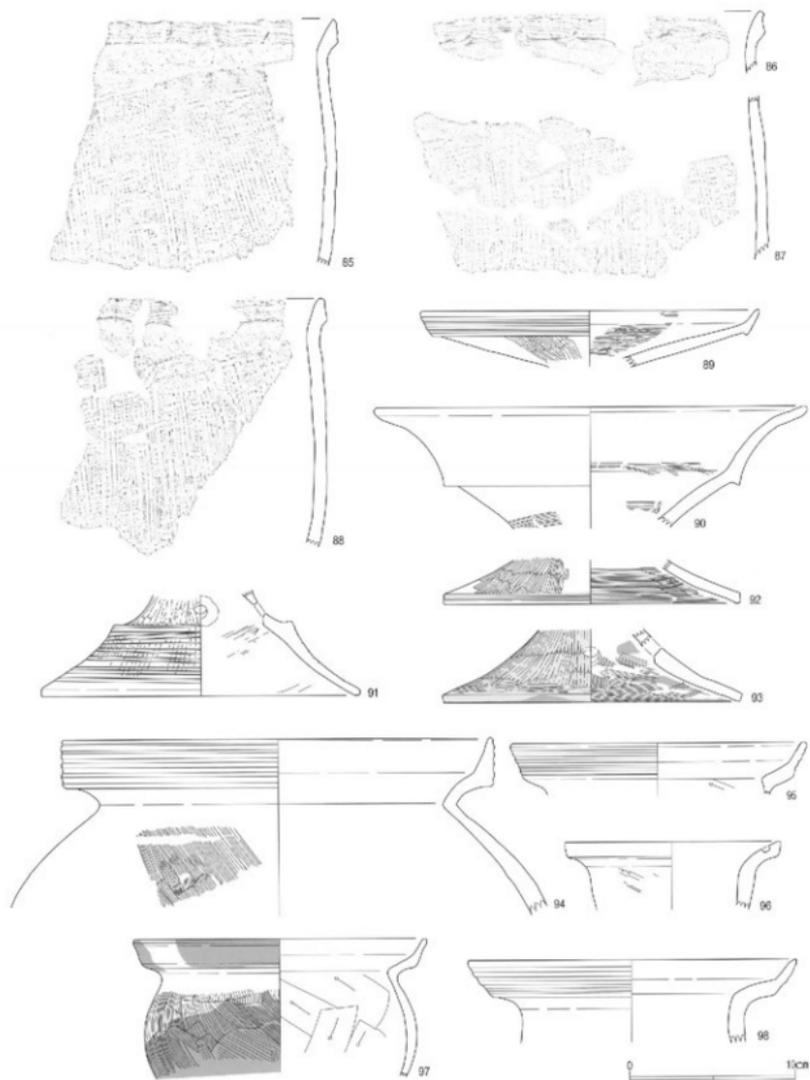
第67図 SX01平面図・断面図



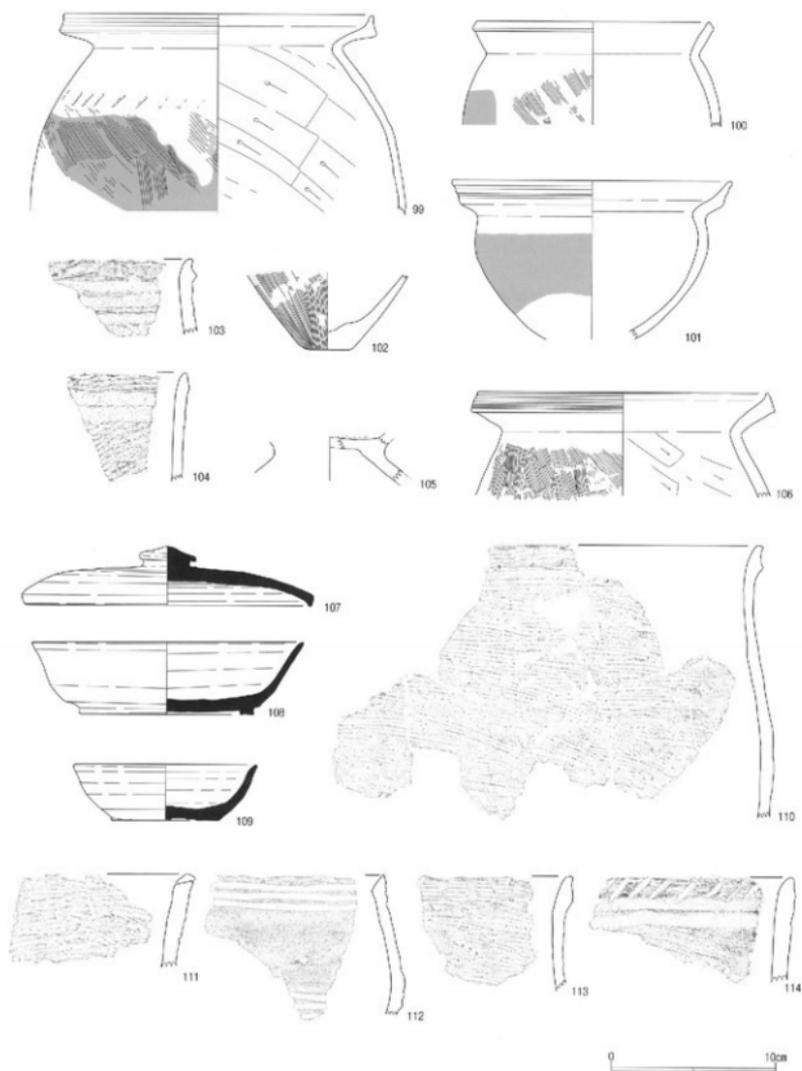
第68図 SX01遺物出土状態



第69図 出土遺物実測図(1) (68~78 : SZ05、79~84 : SZ06)



第70図 出土遺物実測図(2) (85~98:SD01)



第71図 出土遺物実測図(3) (99~102: SD01、103~109: SD19、110~114: SI01)

条の凹線、絡条体条痕を施している。105・106は弥生時代後期～古墳時代初期の範疇で捉えられる。105は高坏もしくは器台の坏部と脚部の接合部分で、やや幅広である。106は甕で、有段口縁には擬門線が施される。107は須恵器の蓋で、直径18cmと大きい。頂部には宝珠状の紐が付く。108は高台付の椀で、口径は16.5cmである。高台は貼り付けられており、底面には凹みがある。107と108は8世紀の遺物である。109は椀で、上げ底になっている。口縁内面を回転ナデで内傾するように調整している。9世紀の遺物と考えられる。

SI01 (第71～73図) 110～114は縄文土器の深鉢である。112は精製土器で、SZ05出土品(68)に類似する。胴部が張って口縁部が内傾する器形で、口縁端部が内傾するように面取りしている。口縁部と張り出し部に3条の沈線を施す。110・111・113・114は粗製土器である。110・113はSD01で出土した絡条体条痕で調整・施文する土器(85～88)に類似する。胴部は横位～斜位に調整している。111は口縁端部に、上からみると三角形になるような突起を有する。114は口縁部に斜位の連続刻みと2条の凹線を施す。

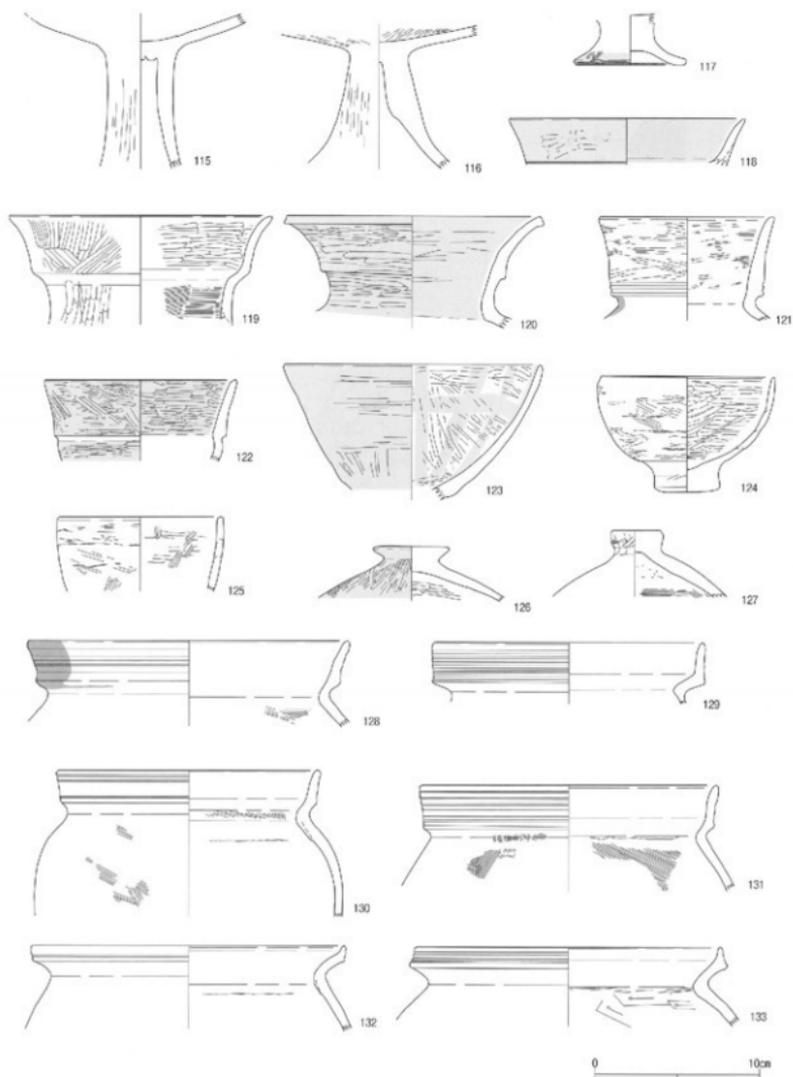
115・116は高坏の坏部下半～脚柱部の破片で、115は柱状に伸びるが、116は脚裾部に向けてラッパ状に開く。117は低脚高坏の脚部で、脚裾部は赤色塗彩されている。118～121は有段口縁壺の口縁部である。118は内外面ともに赤色塗彩されている。接合部分には円形刺突が施されており、粘土が接着しやすいようになっている。119は一部赤色塗彩されている。外面は縦位のミガキ調整、内面は横位のミガキ調整、ハケ調整で仕上げている。同一個体と考えられる破片が多数あるが、接合しなかった。120は内外面とも横位のミガキ調整後に赤色塗彩している。他の壺に比べて口縁部が大きく開く。121は頸部にスガが付着している。有段口縁の接合部分には2条の沈線を施す。口縁部は開かず、ほぼ直口する。122は有段口縁をもつ小壺である。内外面とも赤色塗彩されている。頸部の下位から急激にすぼまる。123は鉢または高坏と考えられる。内面は、口縁部付近は横位のミガキ調整、坏部中央より下位は斜位～縦位のミガキ調整である。外面は、口縁部付近は横位のミガキ、坏部下半は縦位のミガキで調整されている。外面は全面、内面には襷状に赤色塗彩されている。124は完形に復元できる。内面はミガキ調整で丁寧に仕上げられており、黒褐色を呈す。外面はミガキ調整されているが、粘土紐の単位がわかる接合痕を観察できる。125は124と同器種と考えられる。細かい縦位～斜位のミガキ調整が一部に認められる。126・127は蓋で、126の外面は赤色塗彩されている。

128～136は甕の口縁部である。有段口縁のものには数条の擬凹線が施される。128・135・136にはスガが付着している。137は壺または甕の底部で、ミガキ調整されている。底部との接合部分では工具によるあたり痕を観察できる。138は甕または壺の底部で、粘土紐を貼り付けて輪凸成形している。139はミニチュアの甕である。仕上げはミガキ調整による。140は瓶で、穿孔部分はナデ調整されている。

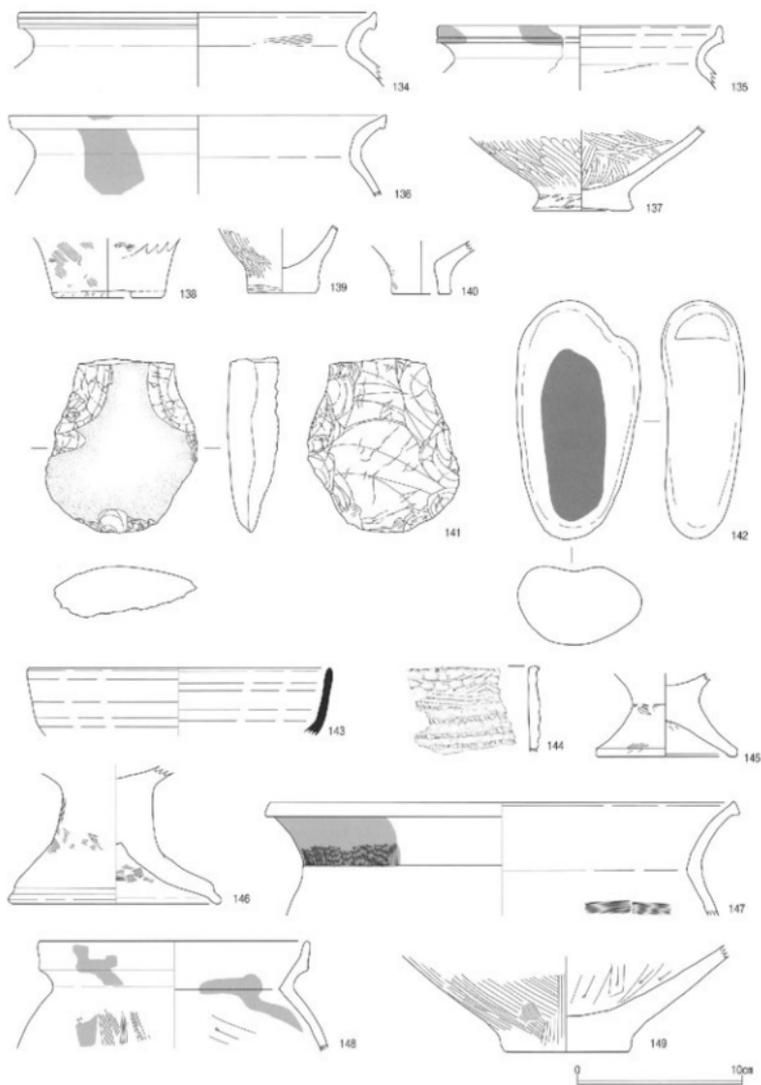
141は打製石斧である。基部側半分が欠損している。撻形で片面に自然面が残る。中央部に抉りを入れている。142は磨石で、片面に磨痕がみられる。120と123の大きい破片とともに堅穴建物(SI01)底面から出土した。143は須恵器小片である。攪乱により紛れ込んだ遺物と考えられる。

SX01 (第73図) 144は縄文土器である。破片資料のため全体像は不明だが、精製土器で口縁部上端から連続刺突、絡条体条痕、4条の凹線の順で施文されている。凹線間には縦位の絡条体条痕がみられる。145・146は高坏の脚部である。146は裾端部に沈線をもち、有段とする。147・148は甕の口縁部で両破片ともスガが付着している。149は甕または壺の底部で、内面をケズリ調整している。

遺物包含層(第74図) 150は縄文土器の深鉢である。口縁端部を肥厚させて外面に絡条体圧痕文を施す。口縁部文様帯より下位には凹線が回る。151は甕の口縁部で、有段口縁部には擬門線が4条めぐる。152は直口壺の口縁部で、頸部まで残る。内外面とも摩滅が激しいが、表面には一部ミガキ調整痕が認められる。内面調整は不明である。155は撻形の打製石斧である。中央部分を大きく剥離して括れ部を有する。先端部分の一部を欠く。両面に自然面が残る。154は敲石で、表裏面中央部と



第72図 出土遺物実測図(4) (115~133 : SI01)



第73図 出土遺物実測図(5) (134~143 : SI01、144~149 : SX01)



第74図 出土遺物実測図(6) (150～155：遺物包含層)

★成分分析実施試料 (第4章第4節)

側面に敲き痕が残る。153は須恵器の坏で、底部には須恵器片が多数溶着している。150～155は包含層出土遺物だが、いずれも地山面直上からは出土していない。

156は楕円形である。鉄滓は1点のみ出土した。長さ4.45cm、幅3.7cm、重さは29gである。本試料を対象として、金属学的構造観察と成分分析を行った(第4章第4節)。(下島)

第11表 遺物観察表(1)

実測図番号	器種	大きさ ()内は復元	色調	焼成・胎土	器形・成形・文様・調整の特徴	備考
68	縄文土器 鉢形		に灰い焼 (7.5YR5/3-10YR5/4)	焼成 普通 胎土 砂粒少ない	1.縁部に3本の沈線。内外面ともナガ、ミダギ。	
69	縄文土器 深鉢		明灰焼 (10YR7/6)	焼成 普通 胎土 砂粒多い	口縁部と内面に線条体条痕。外側に2本の凹線。	
70	高坏	口径 15.0cm	赤灰 赤 (10YR5/3) 明灰 黄 (5YR7/8)	焼成 灰 胎土 砂粒少ない	ハの字状に開く1指部をもつ。内外ともにミダギと赤色。	残存 口縁部 1/20-1/10ほど下
71	器 口(ニチナフ)	口径 (8.2cm) 底径 18.8cm	赤灰 赤 (10YR5/6) 明灰 黄 (5YR7/8)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	縁部は外反する。外側縁部一帯はミダギ。内側縁部はミダギ。内面と内面下部に赤色。	残存 口縁部 一帯部
72	器	口径 (27.0cm)	赤い黄緑 (10YR7/4) 黄 黄 (7.5YR6/6)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	有段口縁部に2本の縦凹線。外面ナガ、斜位ハケ。内面ナガ。外面にスス付着。	残存 口縁部 1/24-1/10ほど上
73	器	口径 (19.0cm)	黄 (5YR7/6)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	有段口縁部に3本の縦凹線。内外面ともナガ。	残存 口縁部 1/7
74	器	口径 (22.0cm)	黄緑 (7.5YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	外周スス付着。内外面ともナガ。	残存 口縁部 1/7
75	器または 器	口径 (14.0cm)	黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	外面ナガ、斜位ハケ。内面ナガ、粘土垂れ。	残存 口縁部 1/4
76	器	口径 (24.0cm)	黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	内外面ともナガ。	残存 口縁部 1/13
77	器	口径 (17.4cm)	黄緑 (10YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	外面ナガ、斜位ハケ。内面ナガ。	残存 口縁部 1/7
78	器または 器	底径4.0cm	赤形 赤 (10YR5/8)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	内外面とも赤形。内面ユビシマエ。外・裏面ナガ、上打リ。	残存 底部
79	高坏	口径 14.6cm	黄 (7.5YR7/6) 黄 黄 (7.5YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	内面滑する状態をもつ。外周縁位ハケと黒灰。内面縁位一帯はミダギ。	残存 口縁部 1/8
80	高坏	高径約4.8cm	黄 (7.5YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	ほぼ縦線的にのびる脚柱をもつ。外周縁部は黄い。内面ナガと粘土垂れ。上黒灰。	残存 口縁部 1/2
81	高坏または 器台	口径1.0cm	黄緑 (10YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	4孔の円孔を穿孔する。内面縁位ハケ。内外ともに黒灰帯をしいが、赤面ナガ。	残存 口縁部 1/2
82	器	口径 (26.0cm)	黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	有段口縁部に2本の縦凹線・スス付着。外周ナガ、斜位ハケ。内面ナガとケズリ。	残存 口縁部 2/5
83	器	口径 (31.0cm)	黄 (5YR7/6-5YR7/8) 黄 黄 (10YR6/1)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	有段口縁部に6本の縦凹線。内外面ともナガ。	残存 口縁部 1/2
84	器	口径 (17.4cm)	黄緑 (10YR8/3) 黄 黄 (10YR6/1)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	有段口縁部に2本の縦凹線・黒灰。外面ナガ。内面ナガと斜位ケズリ。	残存 口縁部 1/8
85	縄文土器 深鉢		黄 黄 (10YR8/4) 黄 黄 (7.5YR6/6)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	口縁部は線条体条痕。外周縁部縁位に線条体条痕。内面ナガと線条体条痕。	
86	縄文土器 深鉢		黄 黄 (7.5YR8/2-7.5YR6/4) 黄 黄 (10YR8/2)	焼成 普通 胎土 砂粒少ない	口縁部は線条体条痕。口縁部文様帯以下に1本の凹線。外面ナガと赤色条痕。内面ナガ。	
87	縄文土器 深鉢		黄 黄 (7.5YR4/3) 黄 黄 (5YR6/6)	焼成 普通 胎土 砂粒少ない	外周縁位縁位に線条体条痕。内面ナガ。	
88	縄文土器 深鉢		黄 黄 (7.5YR5/4) 黄 黄 (7.5YR6/6)	焼成 普通 胎土 砂粒少ない	外周縁位縁位に線条体条痕。内面ナガ。	
89	器台	口径 (29.4cm)	黄 (7.5YR6/6)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	1.縁部に4本の縦凹線。外周縁位一帯はミダギ。内面内周縁位ミダギ。	残存 口縁部 1/18
90	高坏	口径 (26.0cm)	黄緑 (7.5YR8/4-7.5YR8/6)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	外反する口縁部をもつ。外面ナガと斜位ハケ。内面ナガと横位一帯はハケ。	残存 口縁部 1/3
91	高坏または 器台	底径 (19.2cm) 口径10.9cm	黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	縁部4孔の円孔を穿孔する。縁部は外反して、ヘラミダギ状13本の沈線。外周縁位ヘラミダギ。内面ハケ後ナガ。	残存 底部
92	高坏または 器台	底径 (18.0cm)	に灰い黄緑 (10YR7/4)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	縁部に沈線もしくはヘラミダギ。外面縁位ミダギ。内面縁部ハケ。	残存 底部1/4
93	高坏または 器台	底径 (18.0cm) 口径 11.0cm	赤い黄緑一帯 (10YR6/4-10YR2/1) 黄 黄 (7.5YR7/6)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	縁部4孔の円孔を穿孔する。外面縁位ハケと赤形。内面縁位ハケとスス付着。	残存 底部1/4
94	器	口径 (26.0cm)	黄 黄 (7.5YR8/4-5YR6/6) 黄 黄 (7.5YR6/6-7.5YR5/2)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	有段口縁部に5本の縦凹線。外面斜位ハケ後ナガ。内面厚灰のため不明だが、ナガ。	残存 口縁部 1/9
95	器	口径 (17.8cm)	黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	有段口縁部に5本の縦凹線。外面ナガ。内面ナガとケズリ。	残存 口縁部 1/6
96	器	口径 (13.0cm) 口径0.5cm	明灰焼 (10YR7/6)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	外面斜位ハケ後ナガ。内外面とも厚灰者しい。内面から器底の半分程度まで穿孔する。	残存 口縁部 1/4
97	器	口径 (17.6cm)	黄 黄 (7.5YR8/3) 赤い黄緑 (10YR7/3)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	有段口縁部にスス付着。外面斜位ハケ後ナガ。スス条痕。内面ナガとケズリ。	残存 口縁部 1/5
98	器	口径 (20.0cm)	黄 (7.5YR6/6)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	有段口縁部に4本の縦凹線。内外面とも厚灰者しいが、ナガ。	残存 口縁部 1/2
99	器	口径18.8cm	黄 黄 (7.5YR7/6) 赤い黄緑 (7.5YR7/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	有段口縁部に3本の縦凹線。外面ナガと斜位ハケ。中央部。内面ナガとケズリ。外面にスス付着。	残存 口縁部 一帯部
100	器	口径 (14.2cm)	赤い黄緑 (10YR5/4) 黄 (7.5YR6/6)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	外面斜位ハケとスス付着。内面厚灰のため不明だが、ナガ。	残存 口縁部 2/3
101	器	口径 (17.0cm)	赤い黄緑 (10YR6/4) 黄 黄 (7.5YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	1.縁部に2本の縦凹線。外面ナガとスス付着。内面ナガと赤形。	残存 口縁部 1/4 脚部3/3
102	器	底径 (8.2cm)	赤い黄緑 (10YR4/3) 黄 (7.5YR7/6)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	器台内面滑する状態をもつ。外周縁位ハケと黒灰。スス付着。内周縁部厚しい。器底ハケと黒灰。	残存 底部
103	縄文土器 深鉢		黄 黄 (7.5YR7/6) 黄 黄 (7.5YR7/4)	焼成 普通 胎土 砂粒少ない	1.縁部に2本の縦凹線。外周縁部縁位。内面ナガ。	
104	縄文土器 深鉢		黄 黄 (10YR5/2) 赤い黄緑 (10YR4/3)	焼成 普通 胎土 砂粒少ない	口縁部に線条体条痕。外周縁部縁位と線条体条痕。内面ナガ。	
105	高坏または 器台		黄 黄 (7.5YR8/6) 赤い黄緑 (10YR7/2)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	外面ナガ。内面ナガ。	残存 口縁部 1/2
106	器	口径 (17.6cm)	黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	口縁部に2本の縦凹線。外面ナガと斜位ハケ。内面ナガとケズリ。	残存 口縁部 2/5

第12表 遺物観察表(2)

実測図 番号	器種	大きさ ()内は単位	色調	焼成・胎土	器形・成形・文様・調整の特徴	備考
107	坏蓋	1径(17.6cm)	黄 黄灰(2.5Y6/1) 黄 黄黒(2.5Y7/2)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横み部ナシ。外蓋同様にヘラズリノ加工ナシ。内蓋も同様ナシ。	残存 口縁部 2/5
108	高台付鉢	口径(16.6cm)	黄 黄灰(2.5Y7/2)	焼成 普通 胎土 砂粒少ない	内外両とも同様なナシ。底面へり寄り部。	残存 口縁部 2/5
109	椀	口径(11.2cm) 底径(6.6cm)	黄 黄灰黒(2.5Y8/2) 黄 灰白-黄黒(10YR7/1~10YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	横成 不良 胎土 内外両とも同様なナシ。底面へり寄り部。	残存 口縁部 1/8 底面2/3
110	縄文土器 深鉢		黄 灰黄(2.5Y8/2) 黄 灰白-黄黒(10YR7/1~10YR8/3) 黄 黄灰黒-黄灰(10YR8/4~2.5Y8/4.1)	焼成 普通 胎土 砂粒含む	外蓋同様な体長系。内蓋ナシ。	
111	縄文土器 深鉢		黄 黄灰(2.5Y8/1) 黄 灰白-黄黒(10YR8/2)	焼成 普通 胎土 砂粒少ない	外蓋同様な体長系。内蓋ナシ。口縁部に三角形の刺突。	
112	縄文土器 鉢または深鉢		黄 灰黄-黄(2.5Y8/1~2.5Y8/2) 黄 灰白-黄黒(7.5Y8/3~10YR8/2)	焼成 普通 胎土 砂粒少ない	口縁部に3本の比喩。外側比喩3本とスス付。内蓋ナシ。	
113	縄文土器 深鉢		黄 黒黄-灰白-黄黒(10YR8/2~10YR8/3) 黄 灰白-黄黒(10YR7/4)	焼成 普通 胎土 砂粒含む	外口縁部体長系。内蓋ナシ。	
114	縄文土器 深鉢		黄 黄灰(2.5Y8/3) 黄 灰黄-黄灰(2.5YR6/2~2.5YR8/3)	焼成 普通 胎土 砂粒多い	1径部に閉。外蓋同様な体長系。内蓋ミギキとナシ。	
115	高坪	口径(11.2cm)	黄 黄灰(2.5Y8/1)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	1径部は内溝して、脚部はやや外反する。外蓋同様な体長系。内蓋ナシ。	残存 坏下部 -残片部
116	高坪	口径(11.2cm)	黄 黄灰(2.5Y8/1)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	脚部はハの字状に外反する。外蓋同様な体長系。内蓋ナシ。	残存 坏下部 -残片部
117	高坪	口径16.6cm	赤影 赤(5Y7/5) 赤影 赤(10YR5/8)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	脚部はハの字状に外反する。外蓋同様な体長系。内蓋ナシ。	残存 脚部 -残片部
118	壺	口径(14.4cm)	赤影 赤(10YR5/8) 赤影 黄(7.5YR7/6)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	横成 良好 胎土 縦やかに外反する1径部をもつ。外蓋同様な体長系と1本の比喩。内蓋ミギキとナシ。	残存 1径部 1/8
119	甕	口径(16.0cm)	黄 黄(7.5Y7/6~5YR7/8)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	1径部は外反する。外蓋ナシと縦成-斜位ミギキ。内蓋同様な体長系とナシ。ナシ。	残存 口縁部 1/5
120	甕	口径(13.6cm)	赤影 赤(10YR5/8)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	ハの字状に外反する口縁部をもつ。内外両とも横成ミギキと赤影。	残存 口縁部 1/4-体部上下
121	甕	口径(8.6cm)	灰白-黄黒(10YR8/4~10YR7/4)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	1径部に斜位ミギキとナシ2本の比喩。外蓋ナシ。内蓋同様な体長系ナシ。	残存 口縁部 2/5
122	蓋または深鉢	口径(11.6cm)	赤影 赤(10YR5/8~10YR5/8) 赤影 黄(5YR7/6)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横ハの字状に外反する口縁部をもつ。外蓋同様な体長系と1本の比喩。内蓋同様な体長系とナシ。	残存 口縁部 1/3
123	蓋または高坪	口径(15.6cm)	黄 黄(10YR5/8) 黄 黄灰(7.5YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	横成 良好 胎土 横ハの字状に外反する口縁部をもつ。外蓋同様な体長系と1本の比喩。内蓋同様な体長系とナシ。	残存 1径部 1/3
124	鉢	口径(10.3cm) 底径4.0cm	黄 黄灰黒-灰白-黄黒(10YR8/3~10YR7/3) 黄 灰白(10YR8/1)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	外口縁部ハの字状に外反する。内蓋同様な体長系ミギキ。	残存
125	鉢	口径(10.0cm)	黄 灰白(10YR8/1) 黄 黄灰(10YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	外口縁部ハの字状に外反する。外蓋同様な体長系ミギキとナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 口縁部 1/4
126	蓋	横み部径(4.6cm)	黄 黄(10YR5/8) 黄 黄灰(7.5YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	横成 良好 胎土 横ハの字状に外反する口縁部をもつ。外蓋同様な体長系と1本の比喩。内蓋同様な体長系とナシ。	残存 底面 1/3
127	蓋	横み部径(3.6cm)	黄 黄(7.5YR7/6)	焼成 普通 胎土 砂粒少ない	外蓋ナシ。縦成。内蓋同様な体長系。中央部閉おき。横成に縦成のためナシ。	残存 底面 1/8
128	鉢	口径(10.6cm)	黄 黄(7.5Y6/2) 黄 灰白-黄(7.5Y6/3)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。内蓋ナシ。	残存 口縁部 1/7
129	鉢	口径(16.4cm)	黄 黄(10YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。内蓋ナシ。	残存 1径部 1/6
130	甕	口径(16.0cm)	黄 灰白-黄(7.5YR7/3) 黄 灰白-黄(10YR8/4~7.5YR7/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 1径部 1/4
131	甕	口径(18.0cm)	黄 灰白(7.5YR8/3) 黄 灰(7.5YR7/6)	焼成 良好 胎土 砂粒含む	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 1径部 1/5
132	甕	口径(18.2cm)	黄 灰白-黄(10YR8/4) 黄 黄灰(10YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 口縁部 1/4
133	甕	口径(18.6cm)	黄 黄(7.5YR7/6~10YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 口縁部 1/5
134	甕	口径(21.8cm)	黄 黄(7.5YR7/6) 黄 灰白-黄(7.5YR7/4)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 口縁部 1/7
135	甕	口径(17.3cm)	黄 灰白-黄(7.5YR7/4) 黄 黄灰(10YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 口縁部 1/5
136	甕	口径(23.0cm)	黄 灰白-黄(10YR8/3) 黄 黄灰(7.5YR8/4)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 口縁部 1/5 底面1/5
137	蓋または底	直径(5.8cm)	黄 黄(7.5Y7/6)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 底面 1/2 下部
138	蓋または底	直径6.4cm	黄 黄灰(10YR8/4) 黄 黄(10YR6/1)	焼成 普通 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 底面
139	蓋または底	直径4.0cm	黄 黄(10YR7/1) 黄 灰白-黄(10YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 底面
140	甕	口径3.6cm	黄 灰白-黄(10YR6/1~10YR7/1) 黄 灰白-黄(10YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 底面
141	石斧	長さ10.7cm 最大幅2.8cm 重量341g	黄 黄(10YR8/3) 黄 黄(10YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 底面
142	石斧	長さ14.8cm 最大幅7.6cm 重量789g	黄 灰白-黄(10YR8/3) 黄 黄(10YR8/3)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 底面
143	坏または底	口径(18.6cm)	黄 灰白-黄(10YR8/3) 黄 黄(7.5YR8/4)	焼成 不良 胎土 砂粒少ない	横成 良好 胎土 横成に縦成に縦成。外蓋同様な体長系とナシ。外蓋同様な体長系とナシ。	残存 口縁部 1/20
144	縄文土器 深鉢		黄 灰白-黄(7.5YR8/4) 黄 黄(5YR6/8)	焼成 普通 胎土 砂粒含む	口縁部に横成。外蓋同様な体長系。内蓋同様な体長系とナシ。	

第13表 遺物観察表(3)

実測品 番号	器種	大きさ ()内は単位	色調	焼成・胎土	器形・成形・文様・調整の特徴	備考
145	高杯	口径 (8.6cm)	灰黄緑 (7.5YR8/4)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	胴部は八の字状に廣く、外面磨成のため調整不良、 工具痕を残す。内面磨成のため調整不明。残部割 裂ハケ。	残存 胴部
146	高杯	口径 (12.8cm)	緑～灰黄緑 (7.5YR7/6～7.5YR8/4)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	胴部は八の字状に再良し、端部が短く歪む。 外成縦筋一筋位ハケとナダ。内面磨成ハケとナダ。	残存 胴部
147	盥	口径 (16.4cm)	表 に深い黄緑一筋帯 (10YR6/4～10YR4/1) 裏 に深い黄緑 (10YR7/4)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	外面ナダと縦筋ハケ、脚部が歪しい。内面ナダと ケズリ。11線部、外面磨成、内面に入付磨。	残存 11線部 1/4
148	盥	口径 (28.4cm)	緑 (5YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	右接口縁をもつ。外面ナダと縦筋ハケ、スス付磨。 内面ナダと横筋ハケ。	残存 11線部 1/10
149	裏または 壺	口径 (7.8cm)	表 に深い黄緑 (10YR7/4) 裏 浅黄緑 (10YR8/4)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	外面斜位ハケと縦筋。内面ケズリ。成面ハケと広 縁。	残存 底部
150	縄文土器 漆鉢		に深い黄緑 (10YR5/4～10YR7/4)	焼成 胎土 普通 砂粒少ない	口縁部に縁状体圧痕文。外面磨成1条。内面ナダ。	
151	甕	口径 (28.8cm)	表 に深い黄 (7.5YR5/3) 裏 灰黄緑	焼成 胎土 良好 砂粒少ない	有段11線部に4条の縦筋。内外面ともナダ。	残存 口縁部 1/12
152	底口蓋	口径 (10.4cm)	表 浅黄緑 (7.5YR8/3) 裏 黄 (7.5YR7/6)	焼成 胎土 良好 砂粒多い	11線部は八の字状に廣く、外面磨成歪しいが、粗 造ミダキを残す。内面磨成のため調整つかず。	残存 口縁部 2/5
153	杯	口径 (11.4cm)	表 灰黄緑 (10YR4/2) 裏 黄灰黄 (2.7Y5/2)	焼成 胎土 不良 砂粒多い	内外面とも同様にナダ。外面隆起と断面片トシの ような痕あり。断面産物が付着した上に縁が磨る。 ハケ痕り痕あり。	残存 口縁部 1/2 - 底部
154	磁石	最大径12.0cm・最大幅0.1cm 最大厚0.6cm・重量22.5g			断面に磨行痕。	
155	石斧	最大長11.9cm・最大幅7.5cm 最大厚2.6cm・重量272.5g			接部で刃部の形状に欠損のため不明。中央部には 少し鉄片が入る。	
156	流汗 道具29号	最大長4.6cm・最大幅3.7cm 重量29g			碗形	

第5項 百塚住吉B遺跡の調査成果

(1) 検出遺構の概要 (第75図)

検出した遺構は、溝2条 (SD01・02)、土坑5基 (SK01~05)、柱穴21基 (P01~21) である。ここでは各遺構、出土遺物について詳述する。

① 溝

SD01・02 調査区中央南西寄りで検出した。地山面で黒褐色のプランを確認した。2条とも南北軸で長さ4m、幅40cm程度である。底面は凸凹して安定せず、深いところで30cm程度である。出土遺物はない。

② 土坑

SK01~05 調査区南側で検出した。地山面でプランを確認した。いずれも底面が凸凹している。出土遺物はない。

③ 柱穴

P01~21 多くを調査区南側で検出した。地山面でプランを確認した。P15~18やP05・06・09が1列に並ぶことから、当初は建物の柱穴である可能性を想定したが、覆土の色・土性・深さが異なるため、P15~17以外はそれぞれ別時代のもつと判断した。柱痕はいずれのビットにもみられない。

P15~17のビット列は西側が調査区外になるため不明だが、掘立柱建物の可能性もある。出土遺物は細片しかないので、時期は不明である。

(2) 出土遺物の概要 (第76図)

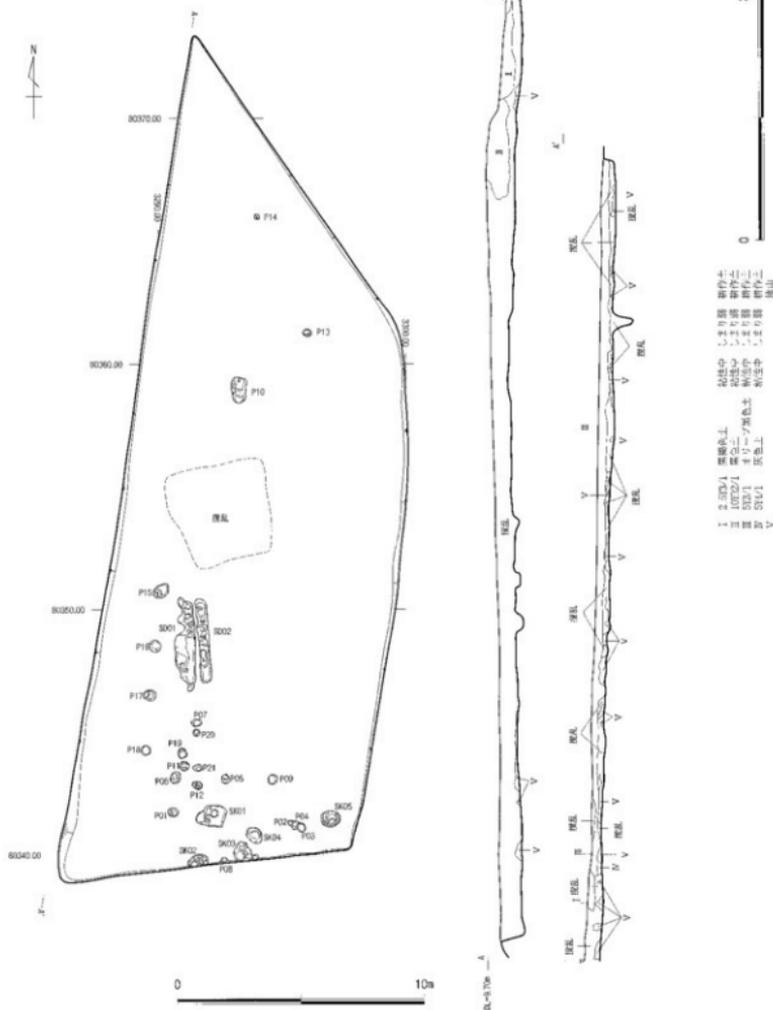
百塚住吉B遺跡からはコンテナ (内寸54cm×32cm×14cm) 1箱分、総破片数109点の遺物が出土した。いずれも遺物包含層・攪乱から出土し、細片が多い。図化できた資料は11点である。弥生時代後期~古墳時代初頭と考えられる土器が5点、7世紀末~9世紀と考えられる須恵器が5点、鉄製品が1点である。

157・158は有段口縁をもつ甕の口縁部だが、口径は復元できない。159・161はそれぞれ壺と甕の底部で、159には赤色塗彩痕が部分的に遺存する。160は高坏の御裾部の端部で、裾が跳ね上がる。欠羽状に施文されている。断面図の左上部分が接合部分で、接合痕を観察できる。162~165は須恵器の蓋である。162には宝珠状の紐が付く。163・164は約20cm程度の大型の蓋である。いずれも破片資料のため詳細は不明だが、7世紀末の遺物と考えられる。166は須恵器の坏である。口縁部径が12cmと、前述の蓋に較べて小型になる。9世紀の遺物と考えられる。

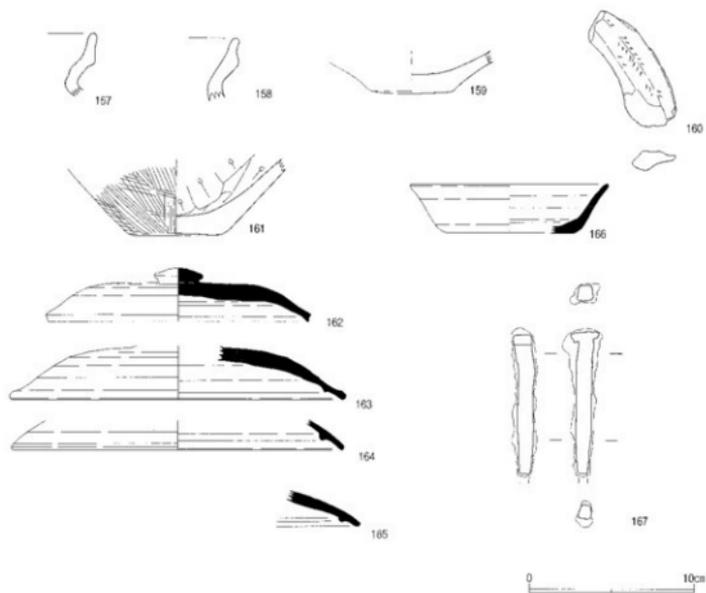
167は角釘である。X線写真による検討を経て作図した。先端部は欠損している。基部はT字形になっている。長さ6.05cm、幅1.6cm、厚さ1cm、重さは9.77gである。(下高)

第14表 遺物観察表

実測図番号	器種	大きさ () 内は復元	色調	焼成・胎土	器形・成形・文様・調整の特徴	備考
157	甕		表 灰白(黄緑) (10YR7/4) 裏 黄 (2.5YR6/8)	焼成 普通 胎土 砂粒多い	有段口縁の1段部。両面ナデ。	断片
158	甕		表 灰白(黄緑) (10YR7/4)	焼成 普通 胎土 砂粒多い	有段口縁の1段部。両面ナデ。	断片
159	壺	底径 (5.1cm)	表 灰黄橙 (10YR8/3) 裏 黄 (2.5Y6/8)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	内外面ともナデ。底部の一部に赤彩がみられる。・残存 底部	
160	高坏	口径 (27.0cm)	黄白 (10YR8/6)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	外面に竹管状工具による建機削突。内外面ともナデ。残存 断片 蓋が僅しく遺存は不明。	
161	甕	底径 (5.5cm)	表 黄白(黄緑) (5YR7/8~10YR7/4) 裏 灰白 (10YR8/2)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	外面は削欠のハケ。内面はミガキ。蓋はやや上げ。残存 底部1/2	
162	蓋	口径 (15.8cm) 器高3.3cm	表 黄緑(黄) (4Y1 (2.5Y5/2~8/1)) 裏 灰黄橙 (10YR3/2)	・焼成 良好 胎土 少ない	内面縁部付近は同軸線ナデ。外面縁部には削欠の 下具痕が残る。蓋型は紐が付く。	残存 1/3 1/8
163	蓋	口径 (20.4cm)	灰黄 (2.5Y5/2)	焼成 良好 胎土 砂粒少ない	口縁部に返しあり。	残存 1/3
164	蓋	口径 (20.4cm)	表 灰黄 (2.5Y) 裏 灰白(黄) (2.5Y6/3)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	口縁部に返しあり。	残存 口縁部 1/9
165	蓋		灰黄 (2.5Y)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	口縁部に返しあり。	断片
166	坏	口径 (6.0cm) 底径3.0cm 器高 (1.5cm)	灰白 (2.5Y8/2)	焼成 良好 胎土 砂粒多い	底部回転ヘタ切。	残存 口縁部 1/4
167	角釘	長さ6.05cm・幅1.6cm 最大厚1cm・重量9.77g			先端部は欠けている。基部はT字形を呈する。	



第75図 遺構全体図・西壁断面図



第76図 出土遺物実測図 (157～167：遺物包含層)

第6項 小結

平成18年度は、百塚住吉遺跡（B・C地区）と百塚住吉B遺跡を調査した。ここでは、遺跡ごとにその様相をまとめ、小結とする。

(1)百塚住吉遺跡（B・C地区）

破片数で総点6681点、遺物収納コンテナ（内寸54cm×32cm×14cm）で41箱の遺物が出土した。その内訳は、B地区が3,663点、C地区が3,018点である。時代別に遺構と遺物について記述する。

①縄文時代

遺構は確認されなかったが、遺物が後世の遺構から数点ずつ出土した。地山中からは出土していない。いずれも混入遺物であり、層位的な分類や遺構の時期決定に供することはできない。

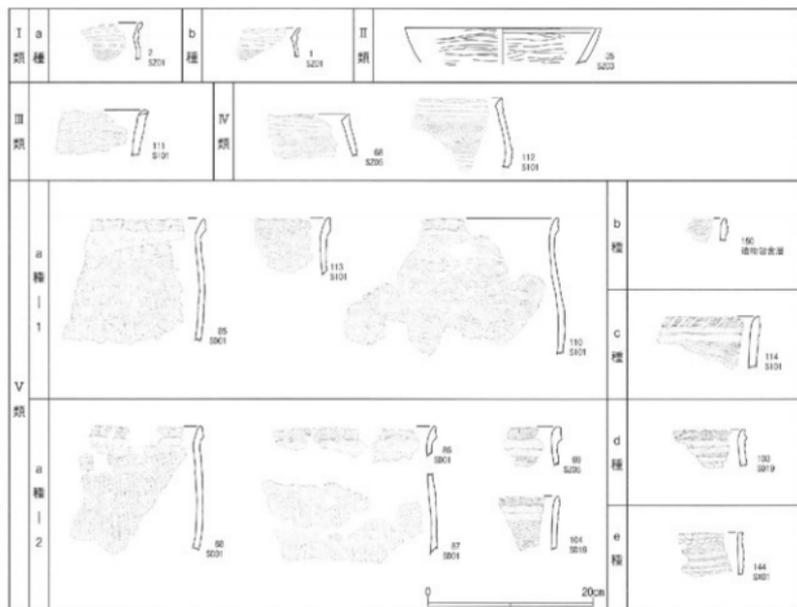
出土土器の個体数が少ないため、両地区出土縄文土器をまとめて分類し、時期設定を行う（第77図）。

I類

縄文時代晩期後半の精製土器で、大洞BC～C1式と考えられる。胎土は黒色で緻密である。東北地方からの搬入品と考えられる。口縁部形態から、次のように細分できる。a種：口縁部が屈曲、外反するもの。波状口縁で口縁波頂部には工具で押し当てた文様がみられる。B地区SZ01周溝覆土から1点出土した。b種：器形はa種と同様である。平口縁で、口縁部には工具で押し当てた痕跡が残り、小波状を呈する。B地区SZ01周溝覆土から1点出土した。

II類

口縁部がなだらかに内湾する浅鉢で、口縁内面に1条の沈線を施す。口唇部はやや内傾するように面取りされている。内外面ともミガキ調整により丁寧に仕上げられた精製土器である。B地区SZ03周溝覆土から1点出土した。



第77図 縄文土器分類図

Ⅲ類

口縁部がやや開く深鉢で、外面を絛条体条痕で横位に調整した粗製土器である。口唇部を上から見ると三角形になるような刻みが施されている。三角形の刻みから、中屋式～下野式の範疇で捉えられる。C地区SI01周溝覆土から1点出土した。

Ⅳ類

胴部が最も張り出して、口縁部が内湾してすはまる器形である。口唇部を内傾するように面取りしている。内外面ともミガキ調整を施している。口縁部が直立し、10cm程度のところで屈曲している。口縁部・屈曲部に3条の並行沈線を施す。精製土器である。C地区SZ05周溝覆土、及びSI01覆土から1点ずつ出土した。

Ⅴ類

在地の粗製土器である。口縁部外面を肥厚させて施文する。口縁部は外反し、胴部が膨らむ器形である。口縁部文様帯の施文種類、口縁部文様帯の下位の凹線から、次のように細分できる。a種-1：口縁部が肥厚し、強く外反する深鉢である。口縁部外面に絛条体条痕で横位に押し引きし、口縁部文様帯を構成する。胴部には縦位、横位に交差させるように絛条体条痕を施す。口縁部文様帯と胴部の間には無文帯がみられる。C地区SD01・SI01覆土から出土した。a種-2：口縁部文様帯は絛条体条痕の押し引きで、口縁部文様帯の下位の凹線を横位に1～2条施すもの。SD01・SI01覆土から出土した。b種：口縁部文様帯に絛条体条痕を斜位に連続して施すもの。破片資料のため横位の凹線の本数は不明である。C地区の遺物包含層から出土した。c種：口縁部文様帯に斜位の刻みを連続して施すもの。破片資料のため不明だが、口縁部文様帯の下位には横位の凹線を数条施す。SI01覆土から1点出土した。d種：口縁部文様帯に円形刺突を施すもの。破片資料のため詳細不明だが、4条の凹線を施している。SI01覆土から1点出土した。e種：破片資料だが、絛条体条痕を地文として口縁部には横位に2列の連続刺突を施し、4条の凹線を施すもの。C地区SX01覆土から1点出土した。

縄文時代の遺物は、以上のように大きく5分類できる。

文様構成から大洞BC～C1期と判断できるⅠ類は、笹川Ⅰ期（中屋式）（財団法人文化振興財団埋蔵文化財調査事業所2006）と同時期と考えられる。また、Ⅱ類も同時期と考えられる。Ⅲ類は下野式が出土していないため、中屋式の範疇でとらえたい。

Ⅳ類は笹川Ⅳ期（長竹式）に相当する。Ⅴ類は神通川東岸、富山空港から東に所在する吉岡遺跡・経力遺跡出土土器（富山県教育委員会2002）に類例が認められる。口縁部文様帯への施文は種類が多数あるが、Ⅳ類と同様に笹川Ⅳ期と考えられる。吉岡遺跡・経力遺跡ではc・d・e種は出土していない。富山県射水市針原東遺跡（小杉町教育委員会1994）でも、Ⅴ類a種-2に相当する土器が1点出土している。当該期の施文パターンの追加バリエーションとなる。

土器の他、打製石斧がB地区から1点（64）、C地区から2点（141・155）出土した。打製石斧に関しては山本直人氏の研究（山本1985）に詳しい。山本氏は石川県の河原石と扁平石の分布が、片面に自然面が残るものと両面に自然面が残るものの分布に一致するとして、遺跡の周辺地域から適した石材を入手していると指摘する。片面にのみ自然面がある64と141は、付近に流れる神通川の河原石を利用して作られたと考えられる。吉岡遺跡出土打製石斧は、報告書に図示されているものは全て自然面が片面にしかないことから64と141と同様の入手方法で製作されたと考えられる。

両面に自然面がみられる155を作るような扁平石材については、山本氏は七尾湾岸に入手先を想定している。扁平石材が吉岡遺跡で出土していないことや七尾湾が東向きに位置していることから、扁平石材は七尾湾岸からもたらされた可能性もある。しかし、現時点では類例が少ないため、資料の蓄積を待って検討する必要がある。

②弥生時代～古墳時代

遺構の重複関係から、SZ05よりSI01の方が古いことがわかる。この点を重視し、SI01が機能してい

た時期（古相）とSZ05が機能していた時期（新相）の2つに大別する。百塚住吉遺跡（B・C地区）の遺構覆土は、遺物包含層を起源とするものが多く、色調差がない。そこで、遺構の時期決定の手掛かりとなる遺物の年代観を主に検討する。

百塚住吉1期（古相：月影式期）の様相

指標となるSI01出土土器のうち、120・123・124・142がSI01底面出土遺物である。120は有段口縁が発達した壺である。有段口縁の確は法仏Ⅱ式期最終段階～月影式期最終段階まで、まれに勅使塚古墳（御富山原文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2003）7トレンチ出土の壺（第78図84）のように古府クルビ式期まで残るようである。123・124の詳細な時期は不明である。

その他の資料に注目すると、115・116とも脚柱部が長い。月影式期の後半になると、脚柱部をあまりもたずに脚部が短くなっていくことから、法仏式期～月影式期と考えられる。117の低脚高坏は月影式期である。118～121の壺の口縁部は法仏Ⅱ式期～月影式期と考えられる。

以上から、SI01の最新遺物は月影式期であり、SI01は月影式期に機能していた遺構と考えられる。

他に、百塚住吉1期に属すると考えられる遺構として、SZ06がある。SZ06出土遺物のうち、周溝底面から出土した土器はない。しかし、SZ06では周溝西側部分で図示できる資料がまとめて出土した。80・81は高坏または器台である。80は脚柱部、81は脚柱部の下段である。80のような長く直線的な脚柱部と81のような段部を有する脚部は法仏Ⅱ式期～月影Ⅰ式期に位置づけられる。79は時期不明である。82・84は甕の口縁部だが、法仏式期～月影式期とまでしか限定できない。最新の月影Ⅰ式期と判断できる80・81は、他の遺物に比べて高い位置で出土しており、82・84の方が底面に近いことがわかる（第58図）。従って、最新の遺物は月影式期を下限とみるのが妥当である。

以上から、SI01とSZ06は共に百塚住吉1期（月影式期）の遺構と判断できる。SX01、SD01・16については、SI01との重複関係から百塚住吉1期、もしくはそれ以前の遺構となる。

百塚住吉1期の指標であるSI01の性格は、①117・118・120・122・123・126といった赤色塗彩された壺などが多数出土したこと、②主柱穴・柱穴・貼床がないこと、③方形周溝墓（SZ06）が隣接することから、日常的に利用された建物（住居）ではなく、SZ06の埋葬に伴う殯居的な建物と考えられる。

百塚住吉2期（新相：白江～古府クルビ式期）の様相

百塚住吉2期の指標は、C地区のSZ05である。前述のとおり、B・C両地区の遺構覆土は色調差がないため、SZ01・03・04についても百塚住吉2期に位置づける。以下では主に出土遺物から検討する。

SZ05は東側4分の1程度が不明である。広・狭式平地住居（岡本2004・久田2007）の可能性も想定して柱穴の有無を念入りに追究したが、確認されなかった。調査区外はすぐに急斜面の河岸段丘となり、後方が続くとは地形上考えられないため、円墳と推定している。SZ05出土遺物はSI01覆土からの混入遺物と考えられるので、遺構の時期決定には適さない。富山県域の類例の一つとしては、富山県南砺市神成遺跡SZ01（南砺市教育委員会2007）がある。神成遺跡13地区では直径10mの円墳の周溝が検出された。月影式期最終段階～古府クルビ式期の高坏が出土している。

SZ01出土遺物はすべてが周溝埋没時の混入遺物であり、遺構の年代推定に供する資料としては適さないものの、3・5は月影式期、4は法仏式期である。最新の遺物は月影式期である。

SZ03も底面出土遺物はない。最新遺物（38）は月影式期最終段階～古府クルビ式期と考えられる。

SZ04は、くびれ部でまとめて出土した3点の高坏（第43図）が遺構の年代を示すと考えられる。17・18は東海系の高坏で、20は在地の高坏と考えられる。18は①坏部の底部内面に段があること、②坏部内面のミガキが矢羽状であること、③坏部が平たいこと、④脚部の穿孔が三ヶ所で三角形になるように配置されていることから、西濃型の範疇で捉えられる。廻間編年（赤塚1990）のⅡ式後半～Ⅲ式前半に位置づけられる。17は変容した東海系土器だが、同時期のものと考えられる。20は坏部が大

型化しているため、月影式期からの在地型式の影響を受けたものと考えられる。脚部が低くなるため、後続型式である白江式期～古府クルピ式期の範疇で捉えられる。

なお、後門部南側の周溝が直線状を呈することから、SZ03と造営時期が近いと考えられる。

以上から、SZ01・03・05から出土した最新の土器は、おおむね月影式期～古府クルピ式期に位置づけられるが、それらの出土状態は造営時期の推定には適さない。しかし、これらが相互に重複せず、覆土も類似していることを重視すると、計画的に造営されていた蓋然性が高い。SZ04が白江～古府クルピ式期の造営と特定できることから、これらは白江～古府クルピ式期に相次いで造営されたと考えられる。

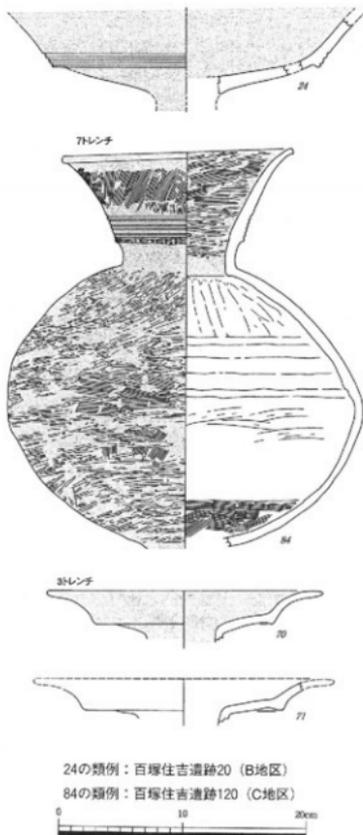
③平安時代

C地区SD19のみが該当する。覆土は黒褐色の細砂～シルトであり、弥生時代～古墳時代の遺構と変わらず、区別できない。SD19の最新の遺物(109)は9世紀と考えられる。107・108もそれぞれ8世紀後半～9世紀初頭と考えられる。以上から、おおむね9世紀代にSD19が機能していたと推定する。

(2)百塚住吉B遺跡

百塚住吉遺跡が弥生時代～古墳時代を主体に形成されたのに対して、百塚住吉B遺跡の今次発掘調査区では平安時代の遺物が多数出土しており、様相を異にする。

むしろ、百塚住吉B遺跡の北に隣接し、9～10世紀の掘立柱建物の一部かと推定されるピットを検出した百塚住吉D遺跡(富山市教育委員会2005)に近い様相と考えられる。百塚住吉遺跡C地区で検出したSD19も含め、百塚住吉B遺跡(今次発掘調査区)は古墳群の北側に広がる平安時代集落の南端と位置づけられる。(下鳥)



第78図 富山市勅使塚古墳出土土器にみられる百塚住吉遺跡出土土器の類例(24・84)と二重口縁壺(財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2003)

第5節 平成19年度調査の成果（百塚遺跡A地区）

第1項 調査の方法と経過

(1) 調査の方法（第79回）

本地区は平成17年度に発掘調査を実施した百塚住吉遺跡A地区南端に接する。南北方向約55m、東西方向約25mの長方形を呈し、面積は1,300㎡である。百塚住吉遺跡A地区では、前方後円墳（SZ01）と前方後方墳（SZ02）の前方部が直交するように接していた。このうち、SZ02が調査区南端に位置していた。本発掘調査にあたっては、百塚住吉遺跡A地区の調査で使用した公共座標に基づいてグリッド等を設定し、記録作業を行うこととした。調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理担当者（以下、監督員と略す）の立会いのもと、本地区における試掘確認調査結果と百塚住吉遺跡A地区の調査結果を踏まえたうえで、基本層序（遺物包含層・遺構検出面）を確認することから始めた。定期的な報告に加え、重要と思われる遺構・遺物の検出時は、監督員と逐次連絡を取りながら調査を進めることとした。

本地区では攪乱が多いながらも、古墳の周溝が存在することが推定されていたため、遺構検出段階からサブレンチによる堆積層の断面観察を多用し、攪乱と遺構残存部の明確化を図ったうえで、慎重に調査を行うこととした。

(2) 調査の経過

本地区には、市道金山新百塚線が含まれる。また、隣接する畑への農耕車の通行を確保しながら調査を行うこととしたため、便宜的に次の3区に分けた。第Ⅰ区：調査区東側農道部分（280㎡）、第Ⅱ区：調査区中央部分（912㎡）、第Ⅲ区：調査区北側市道部分（108㎡）。調査区の設定後、基準点・水準点測量を行ったのち、第Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ区の順で実施した。第Ⅲ区の調査に際しては車両の通行を妨げないよう、第Ⅱ区の調査終了後に第Ⅱ区北側に迂回路を敷設したうえで実施した。

第Ⅰ区 平成19年7月23日から担当調査員の監理下で表土機械掘削を開始、24日に基準杭を設定し、25日に表土機械掘削を終えたのち、人力による遺物包含層掘削・遺構検出・遺構発掘を開始した。調査区の中央から西側一帯に攪乱が広くみられたため、サブレンチを入れるなどして遺構検出面の調査を慎重に進めた。31日に遺構検出写真の撮影を行った。遺構調査は8月20日まで行った。21日にローリングタワーとラジコンヘリを使用して完掘写真を撮影した。

遺構調査中、SD01の底面地山下で黒色土を確認したため、遺構面が2面にわたる可能性を想定し、23日から担当調査員の監理下で機械力と人力を併用して試掘確認調査（深掘り）を行い、下層黒色土の性格を追究した。監督員との協議を経て、当該層は縄文時代晩期の遺物を若干包含するものの、遺構が検出されないことから、第Ⅰ区における遺構面は上部の1面のみと判断した。なお、黒色土を試料として、放射性炭素年代測定（β線計数法）を行い、考古学的検討の材料とした（第4章第5節）。記録作業ののち、8月28日に調査を完了した。29日から埋め戻し、31日に農道復旧を完了した。

第Ⅱ区 担当調査員の監理下で表土機械掘削を8月31日～9月3日に行った。基準杭の設定後、4日から人力による遺物包含層掘削・遺構検出に着手し、11日にローリングタワーを使用して遺構検出写真を撮影した。古墳の調査に際しては、後世の主体部削平時に周溝内に流入した副葬品の有無を追究することを目的に、周溝底面直上層を主体としてグリッドを1m×1mに分割したグリッドメッシュ単位（呼称例は第79回参照）で下部の暗褐色～灰褐色上層のサンプルを採取し、現地でフルイ選別を行った。乾燥後の土壌サンプルは、3種類のフルイ（5mm→2mm→1mm）を用いて、慎重に選別回収を行った。玉類等の副葬品は検出されなかったが、自然遺物（種実遺体）を若干検出できた。古墳造営当時の古環境復元に供するため、種実遺体を同定した（第4章第6節）。遺構出土遺物はトータルステーションによる三次元計測を行い、記録作業（図面・写真）の後に取り上げた。遺構の調査は10月8日に終了し、ラジコンヘリによる空中写真撮影・測量を9日に実施した。全景写真はローリングタワーを使用して撮影し、第Ⅰ区で確認された地山下層の黒色土の有無と、西側調査区外に伸

びるSZ04・05の周溝形態の確認を目的とした地中レーダー探査を行った（第4章第7節）。

第Ⅲ区の調査に先立つ市道迂回路敷設部分（第Ⅱ区北端部：220㎡）の終了確認検査（10月17日）後、当該部に迂回路を敷設した。残り692㎡の範囲は、引き続き古墳の断ち割り調査および補測などの記録作業を実施した。断ち割り調査用トレンチ内の地山（Ⅳ層）から縄文土器が出土したため、機械力と人力を併用して試掘確認調査（深掘り）を行った。その結果、縄文時代の遺物を若干包含するものの、遺構は認められず、下層の黒色土層が北方向に向かって下がっていくことが確認され、地中レーダー探査結果を追証することとなった。監督員との協議を経て、第Ⅱ区の遺構面も1面のみと判断した。

第Ⅲ区 10月18日に担当調査員の監理下で重機による市道路盤除去を実施した。第Ⅲ区の迂回路への進入部にあたる部分（約2㎡）は、通行車両の安全確保のため、最優先で調査を行い、監督員立会いの下で遺構検出作業を行った。遺構は確認されず、写真撮影後、終了確認検査を経たのち埋め戻し、安全対策を講じた。路盤除去は19日に終了した。遺構の検出および調査は19日から23日まで行った。トータルステーションによる測量を22・23日に実施し、24日には高所作業車を使用して全景写真撮影を行った。

なお、第Ⅱ区の成果を受けて、第Ⅰ区のSZ01周溝北辺の再調査を行った。当初は夏の強い日差しの下での調査だったため、周溝北辺を検出できなかったことによる。従って、空撮写真および空撮写真から作成した平行投影（オルソ）写真には再調査で検出した周溝が写っていない。

24日、第Ⅱ区とあわせて終了確認検査を経て、25日に第Ⅲ区の埋め戻しおよび市道復旧工事を開始した。30日の市道復旧後、直ちに供用開始した。31日に現地調査事務所や器材車などの仮設プレハブを撤去し、清掃等の後片付けを行った。11月7日に監督員立会いの下で道路用地外の迂回路用地の復原を行い、地権者の承認をもってすべての発掘作業を終了した。

(3)整理等作業の経過

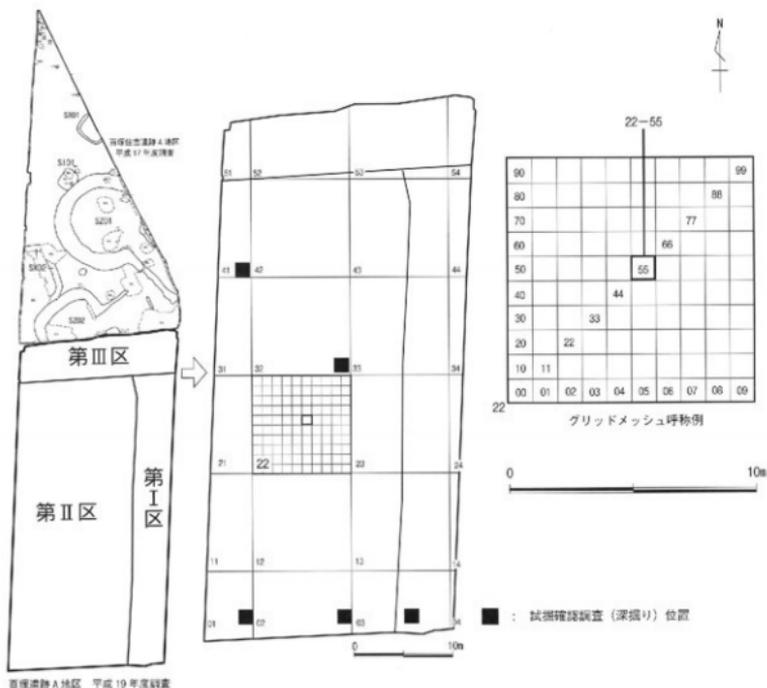
発掘作業終了後、本格的な出土品整理・報告書原稿作成を11月から開始した。遺物出土地点など現場記録データの精査を行い、取り上げ番号の確認と補正後に注記作業を行い、12月3日に終了した。分類・接合作業は、注記終了と同時に開始し、復元・実測作業は12月10日から接合作業と並行して行った。その間、監督員と協議のうえ、報告用遺物の選別と実測図の点検を行うと共に、保存処理を要する遺物を選定し、その処理を行った。石膏充填による土器の復元・補強作業は1月20日に終了した。監督員の指示のもと、細部補正を施した。トレース図化は2月末に終了した。遺物の写真撮影は3月初旬に実施した。記録図面の図化・校正は11月末から2月に行い、同時に遺構に関する現場所見の整理を行った。その他、遺構台帳・遺物台帳・写真台帳を作成した。（小柳）



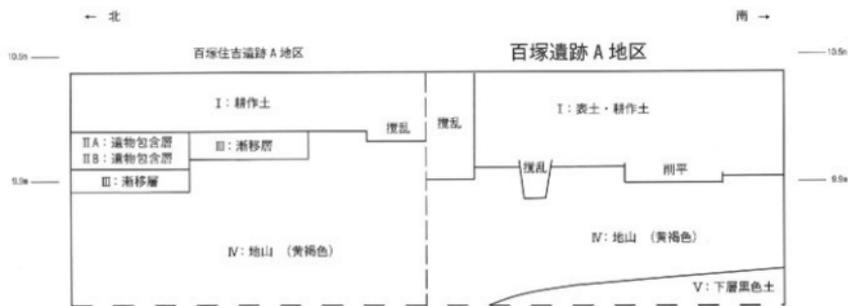
発掘調査作業風景



現地説明会



第79図 調査区・グリッド呼称



第80図 基本層序概念図

第2項 基本層序 (第80図)

基本層序の確認は、本地区の試掘調査結果とともに百塚住吉遺跡A地区の調査結果を踏まえて行った。第Ⅰ・Ⅱ区は、調査区断面で堆積状況の観察を行った。上位は、表土（農道および碎石による整地層など）を含む耕作土である。これは、百塚住吉遺跡A地区のⅠ層（耕作土）に対比される。下位は地山で、百塚住吉遺跡A地区のⅣ層（地山）に相当する。第Ⅰ・Ⅱ区北側は最近まで墓地・畑地として利用されていた影響で攪乱を被っている。また、第Ⅱ区の中央には、土取りによると思われる幅約5mの削平が南北方向に認められた。

第Ⅲ区は百塚住吉遺跡A地区との境界にあたる。市道路盤のほか、水道管・下水管敷設工事により地山まで攪乱を被っていた。百塚住吉遺跡A地区ではⅡ層（遺物包含層）およびⅢ層（漸移層）が北部のみに存在し、耕作などの影響により中央部から南部にかけて薄くなり、南端には存在しない。本地区は百塚住吉遺跡A地区南端と同じ状況である。本調査区では遺構覆土の上位にのみ、Ⅱ層を起源とする自然堆積を認めることができた。

なお、後述するように、SD01底面で地山下に黒色土が確認された。黒色土の放射性炭素年代測定（ β 線計数法）の結果、暦年較正年代がcalBC5,058-calBC4,944（ σ ）とされ、黒色土の形成開始が約7,000年前よりは古いとされた（第4章第5節）。黒色土上面は、北方に向かって下がっていくことが地中レーダー探査と試掘確認調査（深掘り）によって確認された。（小柳）

第3項 検出遺構の概要

検出した遺構は、前方後方墳2基（SZ02・05）、方墳2基（SZ01・03）、方形周溝濠2基（SZ04・06）、溝2条（SD01・02）、性格不明遺構1基（SX01）である。ここでは、各遺構について詳述する。

(1)古墳

前方後方墳 SZ02 (第82～84図) 百塚住吉遺跡A地区で検出したSZ02の続きの部分である。百塚住吉遺跡A地区での概略は次の通りである。

周溝: おおむね上面幅約1.3m、底面幅約0.5m、深さ約0.4m、底面標高は9.5mである。後方部北側地点では深さ約0.9m、底面標高は9.08mである。北側くびれ部の周溝は上面幅約2.0m、底面幅約0.4m、深さ約0.84mで、底面標高は9.1mである。前方部の周溝はくびれ部から約2m地点を境に前端に向かって急激に立ち上がり、その先はさらに浅くなって（上面幅約0.5m、底面幅約0.3m、深さ約0.1m、底面の標高9.85m）3.5m続く。前方部前端の周溝は底面のみ確認した（長さ約3.0m、幅約0.3m、深さ約0.1m、底面の標高は9.82mで前方部北側周溝とほぼ同じ）。

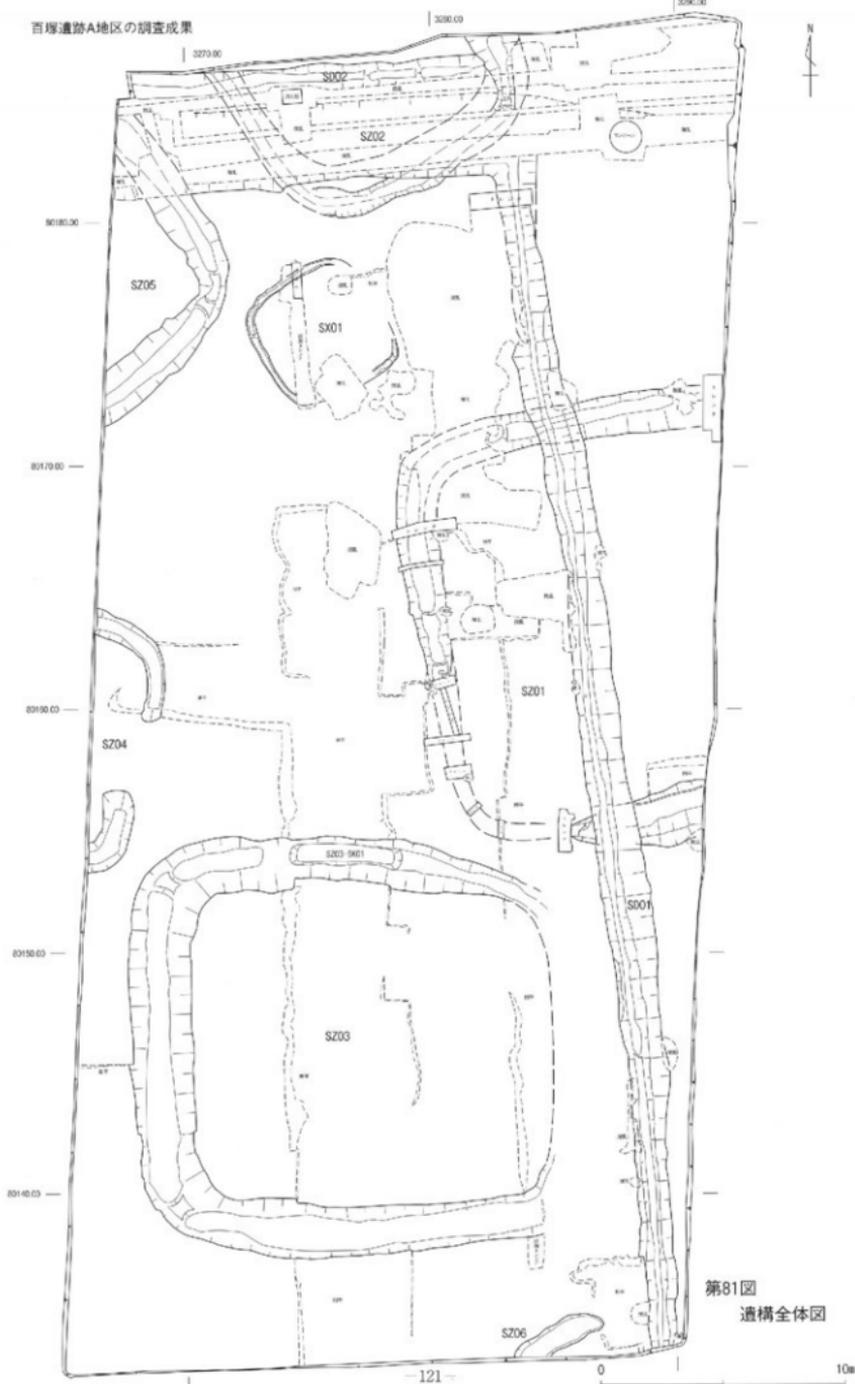
前方部前端周溝の北側の地山面の標高は9.94m、南側（攪乱範囲外）の地山面の標高が9.9m前後であることから、前方部隅角の周溝底面は、他の部分に比べて高かったと推定できる。

周溝覆土: 上位（1・2層）がⅡA層起源の褐色砂質土、3層がⅡB層起源、中位（4層）は崩落土、下位（5・6層）は黒褐色土、地山混じりの黒褐色土からなる。このうち4～6層が初期の堆積で墳丘盛土からの崩落土を含む。前方部前端の周溝覆土は前方部北側周溝と同質である。

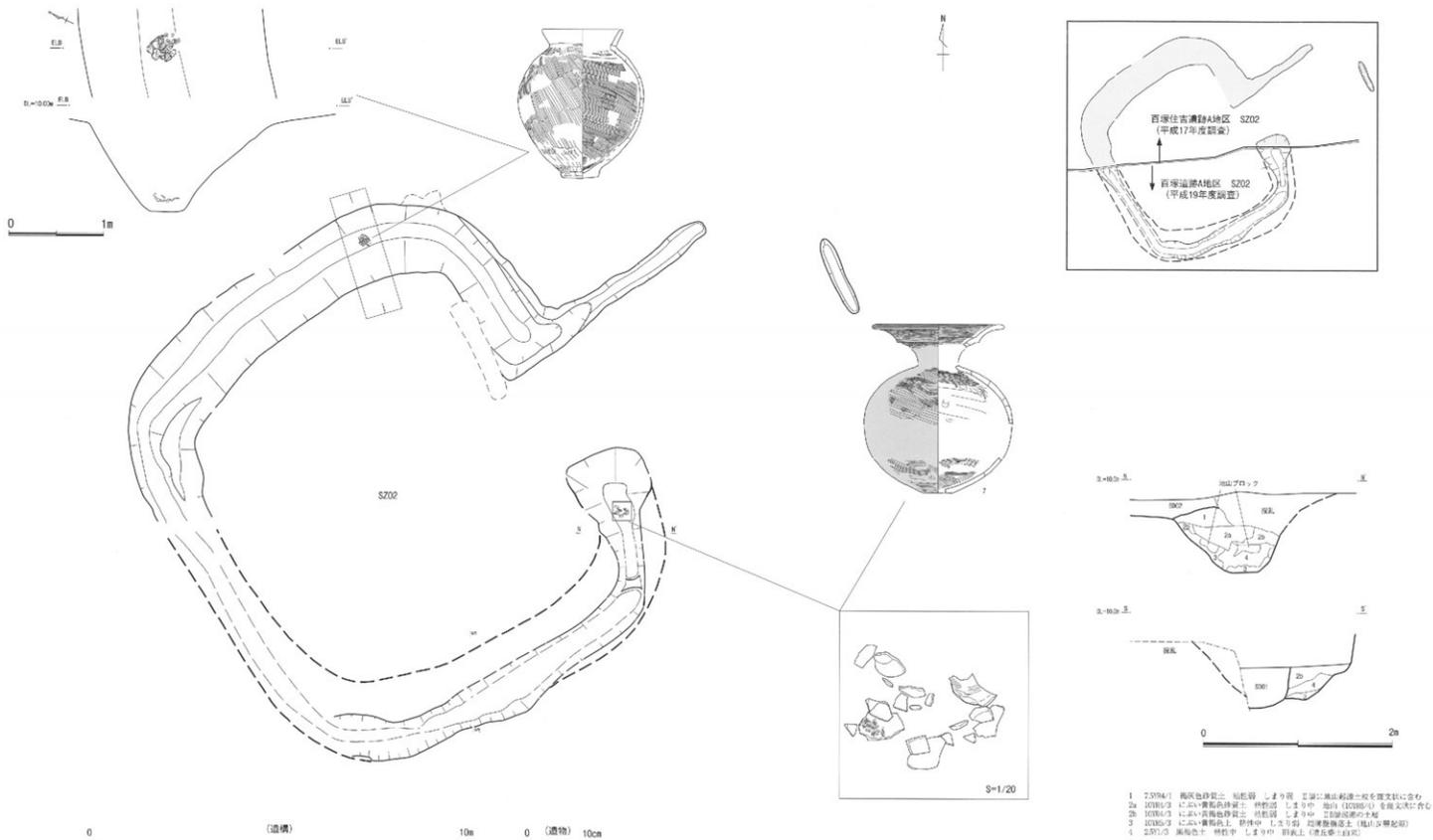
出土遺物: 周溝底面付近（4層）で、墳丘盛土の崩落とともに転落したと判断されるほぼ完形の壺が出土した。埋葬儀礼に使用された供献土器と推定できる。

百塚遺跡A地区では、市道路盤除去後の地山面で残存する後方部周溝の西側を検出した。検出時の標高は北東で9.50～9.67m、北西9.57m、南9.03mと、後世の攪乱および削平深度により異なるが、おおむね百塚住吉遺跡A地区より0.2m程度低い。主体部や墳丘盛土、旧表土は完全に削平されている。後方部後端の周溝底面は痕跡がわずかに認められるのみだが、後方部南西隅・南東隅を確認できたことで、百塚住吉遺跡A地区の調査所見と総合して古墳の規模・平面形が明らかになった。

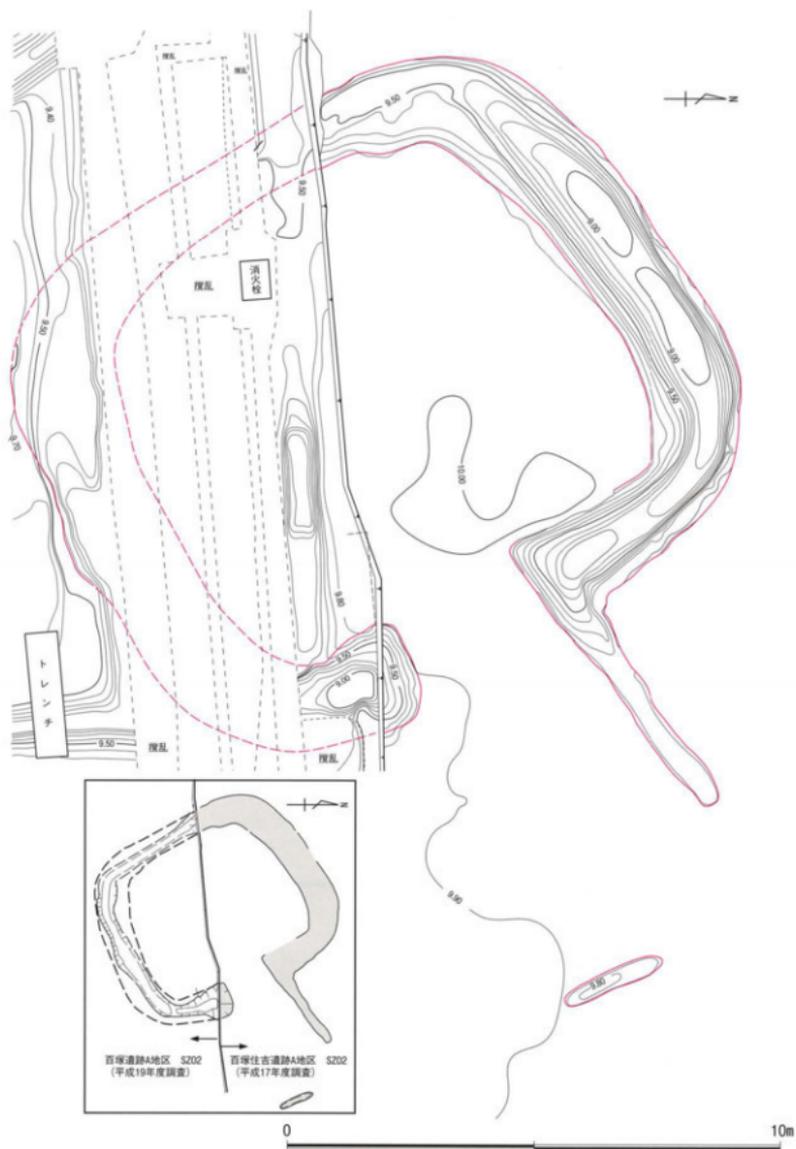
墳丘主軸は南西-北東方向（N-61°-E）である。前方部は、前方部北西辺と同様の覆土堆積がみられる小溝を一連の周溝と判断し、ここを前端と認定する。主軸長は周溝内法で17.3mである。後



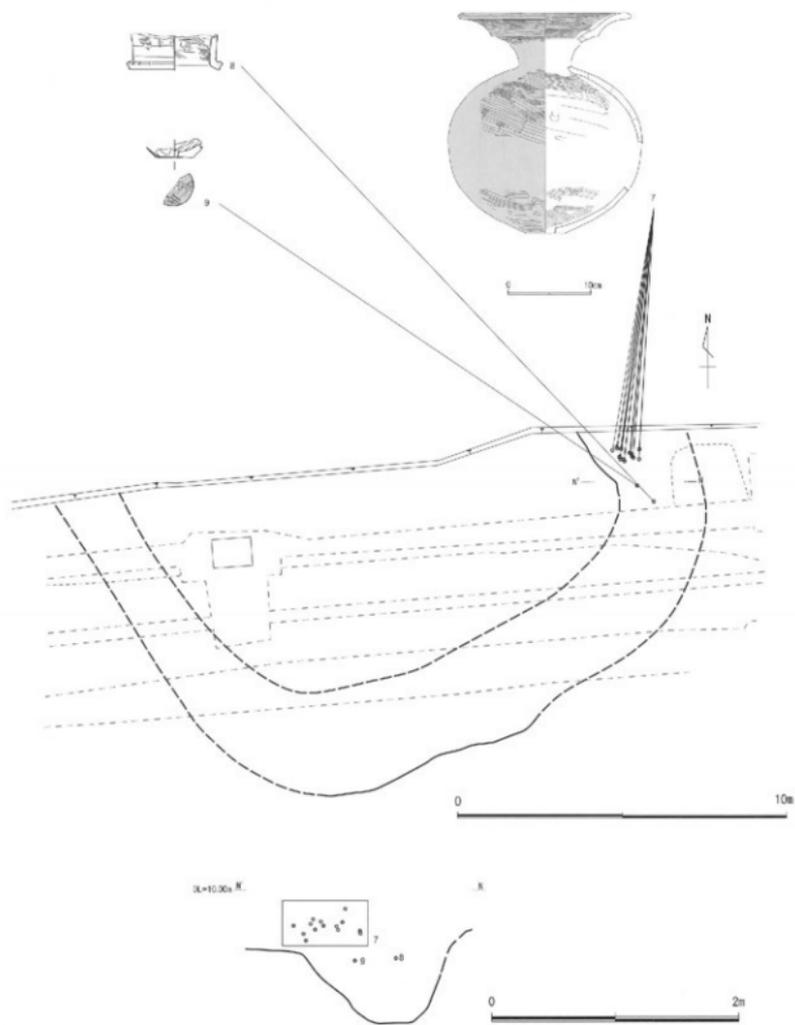
第81図
遺構全体図



第82図 百塚住吉・百塚SZ02平面図・断面図



第83図 百塚住吉・百塚S202等高線図



第84図 百塚SZ02遺物出土状態

方部長は8.5m、後方部最大幅（周溝内法）は確認長約10.5mで、幅広を呈する。周溝南東隅は残存する上面幅約0.7m、底面幅約0.3m、検出面からの深さは約0.2mである。ただし、これは削平の結果であり、本来的には百塚住吉遺跡A地区で検出された周溝と同程度の規模と考えられる。周溝はこの南東隅から北のくびれ部に向かって急激に落ち込む。底面直上で黒褐色土が確認され、それは百塚住吉遺跡A地区で確認した5・6層（墳丘盛土の崩落土）に相当する。また、やや北側の上位の覆土（褐色土）は百塚住吉遺跡A地区で確認した4層（墳丘盛土の崩落土）に相当する。この褐色土層から赤色塗彩された壺（7）の破片がまとまって出土した（第84図）。百塚住吉遺跡A地区の壺（第18図28）も同様の堆積層から出土したことから、本墳では2個体の供献土器が存在したことになる。南西隅では、残存する底面から墳丘斜面の立ち上がり部分をかろうじて検出できた。周溝底面の幅は約0.6mで、底面の標高は9.42mである。

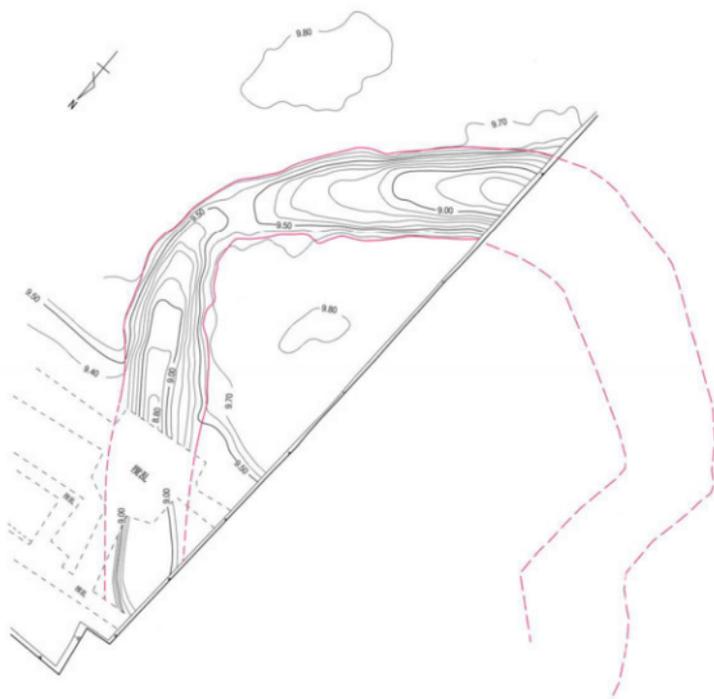
SZ05（第85～87図） 調査区の北西隅に位置し、SZ02の南西側に隣接して位置する。直角に折れる周溝を検出した。周溝は調査区外に伸びる。検出時の標高は北部で9.6m、中央部9.8m、南部は9.7mである。墳丘盛土および旧表土、主体部はすでに削平され、遺存しない。確認した周溝の規模は内法で北西-南東が6.8m、北東-南西は5.2mである。上面の最大幅は1.85m、当該部分の底面幅は0.54mである。検出面から底面までの最大深は0.91m、底面の標高は8.79mである。隅角部分の周溝は浅く、深さは0.4m（底面標高9.35m）となり、確認した最大深との比高差は0.56mとなる。周溝は隅角から両辺中央に向かって深くなる特徴をもつ。このような特徴はSZ03にも認められるが、SZ05はその傾向がより強い。

周溝覆土は上位に黒色土・褐色土、中位から底面にかけては地山崩落土が混じる黄褐色シルトである。墳丘側の壁際には地山ブロック（周溝壁の崩落土）が混入している。

周溝からは壺・甕・高坏・蓋、鉄鏝が出土した。土器の多くは破片状態で、覆土上位から中位にかけて出土した。底面付近からも出土している（第87図）。主なものとしては、南東隅のやや北側で比較的集中して出土した高坏の坏部破片（27・28・29）がある。北側覆土中位から鉄鏝が先端部を西に向け、水平な状態で出土した。底面付近からは鉄鏝の下位で高坏の坏部片（30）が出土した。これからやや北に離れたところで、蓋（32）がつまみ部分を下に向けて傾いた状態で出土した。周溝南西辺中央部の底面付近では、甕のL縁部破片（18）が出土した。底面付近出土土器は覆土上位ないし中位出土の破片のものに比べ、器形などある程度識別できる。

確認した周溝の規模・形態からSZ02等との対比を行うため、調査区外に伸びる隅角を含めた周溝形態の追究を目的として、西側の畑地で地中レーダー探査を行った。その結果、市道付近でくびれ部と思われる反応があり、北西方向に前方部を配する可能性があると推定された（第4章第7節）。ただし、市道下の既設埋設管の影響が強く、前方部周溝全体の形態は不明である。後方部は内法の確認長で約8m、幅が内法で約10m、主軸は北西-南東（N-44°-W）と推定された。調査区で検出した周溝は、後方部の南東隅に相当する。以上から、SZ05はSZ02と同様に前方後方形を呈すると判断できる。（小柳）

方墳 SZ01（第88～90図） 調査区東側に位置する。表土除去後、地山面でも黒色ないし褐色の周溝ブランを検出した。主軸（南北方向）はN-10°-Wである。検出面の標高は周溝南西部で9.60m、墳丘中央部で10.04m、周溝北西部で9.92mである。北西部は最近まで墓地として利用されていたことが、出土品（ビニール製品・缶・瓶）からうかがえる。道路用地買収に伴う墓地移転工事の影響により、当該部の周溝底面は確認できなかった。墳丘規模は周溝内法で南北18.3m、東西は残存長で15.5mとなる。なお、周溝は調査区東壁まで続いており、北東隅と南東隅は調査区外に存在することが明らかである。周溝は比較的遺存状態が良好な西側で上面幅1.7m、底面幅0.8m、検出面からの深さは0.7mである。覆土は下層が地山崩落土（周溝壁面の崩落土？）を含む褐色土で、中位から上層にかけては黒みを帯びた堆積状態と、百塚住吉遺跡A地区のII層と対応する土層を示す。



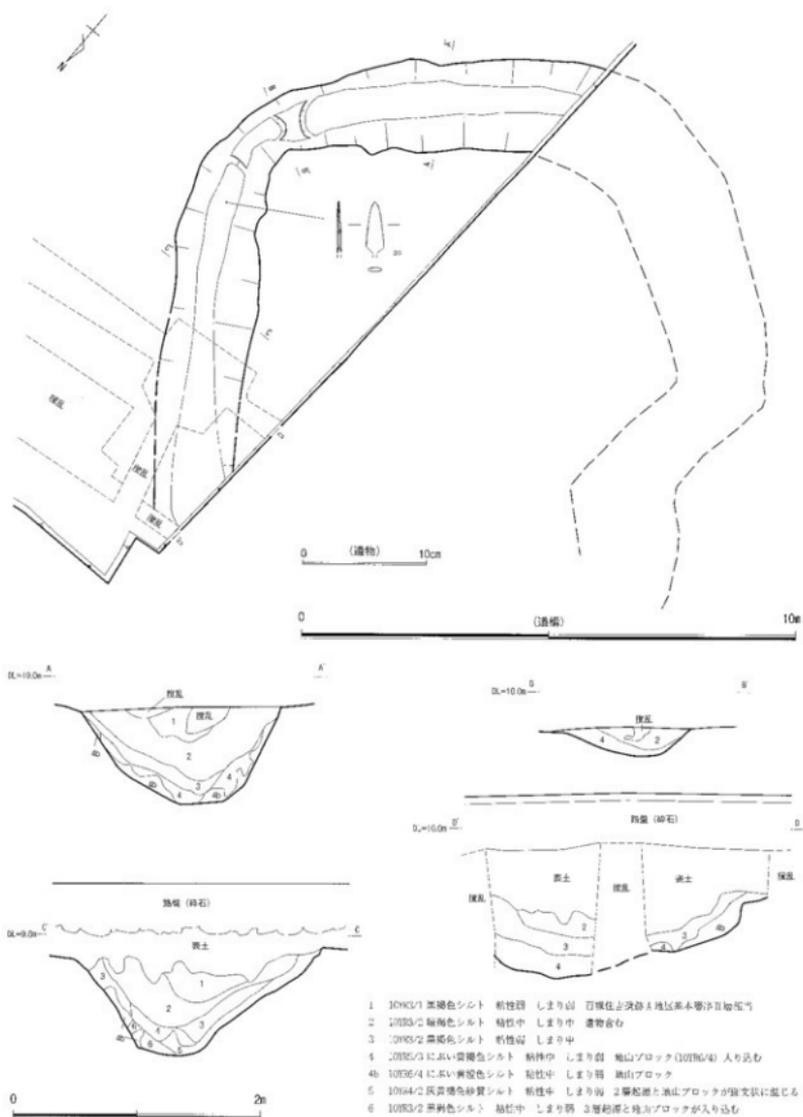
点線は地中レーダー探査による推定（第4章第7節）



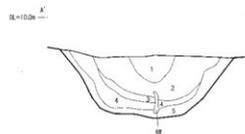
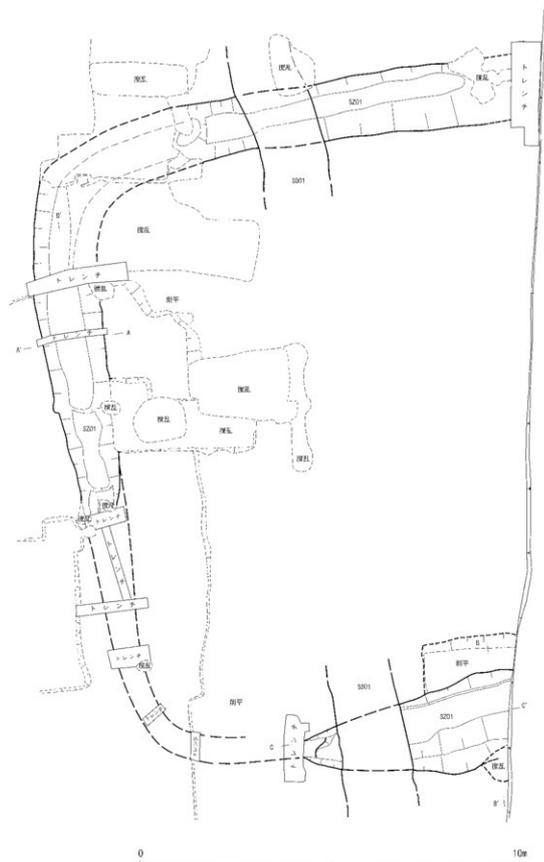
第85図 SZ05等高線図

遺存状態は悪いものの、周溝の南西隅・北東隅付近ではそれぞれ底から壁の立ち上がりが認められる。周溝南辺は他と異なり、墳丘側斜面が急角度（73°）である。周溝東辺が調査区外に伸びているため、今次発掘調査のみでは墳形を確定できないが、墳丘規模や周溝覆土の様相は後述するSZ03と類似しており、方墳の可能性が高い。墳丘盛土や旧表土は削平されており、主体部の痕跡も確認されなかった。

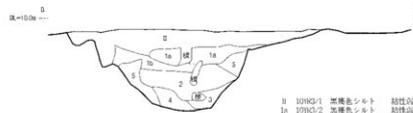
出土遺物はわずかである。主に周溝覆土堆積時に周辺から混入したと考えられる土師器片が中位に散在するのみで、器形全体がわかるものはない（第90図）。この他、同形同大の管玉2点（5・6）・人工物とみられる石片1点がある。これらは周溝北辺中央、周溝外縁のほぼ同じ高さ（底面から6cm上）から出土した。管玉は、その出土状態から、主体部の削平時に流れ込んだものと考えられ



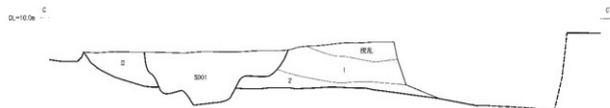
第86図 SZ05平面図・断面図



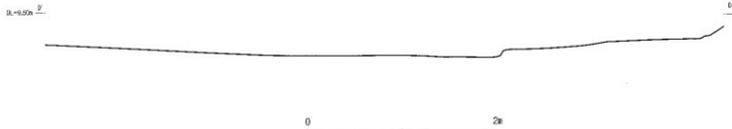
- 1 10N3-1 黒褐色シルト 粘性質 しまり弱 建物残存も 土留部分で崩壊し基本層が露出
 2 10N3-2 黄褐色シルト 粘液中 しまり中 木の根が入る
 3 10N3-3 赤褐色シルト 粘液中 しまり中
 4 10N3-4 におい黄褐色土 粘液中 しまり中 土山ブロックが露出
 5 10N3-5 灰赤褐色シルト 粘液中 しまり中 土山ブロックが露出に感じる



- 1 10N3-1 黒褐色シルト 粘性質 しまり弱 建物残存も
 1a 10N3-2 黄褐色シルト 粘性質 しまり弱 土
 1b 10N3-5 におい黄褐色土 粘液中 しまり中 土山ブロックのブロック
 2 10N3-2 黄褐色シルト 粘液中 しまり中 木の根が入る
 3 10N3-3 赤褐色シルト 粘液中 しまり中
 4 10N3-4 におい黄褐色土 粘液中 しまり中 土山ブロックが露出
 5 10N3-5 灰赤褐色シルト 粘液中 しまり中 土山ブロックが露出に感じる



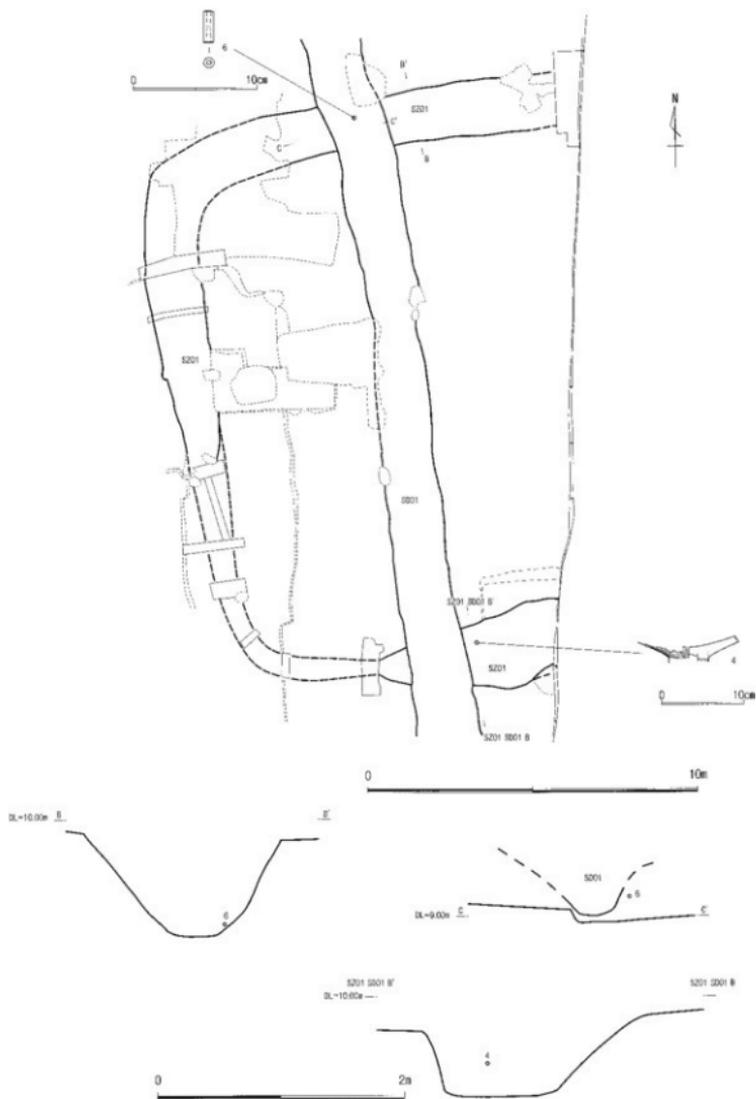
- 1 10N3-1 黒褐色シルト 粘性質 しまり弱 建物残存も
 2 10N3-2 黄褐色シルト 粘液中 しまり中 木の根が入る



第83図 S201平面図・断面図



第89図 SZ01等高線図



第90図 SZ01遺物出土状態

る。底面近くから出土したとはいえ、管玉出土層位に他の遺物も認められないため、周溝への崩落時期（主体部の削平時期）は不明である。（後藤太一）

SZ03（第91～93図） 調査区南側に位置する。表土直下で検出した。北東約1.3mにSZ01、北西約1.0mにSZ04が位置し、3基は重複しない。検出時の標高は南西部10.02m、中央部10.04m、北西部9.92mである。墳丘盛土および旧表土、主体部はすでに失われている。調査区全体にわたって幅約5mの削平（土取り）が南北方向に縦断しており、中央部では周溝の北・南辺中央上面が削られている。東半部は長手作付けなどのため、さらに20～30cm深く削られていたものの、南東隅で周溝底面を検出できたため、墳丘の規模や形態を推定することが可能となった。周溝は北辺東側から東辺に向かって狭くなる。これは、南東隅やSZ01との位置関係から、北東隅付近であることを示す。

墳丘規模等の観察は遺存状態がある程度良好な地点で行った。墳丘は、周溝内法で南北長12.4m、東西確認長14.4mであり、東西に長い方形を呈する。主軸方位はN-92°-Wのほぼ東西方向を示す。

周溝北辺は上面幅約1.74m、底面幅約0.4m、検出面からの深さ（以下、深さとする）約0.65mである。底面は狭く、標高は9.23mである。北西隅は上面幅約2.3m、底面幅約0.4m、深さ約0.55mである。底面は狭く、標高は約9.5mである。周溝西辺は上面幅約2.6m、底面幅約0.8m、深さ約0.7m、底面の標高は9.3mである。南西隅は上面幅約2.4m、底面幅約1.0m、深さ約0.48m、底面の標高は9.65mである。周溝南辺は上面幅約2.4m、底面幅約1.0m、深さ約0.45m、底面の標高は9.44mである。底面のみ確認された南東隅は標高が9.66mと高い。この地点と北辺最深部との比高差は約0.4mである。

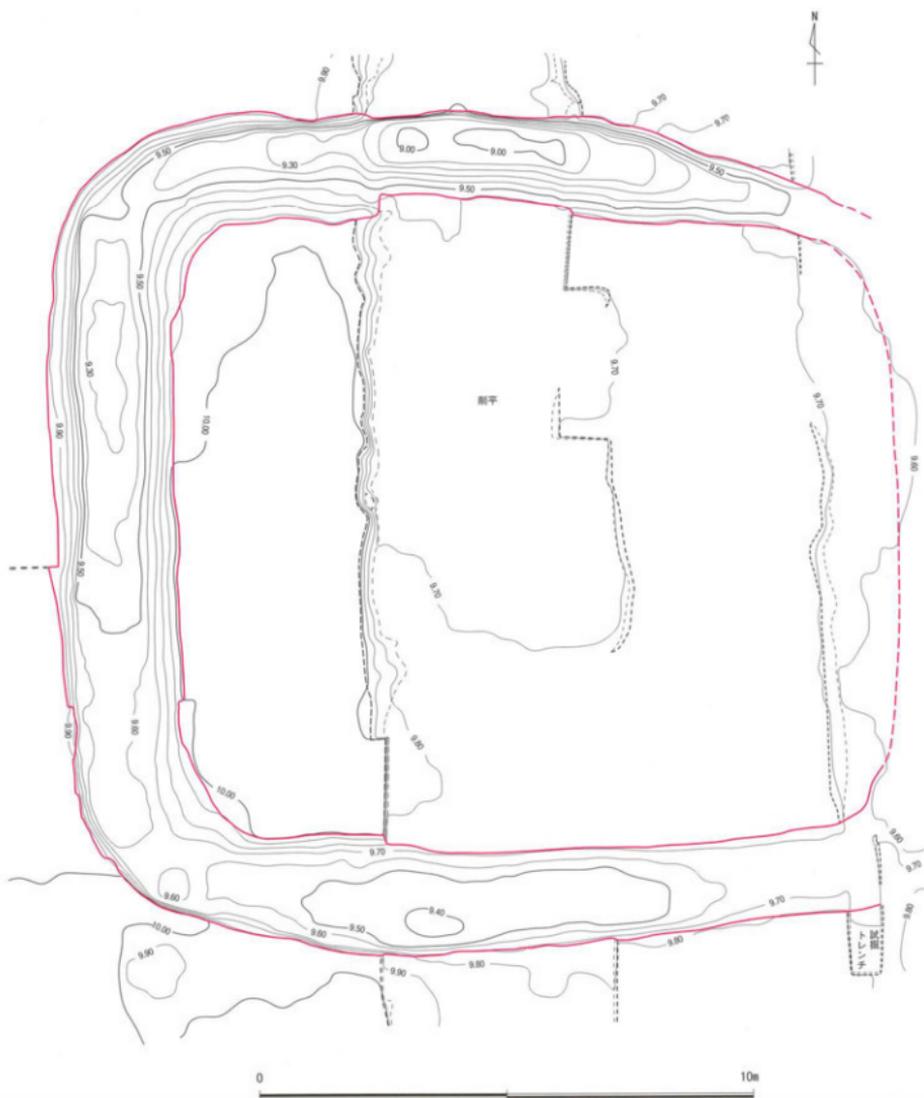
周溝北辺東側の底面は狭くて深い。周溝の断面形は墳丘側の壁が緩やかに立ち上がり、墳丘外方向はほぼ直立する。周溝北辺西側から北西隅にかけては、底面が墳丘外方向に向かって緩やかに下がる。周溝西辺は周溝北辺に比べ、墳丘外方向の壁がやや緩やかに立ち上がる。周溝南西隅は、北西隅と同様に底面が墳丘外方向に向かってやや下がる。周溝南辺の断面形は皿状を呈する。周溝は北辺が深く掘り込まれ、西辺から南辺は浅い。底面の起伏があり、辺の中央で低くて隅角に向かって高まる傾向が認められる。

周溝覆土はおおむね上位から黒色土・褐色土（1・2層）で、1層は百塚住吉遺跡A地区の基本層序Ⅱ層に相当する。中位から底面にかけては地山混じりの褐色土（4～6層）からなる自然堆積である。地山混じり褐色土（5・6層）は墳丘側の壁から底面にかけてみられ、遺物を含む。墳丘盛土からの流入土で、初期堆積層と考えられる。なお、3層の灰黄褐色シルトは周溝北辺NE-NE'・NB-NB'ライン周辺にしか認められず、両地点とも覆土中位に比較的大きな地山ブロックが存在した。SZ03-SK01の位置に近い部分でもあり、詳細は後述する。

周溝覆土中位～下位にかけて土器破片が出土した。その多くは土師器である。この他、縄文時代の土器破片や石器が少量出土した。攪乱による混入品と思われる。周溝南辺の中央やや西よりで、壺・鉢などの破片がまとまって出土した。大小の破片が覆土中位（2・5層）から底面にかけて出土し、赤色塗彩された壺および鉢の破片は縦位・斜位に傾いていた。これらはその出土状態から、上方（墳丘側）から周溝へ流入した破片と推定できる。北西隅やや南西で同一個体と思われる数点の小破片が底面直上から出土した。

SZ03-SK01（第92図） 周溝北辺中央の底面を精査した段階で検出した。他遺構の周溝底面の起伏とは様相が異なり、周溝壁面を削るか、または掘り込んでいることから、土坑と判断した。長軸約4m、幅約0.5mの長方形を呈し、周溝底面からの深さは約0.1mである。土坑底面はほぼ平坦で、標高は約8.9mである。断面形は箱形を呈する。

覆土は1層である。遺物は出土していない。周溝検出時にプランは検出されず、覆土観察用ラインが土坑の中央からはずれたため、周溝覆土との関係の詳細には検討できなかったが、前述のように土坑の東側（NE-NE'ライン）および西側（NB-NB'ライン）には、他には認められない3層と比較的大きな地山ブロックを含むという特徴がある。NB-NB'ラインでは周溝の壁面近くの2層中にか



第91図 SZ03等高線図